札幌学院大学経済論集（2017）第 12 号　43-132

〈研究ノート〉

エラスムスの『エンキリディオン』と彼の人間観ならびにその社会観

―― 知識人の人間観ならびに社会観（1）――

His Views with Human Nature and Social Relationship in Erasumus's『Enchridion』

―― His Views of Human Nature and Social Relationship ――

久保田　義　弘

本稿の要旨

本稿では，中世の思想家であり，宗教家でもあり，そしてヒューマニストであったデシデリウス・エラスムス（Desiderius Erasmus，1466/1467 年生-1536 年没）の言葉を通して，彼自身が人間をどのように捉えていたのか，あるいは社会をどのように見ていたのか，同時に，彼自身が日常的に接していた現実の一般大衆（後の 17 世紀には市民革命後の主役となる大衆）をどのようにみていたのかについて考察する。

本稿では，特に，エラスムスの著作である『エンキリディオン』（『戦うキリスト者の短剣』，あるいは『キリスト教兵士提要』と翻訳されている）を通して，中世の大家として知られるエラスムスが人間をどのように位置づけ，大衆をどのようにみていたのか，さらに社会をどのようにみていたのかについいて考察する。

キーワード：キリストに倣う，キリストのからだ（キリストの体），二十二の教則，特殊な悪徳に対する救助策，キリスト教的哲学，内的人間と外的人間，キリスト教の武器，

は じ め に

第 1 章では，エラスムスによって，新約聖書（福音書や使徒の手紙）に証されているキリストに倣って人として生きることが善として展開された思想・哲学を考察する。すなわちエラスムスが生きていた時代，すなわち「この世」がキリストの生き方とは真逆で転倒していることを説いている彼の思想・哲学を考察する。

第 1 章第 1 節では，キリストの知恵と比較して「この世」の知恵の危うさが示され，「この

世」から離れ，キリスト（キリストの知恵）に倣うことを説いた彼の言葉を考察する。エラスムスは，「この世」では，平和に日常生活を送っていると人々が誤って認識し，快楽や悪徳に対して無防備になっていると警告し，さらに神の対抗者である不敬虔な者に向かって「不敬虔な者には平和は存在しない」と非難し挑戦している。このことから推察するに，エラスムスの敵意は，「この世」の不敬虔な者に向けられていると推断できる。

エラスムスは，その不敬虔な者から攻撃され，それから自身を守ることを訴えるだけではなく，自身の心の内では悪徳の攻撃にさらされる，と警告している。エバに誘われて快楽のために知恵の実を食べるアダム（最初の地上的なアダム）のようにならないことを求め，エラスムスは，魂の死あるいは魂の病が「この世」おいて迫りくることに杞憂し，心自体が悪霊に支配されることがないように監視する必要性を訴えている。

エラスムスは，「この世」の悪徳・悪魔に惑わされることなく，同時に自身が「魂の死あるいは魂の病」に陥ることなく生活できるとき，悪魔の支配する「この世」に勝利し，「魂の不死性」を得ていると言う。そして，実際，自身が敵と無傷で渡り合っているのではなく，「むしろ私たちのかしらなるキリストにあって勝利しているのであり，キリストにより敵は疑いなく再度打ち負かされており，また私たちにおいても打ちまかされている」とエラスムスは説いている。故に，キリストに倣う生活が最高であると考えるエラスムスには「この世」との戦いの結果はいつも勝利となる。すなわち，自身が「キリストのからだのなかにあり，そのかしらによってすべてをなしうる」と説いているエラスムスは，私たちが「キリストのからだのなか」にあり，その「かしらによってすべてをなしうる」と考え，キリストの導きによって，キリスト者が「この世」の誤りから逃れて，「霊的な生活の純粋な光に達することが容易になる」と確信しているのである。

エラスムスは，人間研究からはいって，次に，人間の脆さゆえに，「キリストに倣う」ことことを説いている。エラスムスは，はじめに，人間を「一種の神性のような魂」と「あたかも物いわぬ獣」の二部分に分け，前者の魂の部分では「神性にあずかるものであり，天使の心」を超えて高まり，そして「神と一つになる」ことができると言う。後者の獣の面では，他の動物に勝ってはいなく，すべてにおいて獣に劣っていると言う。

本稿の第１章第２節以降では，エラスムスによって提示された，「二十二の教則」を紹介し検討する。ここでは，それぞれの教則をついて簡潔に説明する。

（１）第一の教則は，聖書を知り，キリストを信じることによって，悪徳から遠ざかり，永遠の生命（不滅の生命）が与えられることである。

（２）第二の教則は，「確固たる決意をもって，心を尽くして，確信に満ちた，かつ，剣士のような心持ちで救いの道を取り，キリストのために財産と生命を損失する覚悟でいる」

というものである。これは，「神の国」（「天国」）のキリストに向かうことである。人（すなわち，多くのキリスト教徒）には，二つの道があり，一つは情念に仕えて破滅へ導く道であり，もう一つは肉を殺して生命に導く道である。第三の道はなく，二つのいずれかを選ばなければならない。

（3）第三の教則は，地獄の入り口であるように戦慄させるものや幻想は，ことごとく恐れるに足りないものと見なすことである。現世での生活とキリストの徳の道を比較し，エラスムスは，キリストの道のみが至福への道・永遠の不滅の生命に至ると言い，不安と辛苦に充ちた「現世」（「この世」）での生活は，明らかに永遠の苦悩であると言う。

（4）第四の教則は，エラスムスは，自分の全生涯の唯一の目的としてキリストを前に据え，すべての熱意，あらゆる努力，いっさいの閑暇と仕事をキリストひとりに向けることことである。さらに，「キリストを空虚な言葉であると思いなすのではなく，愛，率直，忍耐，純潔」であると考え，「悪魔というものが，これらのものからあなたをそらすもの」にほかならないと言う。

（5）第五の教則は，「可視的な」ものから「不可視的な」ものへの前進を助け，完全な敬虔の確立へと進むことである。この教則に従うとき，人は霊的な生活を保つことになる。

（6）第六の教則は，キリストひとりのほかどこからも敬虔の模範を求めるべきではないという教則である。つまり，この教則では，一般大衆・群衆・民衆の行動やその意見から極力離れ，キリストを心のなかに熱心に求める人になることが薦められている。

（7）第七の教則は，最高善につぐ次善策の提案である。その次善策とは，人間的思慮分別をもって「大きな悪徳から遠ざかり」，自身を損なうことなく「神の慈愛のうちに安全に保つ」ことである。

（8）第八の教則は，神の試練についてである。人が神の「試練の攻撃」を受け「試練の嵐」に襲われたとしても，神の配慮と愛を信じ勝利するために努力するなら，神は見捨てることがないだけではなく，神は出口を備えている。「神の友ヨブのことを思ってみよ。ヒエロニムス，ベネディクトゥス，フランチェスコおよびこの人たちとともに最大の悪徳により悩まされた他の無数の神父たちのことを思ってみなさい」とエラスムスは励ます。

（9）第九の教則は，敵の攻撃に備えることである。備えていると，突撃してくる者を制圧し，「蛇の頭を砕く備え」である。

（10）第十の教則は，祈りと聖書と格言である。

（11）第十一の教則は，神の無償の施しによる救済策である。

（12）第十二の教則は，悪へ誘惑されても，単に罪を犯さないだけではなく，自身「善い人」に発展するように戦うべきである。

(13) 第十三の教則は，永遠の勝利をもとめ耐えず警戒することである。

(14) 第十四の教則は，悪徳を軽く見るな，である。エラスムスは，「悪徳」を軽く見ないように警戒せよ，と言う。

(15) 第十五の教則は，「戦いの苦労と罪の快楽を比較し」ないようにし，さらに「現在の罪過の魅力を，熱烈に戦った人に授けられる将来の勝利の魅力および心の平静さと比較」することである。

(16) 第十六の教則は，精神を強固にする教則（救済策）である。それは，「罪に陥ったときに単に絶望してはならないだけでなく，また不名誉の恥や受けた傷の痛みが逃走へ導かないようにする」のみならず，「勇敢に戦うように鼓舞し元気を回復させる」ように，活発な戦士たちを見習わなければならないことを意味する。

(17) 第十七の教則は，十字架の秘儀である。これは，十字架を悪漢どもに向ける訓練・練習をするときには，大衆の風習によってはならないことを意味する。

(18) 第十八の教則は，人間の尊厳である。人間は，現世を創造した神によって造られた高貴な生物であり，「天使たちの同市民，神の子，不死性の相続人，キリストのからだ，教会の構成員であり，私たちのからだは聖霊の宮」であり，私たちの「精神は神性の模像にして同時にその至聖所」である。それに反して，罪は心のもっとも忌まわしい疫病であり，「最も恥ずべきであるのみならず最も悲惨な奴隷状態の保証人」である。

(19) 第十九の教則は，神と悪魔の対比である。神は，「ご自身をすべてのものに与える，かの永遠の源泉であり，最高の美の，最高の歓喜の，最高善の理念」であり，悪魔は，「すべての悪の，最悪の恥辱の，最大の不幸の父」である。

(20) 第二十の教則は，敬虔と不敬虔の違いを比較することである。「この世」の生活においては，敬虔と不敬虔もまた，大変大きく違った報酬をもたらす。前者からは，「心の確実な平静と純粋な精神の浄福な歓喜」が分かち与えられ，「この世」にはこれとの交換に相当する高価なものは何もない。それに反して，後者からは多数の不幸と精神のあの悲惨な呵責が与えられる。

(21) 第二十一の教則は，「現在の」生のはかなさである。

(22) 第二十二の教則は，最大の悪としての悔い改めないことである。エラスムスは，罪からの改心を考えている人にとって，また，人生の終わりまで「不義の絆」を引きずってきた人にとって，「悔い改めない」ことは，「悪のなかの最大のもの」である。

エラスムスは，最後に，特殊な悪徳に対する救助策を提案している。この提案については，本稿の第1章第9節に示される。エラスムスが，最も悪徳と蔑んでいるのが好色である。

（1）好色に対する救助策

エラスムスは，「醜い好色の罪」と言い，「好色は最大の，また最も多数の罪とつねに結びついる」と言う。神によって創造された人間を多くの家畜のうちの最も「無感覚の生き物に等しくするこの肉欲」は，不潔で汚れていて，「どんな人にもいかに嫌悪すべき」ものである，と言う。「一時的な肉欲の醜い快感」によって，魂と身体を同時に辱め，「キリストがご自身の血をもって神聖なものとなしたもうた宮を冒瀆する」のは，ひどい精神錯乱である，と言う。

（2）貪欲に対する救助策

エラスムスは，「富を所有することではなくて，富を蔑視することが真に偉大」である，と言う。また，「お金を所有するのは罪過ではない」が，「お金を崇拝することは悪徳に結び」ついている，とも言う。さらに，富の所有によって，賢くなったり，教養あるものになったり，さらに健康的にいっそ美しくすることはない，とも言う。富は，諸々の快楽を準備しているが，「死をもたらす快楽」をも準備し，名誉を得させる。「馬鹿者だけが驚嘆し」，気に入られるのであるが，その人達は，実際には間違った名誉を与えられている。「真の名誉は称賛されている人たちによって称賛されていることであり，最高の名誉はキリストに気に入られる」ことである。「真の名誉は富の報酬ではなく，徳の報酬」である，と言う。

（3）名誉心に対する救助策

エラスムスは，名誉・栄誉はキリストの十字架のうちにあり，そこに救いもあると言い，「人間的な名誉」は何になるか，と言う。エラスムスは，「真の徳から生じるものだけが名誉である」という意見を固く堅持すべきであり，また「時々名誉心そのものから逃げなければならない」と言い，そして，「唯一の名誉は，人々によってではなく，神によってほめられることなのです」と言う。また，「無記中立的な事がら，たとえば容貌・力・家柄のゆえに表彰されても，正当な名誉とよばれはしない」と言う。

（4）怒りと復讐欲に対する救助策

怒りに対する優れた救助策として，エラスムスは次のように提案している。他人があなたに罪を犯すなら，あなたが「神に対してどのような罪を，いかに多くの罪を，しばしば犯している」かを考え，また「神に対していかに多くの負債を負っている」かを考えることが，優れた救助策である。また不正は不正によって取り除かれない。不正に対して不正で答えると，「かえって増大する事情」になるとエラスムスは言う。不正に対して不正で答えると，その結末は「双方の側で敵意は増大し，痛みは生々しくなり，古くなればなるほど癒やしがた

くなる」のは間違いない，と言う。不正をなした人が柔和と寛容によって癒やされ，「その人は敵から最も確実な友」となる。復讐によって取り除こうとすると，「悪そのものは憎むべき利息を伴って」逆流する，と言う。

第２章では，エラスムスの社会観を簡単に考察する。その第１節ではその成立状況を簡単に説明し，第２節においてエラスムスの社会観を説明する。『中世ヨーロッパの社会観』において甚野氏は，「中世社会の階層秩序に基づいた構造を生き生きと視覚的に提示するために，さまざまな隠喩を用いて，社会のあるべき姿が語られる」[1] ようになった，と言う。エラスムスの社会観も「隠喩」を用いた社会構造を説明する手法をとっている。

エラスムスは，「この世」での「キリスト教的哲学」を提示している。この思想は，中世に多用された「三職分」の協力関係で社会全体の秩序と調和をもたらす考えを示している。その議論では，「キリストのからだ」として社会を説明する隠喩と言う方法に用いている。キリストと「この世」の人々に関わりを保たせることによって，社会の秩序と調和の確定をめざす社会論である。最初に，キリストの位置を決め，次に「いくつかの環が」キリストの回りをめぐり，キリストを中心として固定する。そして，すべての人々がキリストを目標として，中心に位置するキリストに向かって生活することを期待して，多くの人間的な問題に対処するとエラスムスは説明している。

しかしながら，国家の秩序の維持のために，キリスト（あるいは聖職者）の介入する力にも限界（あるいは範囲）があることを述べているが，その限界についての彼の論理展開は，聖書の記述に即してなされる。キリストは，国家の秩序維持に必要なことの「いくらかを無視し」，「いくらかを拒否し」，「いくらかをそれらに目を閉ざしているかのように，否認も是認もしない」と理解し説明されている。たとえば，「キリストはカイザルの貨幣もそこに刻まれた像をも承認してい」ない。また「彼は姦淫の女を断崖もしていないし，公然と無罪をいいわたしてもいない」，「ただ罪を繰り返さないよう命じている」にすぎない。だが，「遺産を分配する仲裁人に」なることを求められたとき，「彼は公然とその任務を拒否している」。

いかなる場所を「この世」でキリストとの関係に与えているのであろうか。エラスムスは，世俗の君主たちによってなされることことを否定することなく，ただキリストを「君主たちや世俗の役人たち」によって行われていることの「創始者とすべきではない」と言い，そのことが「神の職権によって実行されていると主張すべき」でもないと強調している。しかし，エラスムスは，君主たちの行政が抜け落ちた面がある点は見逃していない。この人たちによって「ある疎漏なことがらが取り扱われ」るが，しかし，これは「世界の秩序を維持するために必要」であると言い，エラスムスは，社会秩序の達成に果たす君主たちの行いを是認

[1] 甚野　尚志著『中世ヨーロッパの社会観』序章（隠喩による社会認識）18 ページの１から２行目。

している。君主たちの行為は，社会の秩序と調和のために必要であると考えている。というのは，こういう人たちの奉仕によって「邪悪さが減少する」ようになり，「悪しき人々が国家を害することが減少する」ようになると言い，さらに，彼らは「神の正義」と「国家の平和」に奉仕し，「かかる平和がないなら敬虔に属することはかき乱された」であろうが，しかし，「神の真実な正義の模像」は微光を発しているから，彼らが自分の義務を履行し，より悪しきことが起こらないように権力を行使する場合には，彼らに栄誉を与え，彼らの行うことに我慢しなければならないと自身を説得している。エラスムスは，社会の秩序と調和のためになす君主たちの社会的な役割を認めている。だが，他方では，エラスムスは，「神の正義」が司祭の行いや法規にはるかに輝き渡っていなければならない，と言う。

第三の環に一般の大衆を置く。エラスムスは，「三職分」の内では耕す者（農民や職人；大衆としてエラスムスは押さえている）がキリストから最も遠くに置かれている。彼らは，この世界の「最も疎漏な部分」と呼ばれるものであるが，「キリストのからだに所属して」いて，「彼らは実際からだの目の部分であるばかりでなく，またふくらはぎ，足，恥部」にあたる部分である。「キリストの模範にしたがって，民衆がすこしずつキリストのうちで成長するまで，耐えなければならない」し，「父のような慈悲で暖かく助けなければならない」とエラスムスは言う。また，「すべての人は各人の分に応じてキリストを目がけて努めなければ」ならないと言う。このように，司祭も国王も大衆もキリストに倣って，キリストを目標にして生活様式を組み立てることがエラスムスの「神学の綱領」の中心である。

第三の環の外にはあるのはすべて，いつも，またあらゆる点で嫌悪すべきものである。この種類には，「野望，金銭欲，情欲，怒り，復讐心，嫉妬心，中傷，その他の悪徳」が入る。これらが，敬虔と義務の仮面を装って，「正義と法とを口実にし暴君的支配を行う」とき，また「宗教により生じた機会に利得の対策を講じる」とき，また「教会を擁護するという名目によって現世の権力を追い求める」とき，さらに「キリストの教えと全くかけ離れたことがキリストの統治に役立つものとして命じられる」とき，これらの悪徳は癒やしがたくなるとエラスムスは言う。

しかし，生活様式の一つ一つは「堕落の危険性」を持っていて，この危険性を明確に示している人は，「自分の属する身分階級を撤廃するのではなく，階級の利益になることを企てている」とエラスムスは言う。たとえば，君主の幸福は「暴君的支配にさらされ，愚かさ，お追従，享楽により強く影響」されるが，これらを避けなければならないと明示する人が君主の身分に値する，とエラスムスは言う。また，教会領の高位高官の人たちは，「とりわけ貪欲と野望」という二つの悪徳に深く関わるが，だが，司教たちは「恥ずべき利得のためでなく」，「脅迫や命令によってではなく」，また「意志によって群れを支配するためではなく」，「彼らの生活の模範によって敬虔へと呼びだすように，群れを養うべき」と命じられている，とエ

ラスムスは言う。

第１章　現世（「この世」）に生きるための教則と聖書を通した人間認識

第１節　聖書を通した人間認識と現実の人間

1.1　現世（「この世」）とキリストの知恵

『エンキリディオン』（『戦うキリスト者の短剣』，あるいは『キリスト教兵士提要』）において，エラスムスは，「この世」あるいは「現世」を批判的[2]に見ている。「虚偽に満ちた口実により愚かな者たちに自分を吹聴する現世の知恵」[3]には，「危険な召使いである尊大が，尊大には心の盲目が，盲目には情念の暴君が，情念の暴君には悪徳の収穫のすべてと，どんな犯罪を犯してもよいという無拘束」[4]が同伴していると言い，さらに「この無拘束に習慣が，習慣に最も不幸な心の愚鈍が続き，この愚鈍によって悪に対する感覚が欠ける」[5]ようになり，「この世」の知恵が「最大の悪を生み出す母」[6]であると言う。

「この世」（「現世」）についてのエラスムスの理解・認識を彼の『エンギリディオン』に見てみよう。その第２章において，エラスムスは，人間生活（「この世」での生活）について「不断の戦闘以外のなにものでもない」[7]と言う。「この世」の人々は，「武装した悪徳の軍勢」[8]に攻められている。しかし，人々は，すでに，戦いが済んだかのように平和[9]を確信している。悪徳と軍勢[10]との不断の戦いの状態にあるにもかかわらず，平和であると思うのは，欺かれ

---

[2] このエラスムスの姿勢は，キリスト自身が生活・暮らしてしていた時代のパリサイたちの考えが支配していた「現世」を否定的に見ていたことに，倣ったのかもしれない。さらに，エラスムスは，彼のその後の著作『痴愚神礼賛』においても「この世」の人々を痛烈に批判し諷刺している。

[3] エラスムス著（金子　晴勇訳）『エンキリディオン』第４章（汝自身を知ることが知恵の根本である）32ページの６行目。『ヤコブの手紙』（３章15節）には「そのような知恵は，上から下ってきたものではなくて，地につくもの，肉に属するもの，悪魔的なものなのである」とある。エラスムスのこの姿勢は，聖書に倣ったものであろうと思われる。

[4] 前掲書『エンキリディオン』第４章（汝自身を知ることが知恵の根本である）33ページの18行目から19行目。

[5] 前掲書『エンキリディオン』第４章（汝自身を知ることが知恵の根本である）33ページの20行目。

[6] 前掲書『エンキリディオン』第４章（汝自身を知ることが知恵の根本である）34ページの２行目。

[7] 前掲書『エンキリディオン』第２章（人生においては警戒すべきである）８ページの３行目から４行目。ここでエラスムスは，ヨブをその証人にとし，戦士ヨブと書いている。

[8] 前掲書『エンキリディオン』第２章（人生においては警戒すべきである）８ページの６行目。

[9] 悪魔と平和の締結する人は，洗礼において神と結んだ契約を破棄している。「平和，平和」と叫んでいる人（悪魔との平和を叫んである）は，神を自分の敵に回している（前掲書『エンキリディオン』２章（人生においては警戒すべきである）10ページの５行目から７行目参照）。

[10] エラスムスは，悪魔が破壊の技術をもって，私たちの精神を死に至らせる投げ槍で突き刺そうとしているので，その槍を通さない「信仰の楯」によって守られなければならないと言っている（前掲書『エンキリディオン』２章（人生においては警戒すべきである）８ページの11行目から12行目参照）。エラスムスは，「信仰を楯」にして悪魔の攻撃から守られる，と主張している。

ているからであるとエラスムスは認識している。「この世」は，「すべて罪悪の支配の下に置かれており，キリストに対し，ある時には敵意をもち，またある時には憎しみ」[11] を抱いているので，エラスムスは「この世」と戦うことを決意している，と理解される。

しかし，エラスムスは「この世」と戦う単純な方法はない[12]，と言う。というのは，「この世」は，戦闘時のように荒れ狂い，心に侵攻するだけでなく，また「私たちが眠くてあくびし安心しきっている間」[13] に，地下道を通って不意に忍び込むからである[14]，と言う。「この世」は，空虚な約束によって裏切るようにそそのかしている。世間において，とても平和であるかのように，のんびり暮らし，快楽にふけり，閑暇を貪っているのは正気ではない[15] とエラスムスは認識している。エラスムスは，「この世」の平和と戦うことを忌むべきでない[16] と言う。というのは，私たちの（「この世」での）平和が「悪徳と平和の締結」[17] の結果であるからである。彼は，人々は，「洗礼において神と結んだ契約を破棄」[18] していると認識している。不敬虔な者[19] は，「平和の創始者」[20] である神を敵に回しているので，エラスムスは，預言者のように，「不敬虔な者には平和は存在しない」[21] と言明している。故に，エラスムスの批判・敵意の視線は，「この世」の不敬虔な者に向けられる。

さらに，単に外から攻撃されるだけではなく，自身の心の内から悪徳の攻撃にさらされる

---

[11] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）8ページの16行目から17行目。

[12] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）8ページの17行目。

[13] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）9ページの2行目。

[14] エラスムスによると，「この世」は左からも右からも，前からも背後からも同様に，私たちを攻撃してくる。その攻撃についてヨハネの言葉をかりて，「この世」はすべて罪悪の支配の下に置かれているという。それゆえに，「この世」がキリストに対し，ある時は敵意をもち，またある時は憎しみを懐いている，と理解しているのであろう。また，「この世」と戦う単純な方法など存在しなく，信仰によって守られることに賭けたのであろう（前掲書『エンキリディオン』2章（人生においては警戒すべきである）8ページの15行目から18行目参照）。

[15] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）8ページの19行目から20行目。さらに「私たちの生活は戦いではなく，あたかもギリシャ人の酒宴と全く同様なのであって，陣営やテントの代わりに寝床の中で私たちは快楽を追求し，軍事訓練の代わりに奢侈と閑暇とに身をやつし，軍神の代わりになごやかなキタラを弾奏している」（前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）10ページ1行目から3行目参照）。私たちは，「この世」が平和状態であると，欺かれている。

[16] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）10ページの4行目参照。実際，神のみが平和であり，また平和の創始者であると信じているエラスムスは，「この世」が神あるいはキリストに敵対しているが故に，「この世」と戦うことを避けようとはしていないと考えているのであろう。

[17] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）10ページの5行目。

[18] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）10ページの5行目。

[19] エラスムスは，「この世」がキリストあるいは神に敵対するあるいは憎しみを懐くのは，「この世」が「不敬虔な者」の寄せ集めであると捉えていたからであろう。

[20] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）10ページの7行目。

[21] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）10ページの8行目。

ことにエラスムスは警告を発している[22]。私たちは，エバに誘われて快楽のために知恵の実を食べるアダム（最初の地上的なアダム）となる。エラスムスは，魂の死あるいは魂の病が「この世」[23]において迫りくることを危惧し，心自体が悪霊に支配されることがないように監視する必要があることを説いている。ここで，この魂の死あるいは病[24]の例を挙げておこう。たとえば，不正を蒙っている兄弟を見て，ただ自分の財産が傷つかないなら，心が騒ぎ立てられたりしない時には，魂は死んでいる[25]。「神の心」（すなわち「愛」）があれば，そのことに気がつくはずである。また，友人を騙し，姦淫を犯し，魂が致命的な傷害を受けているにもかかわらず，そのことに痛みを感じずに，それによって利得を得たと喜び，自慢している時にも，魂は死んでいる[26]。また，中傷的で破廉恥な毒を含んだ言葉を語り，隣人に向かって暴言を吐きかける時にも，魂は生き生きと活動していない。このときにも，魂は死んでいる[27]。

エラスムスは，魂が死んでいる状態を「大きな傷害の感覚が欠けた魂」[28]として捉え，魂が病気に冒されないために，生きる言葉（永遠の命の言葉）を持っているキリストの言葉に心を傾けなさい[29]と説いている。キリストの魂から永遠の命の言葉が流れ出て，人を不死なる生命（「幸福の不死性」[30]）に向けて，死んだ身体を生き返らせる神性がキリストの魂にあるとエラスムスは確信している。

---

[22] エラスムスは，「私たちはさらに内における心自身の奥底において，もっと親密でもっとなじみ深い敵を，つまりそれ以上に内なるものはないように，それに益して危険なものをありえないような敵を担っている」（前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）9ページの8行目から9行目参照）という。

[23]「ここではあなたの不死なる部分が攻撃されている。あなたの死体が墓の周りを引きずられるのではなく，身体と同時に魂も地獄に沈められる」（前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）13ページの10行目から11行目参照）とある。

[24] この病をエラスムスは，たとえば，「心がすべての敬虔にもとづく奉仕に無気力になり嘔吐をおこすなら，小さな恥辱にさえ耐える勇気が欠けているなら，ほんのわずかな貯えの損失に意気消沈するなら，心が病んでいる」（前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）14ページの8行目から10行目参照）と述べている。

[25] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）14ページの15行目かた16行目参照。何故死んでいるのかというと，「魂の生命である神がそこには居合わせないからである。まことに神がいますところ，そこには愛がある。神は愛であるから」（『前掲書』（人生においては警戒すべきである）14ページの15行目から18行目）と言う。エラスムスは，神の愛が魂に宿ることを求めている。

[26] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）15ページの1行目から3行目参照。

[27] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）15ページの6行目から7行目参照。

[28] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）15ページの4行目から5行目。

[29]『ヨハネ福音書』（6章68節）に「永遠の命の言をもっているのはあなたです」とある。

[30] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）12ページの16行目。

エラスムスは，「この世」の悪徳・悪魔に惑わされることなく，同時に自身が「魂の死あるいは魂の病」に陥ることなく生活できるとき，悪魔の支配する「この世」に勝利し，「魂の不死性」を得ていると認識している。そして，実際には，自身が敵と無傷で渡り合っているのでなく，「むしろ私たちのかしらなるキリストにあって勝利しているのであり，キリストにより敵は疑いなく再度打ち負かされており，また私たちにおいても打ちまかされている」[31] と理解している。それ故に，戦いの結果はいつも勝利である。というのは，自身が「キリストのからだのなかにあり，そのかしらによってすべてをなしうる」からである。エラスムスは，私たちが「キリストのからだのなか」にあり，その「かしらによってすべてをなしうる」と考え，キリストの導きによって，キリスト者が「この世」の誤りから逃れて，「霊的な生活の純粋な光に達することが容易になる」[32] と確信している。

霊的な生活へのキリストの教則[33] は，「一部は，神と悪魔と私たちのペルソナから選び出され，一部は，徳と悪徳とそれを結びつけたものとの状態から選び出され，一部は，徳と悪徳との対象から選び出」[34] されている。これらの教則は，「原罪の残滓である3つの悪に対抗するのにとりわけ役立つ」[35] とエラスムスは述べている。3つの悪とは，「迷妄と肉と弱さ」[36] である。エラスムスの見解をまとめると，以下のようになる。すなわち，迷妄は「無知の霞によって理性の判断を曇ら」[37] せ，私たちの判断を暗くしている。神の光をアダムとイブ（最初の両親）の罪が暗くし，「腐敗した教育，悪しき共同生活，転倒した情念，悪徳の暗闇，罪の習慣によってひどい錆でおおってしまった」[38] ので，「神によって刻まれた律法の痕跡」[39] は見えなくなった。次に，「肉は情念を刺激」[40] し，私たちが最善と理解するものとは「反対のものを愛するようにする」[41] と言い，「肉は意志を歪め」[42]，弱さはひとたび手にした徳を，嫌悪

[31] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）16ページの18行目から19行目。
[32] 前掲書『エンキリディオン』第9章（真のキリスト者の一般的な教則）57ページの16行目。
[33] エラスムスは，『エンギリディオン』において，22のキリスト者の教則を示している。この教則は，キリストの神性あるいは魂あるいは行いに至るための教えであると考えられる。エラスムスは，キリストに倣って生きることを説いている。
[34] 前掲書『エンキリディオン』第9章（真のキリスト者の一般的教則）58ページの4行目から5行目。このことは，彼の教則の一部は，神と悪魔とこの世の人に関わって提示され，その一部は，徳と悪徳の特質とに関係するものであり，また一部は徳と悪徳の特性に関わっていることを示しているのであろう。
[35] 前掲書『エンキリディオン』第9章（真のキリスト者の一般的教則）58ページの5行目から6行目。
[36] 前掲書『エンキリディオン』第9章（真のキリスト者の一般的教則）58ページの8行目。
[37] 前掲書『エンキリディオン』第9章（真のキリスト者の一般的教則）58ページの9行目。
[38] 前掲書『エンキリディオン』第9章（真のキリスト者の一般的教則）58ページの10行目から11行目。
[39] 前掲書『エンキリディオン』第9章（真のキリスト者の一般的教則）58ページの11行目。
[40] 前掲書『エンキリディオン』第9章（真のキリスト者の一般的教則）58ページの15行目。
[41] 前掲書『エンキリディオン』第9章（真のキリスト者の一般的教則）58ページの15行目から16行目。
[42] 前掲書『エンキリディオン』第9章（真のキリスト者の一般的教則）58ページの17行目。

感や試練に負けて，放棄するようにさせる[43]，と言う。簡潔に「迷妄は判断を損ない，肉は意志を弱め，弱さは持続性を挫く」[44] と結んでいる。

そのため，エラスムスは，次のように説得している。まず，「避けるべき道を追求すべきものから見分けなければなりません」[45]，「物事の選択にあたって思い迷うことのないように，迷妄を取り除かねばなりません」[46]。次に，悪を憎み，善を愛さねばなりません[47]。肉に打ち勝たなければなりません[48]。第三に，徳の道を棄てることのないようにしなければならない[49]，と説いている。

エラスムスは，人がキリストのからだであり，キリストに倣い生活することを薦め，たとえば，先に見たように，人がキリストの身体の内にあり，その頭（かしら）によってすべてをなしうると認識している。人は，確かに，余りに弱すぎるが，その頭となるキリストにおいて，人のできないことはないと確信している[50]。したがって，私たちの戦い（キリストを受け入れる人たち）の結末は，無論，少しも不確定ではない。なぜなら，勝利は，幸運にもとづいているのでは決してなく，神の手中に置かれ，神を通して私たちの手中にも置かれているから，と言う[51]。エラスムスは，キリストに倣うことによって，世の悪魔・悪徳に惑わされることなく，自身の魂を死滅させることもないと堅く信じている。

また，エラスムスは，「この世」の知恵に対し，神の知恵を対峙させている。神（あるいはキリスト）の知恵について，エラスムスは，次のように説明している。その知恵とともに「すべての善いものが私に来たった。かつその手をとおして無数の名誉が来たった。またその知恵が私に先がけて導いたゆえに，私はそれらすべてを喜んだ。それでも私はそれがあらゆる善きものの母であることに気づかなかった」[52] を引用し，その知恵は，「その従者として謙譲と柔和とをもたらす」[53] と言う。柔和は，私たちに「神の霊」を受け入れさせる。なぜなら，「神の霊」は，謙虚で柔和な者の上で休らうことを喜ぶから。この「神の霊」は，同時に，7倍の「恩恵の賜物をもって私たちの精神を満たす」[54] と言う。

---

[43] 前掲書『エンキリディオン』第9章（真のキリスト者の一般的教則）58ページの16行目から17行目。
[44] 前掲書『エンキリディオン』第9章（真のキリスト者の一般的教則）58ページの17行目。
[45] 前掲書『エンキリディオン』第9章（真のキリスト者の一般的教則）58ページの17行目。
[46] 前掲書『エンキリディオン』第9章（真のキリスト者の一般的教則）58ページの17行目。
[47] 前掲書『エンキリディオン』第9章（真のキリスト者の一般的教則）58ページの19行目から20行目。
[48] 前掲書『エンキリディオン』第9章（真のキリスト者の一般的教則）59ページの1行目。
[49] 前掲書『エンキリディオン』第9章（真のキリスト者の一般的教則）59ページの1行目から3行目を参照。
[50] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）17ページの1行目から2行目。
[51] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）17ページの2行目から7行目参照。
[52] これは，『ソロモンの知恵』（7章11節から12節）からの引用と記されている。
[53] 前掲書『エンキリディオン』第4章（汝自身を知ることが知恵の根本である）34ページの6行目。

1.2　内的人間と外的人間：すなわち理性と情念（あるいは悪徳）の調和

エラスムスは，人間が悪徳に傾くか，徳に向かうかは先験的には決められなく，徳のある生活がなされるように努めなければならないと考え，そのために人間につての考察から踏み出している。

エラスムスは，人間を「一種の神性のような魂」[55]と「あたかも物いわぬ獣」[56]の二部分に分け，前者の魂の部分では「神性にあずかるものであり，天使の心」[57]を超えて高まり，そして「神と一つになる」[58]ことができると言う。獣の面では他の動物に勝ってはいなく，すべてにおいて劣っている[59]と言う。相互に違っている二つの本姓を創造者である神は結び合わせて調和させて，心身の両者が矛盾しているようでありながら，両者は一つになっている[60]，とエラスムスは言う。エラスムスによると，身体自身は，目に見えるので，目に見えるものを喜び，また可死的であるゆえに現世的なもの[61]を求める。他方，魂は，目に見えるものを軽視し，「真なるもの，永遠なものを」[62]求め，そして，「不滅であるため不滅なものを愛し，天上的であるため天上的なものを愛す」[63]とエラスムスは説いている。しかし，「この世」では，「物事が転倒したために身体の情念が理性に戦いを挑んで指導権を握ろうとし，理性は身体の意向に譲歩するべく強いられている」[64]と言う。

エラスムスは，国家の有り様を例にして，精神（理性）と身体（情念）の転倒し錯綜した関係と，国家の騒乱や暴動の関連性を考察している。その原因が情念にあると見ているエラスムスは，情念を如何に制御・抑制するかを説いている。彼は，プラトン[65]に倣って，理性が

---

[54] 前掲書『エンキリディオン』第4章（汝自身を知ることが知恵の根本である）34ページの8行目から9行目。

[55] 前掲書『エンキリディオン』5章（内的人間と外的人間）36ページの2行目。

[56] 前掲書『エンキリディオン』第5章（内的人間と外的人間）36ページの2行目。

[57] 前掲書『エンキリディオン』第5章（内的人間と外的人間）36ページの4行目。

[58] 前掲書『エンキリディオン』第5章（内的人間と外的人間）36ページの4行目。

[59] 前掲書『エンキリディオン』第5章（内的人間と外的人間）36ページの2行目から3行目参照。

[60] 前掲書『エンキリディオン』第5章（内的人間と外的人間）36ページの5行目から7行目参照。

[61] 前掲書『エンキリディオン』第5章（内的人間と外的人間）36ページの15行目。

[62] 前掲書『エンキリディオン』第5章（内的人間と外的人間）37ページの2行目。

[63] 前掲書『エンキリディオン』第5章（内的人間と外的人間）37ページの2行目から3行目。

[64] 前掲書『エンキリディオン』第5章（内的人間と外的人間）37ページの10行目から11行目。エラスムスは，精神が身体を支配し，身体の方も精神に支配されることを受け入れていた状態を「正当な状態」（転倒しない状態）と見ている。

[65] エラスムスは，前掲書『エンキリディオン』第5章（内的人間と外的人間））38ページにおいて，プラトンの『ティマイオス』にならい，人間の魂を二つに分けている。第一は，神的で不滅な魂，他方は，可死的で騒乱に服するものである。後者には，快楽，憎悪，恐怖，無謀，怒り，愛欲を挙げている。快楽は，悪を誘う好餌であり，憎悪は，善いものからの逃走とその妨害であり，そして恐怖と無謀に火を注ぐのが怒りである，と説明している。プラトン全集12巻（岩波書店）の『ティマイオス―自然について』（種山　恭子訳）

国家（王国が想定されているが）の王の役割を担い，国家共同体に騒乱と陰謀のもとになる低俗な情念[66]を抑えなければならないと断言する。まず，国家（つまり理性）を統治する王の居場所を決める。プラトンによると，王の居住場所である都市の城塞を神的な魂（つまり理性）の居場所になぞらえて，魂の居場所を大脳[67]の中にあるとした。この部分と関係づけて，国家共同体の騒乱[68]の勃発をもたらすところ（欲望）を示している。プラトンは，可死的な魂の部分（つまり情念）を理性からの距離に関係づけていて，最も遠く[69]に欲望を位置づけ，身体に喩えて，肝臓と下腹部を欲望に対応させている。欲望[70]が最も激しい衝動を引き

の 31 節（127 ページの 6 行目から 10 行目）には，「死すべきものの誕生のほうは，その制作を，自分が生み出した子供たち（神々＝天体）に命じたのでした。そこで神の子らは，父に倣って，魂の不死なる始原を受け取ると，次には，そのまわりに死すべき身体を丸くつくり（＝頭），それに乗りものとして身体全体を与えたのですが，またその身体の中に，魂の別の種類のもの，つまり死すべき種類のものを，もう一つ付け加え組み立てようとしました」，とある。ここでの死すべき種類の魂が，エラスムスの第二の「可視的で騒乱に服する」魂に対応する，と考えられる。

[66] 低俗な情念のことをエラスムスは，前掲書『エンキリディオン』第 5 章（内的人間と外的人間）38 ページにおいて，理性の命令に対抗し，家畜の卑しさにまで転落した心の運動と言い，また平民の最も下等なかすのようである，あるいは，不潔で野卑な奴隷のようである，とも言っている。この情念に属するものとして，情欲，放蕩，嫉妬とそれに類した心の病を挙げている。

[67] 大脳は，身体の最も高い部分にあり，天に最も近くその上獣的なところがないとエラスムスはいう（前掲書『エンキリディオン』第 5 章の 39 ページの 4 行目から 5 行目参照）。大脳は強化された感覚に満ちていて，情報を伝達する感覚によって国家共同体の中に暴動をおこされることはないと言う。というのは，理性は，エラスムスやプラトンにおいては，大脳のなかにあるからである。

[68] エラスムスは，国家の最高権力を一人が掌握し，その者が国家の安寧を命じるようにならない限り，多様な人間から構成されている国家には暴動と陰謀が多発し，崩壊へと至り，ゆえに，国家において知恵の多い者がより多くの実権を握り，知恵において劣る者が服従することが必要であり，身分の低い平民ほど愚かな者はいなく，だから平民は権力を握ってはならない，と言う。さらに，決定する判断は，一人の王の掌中に残っていなければならない。王は法のみに従い，法は公正の理念に合致している，と言う（前掲書『エンキリディオン』第 5 章（内的人間と外的人間）の 37 ページの 13 行目から 38 ページの 4 行目参照）。筆者は，このプラトンやエラスムスの見解には，平民に対する嫌悪と蔑視が内包していると疑っている。

[69] エラスムスによると，プラトンは首と横隔膜の間に勇気と怒りに関係した魂にあたる部分を置いていて，この情念を最高のものからも最低のもからも適度の距離に置いていることになる。この部分が王に近づきすぎると王の静寂を乱し，低俗な情念（腐敗した最低の平民）に接触し結託すると騒乱や暴動になる，とプラトンは説明している。前掲書『ティマイオス―自然について』31 節（128 ページの 4 行目から 8 行目）には「これらの諸情念によって，かの神的なもの（理性）を穢すことになっては，と，神々は憚って，この（魂の）死すべき種族を，神的なものから離して，身体内の別の住居に住まわせたのです。そして，その隔離のためには，頭と胸の間に「頸」を介在させることによって，この両者を仕切る境界となる峡部を縛りつけようとしたのです」とあり，また，そこで（9 行目から 14 行目）は「この胸郭の腔所にも改めて，その真ん中に隔壁として「横隔膜」を置き，そうすることで，これに仕切りを入れたのでした。さて，魂のうち，勇気と血気をそなえた，負けず嫌いの部分は，これを頭に近く，横隔膜と頸の間に住まわせました。魂のこの部分が理性の言葉のよく聴ける位置にいてくれて，（もう一つの）欲望の種族の方が，城砦（アクロポリス）から指令されたことやいわれたことに，どうしても自発的に従おうとしない時，前者が，かの理性の側に与し，ともに，この欲望の種族を力ずくで抑えることができるようにというわけなのです」とある。この横隔膜と頸の間に住まわせたものは，心臓である，と考えられる。

起こし，大脳の指図を聞きいれないことがある[71]。この身体の部分では欲望が独裁的に支配し，大脳に抗議する。国家共同体は欲望に支配されたもの[72]によって騒乱されることがある。また王[73]は神的な助言者であるとし，そして彼は，下劣なことや卑しいことを考えず，正しいことのみを命じる[74]，と言う。

エラスムスは，王が民を統治するように，理性が情念を抑制し統御する（ことを常道）と想定している。この見解はプラントの思想に通じるものである。エラスムスは「その他の民が王に服従するような場合でも，彼は，けっして後悔すべきことも破壊的なことも引き起こしたりしないで，最高の節制と最大の静寂さをもって万事を司る」[75]と言い，またプラトンにならって，「精神ができうるかぎり自己を物体的で感覚的世界から遠ざけて，感覚ではなく理性によって把握されるものへと向けることができる」[76]と言う。エラスムスは，まず初めに，心の衝動のすべてを認識し，次に，理性による抑制によって徳の方に向けられない衝動はないと認識し，他方で，自分自身について認識していない人は，理性の代わりに悪徳の衝動によって導かれるのみならず，怒りや嫉妬によって刺激されるものを神に対する熱愛と勘違いする[77]，と言う。一般に，徳に傾きやすい人あるいは悪徳に傾きやすい人がいるが，エラスムスは，この違いを遺伝，体質，あるいは精神の差異によると認識している[78]。

エラスムスは，悪徳は，その人種に固有のものであり，ある人種には不誠実，他の人種には放蕩，あるいは別の人種には好色が固有に備わっている場合があり，また体質から生じる悪徳もある，と言う。たとえば，多血質な人では女好きと快楽への愛好の傾向があり，怒りや大胆不敵や誹謗は胆汁質な人に，怠惰と惰眠は粘液質な人に，妬みや憂愁や辛辣は憂鬱質

[70]「欲求の分裂のための暴動と陰微が多発して」国家の安寧が崩壊する（前掲書『エンキリディオン』第5章（内的人間と外的人間）37ページの15行目）。

[71] 前掲書『エンキリディオン』第5章（内的人間と外的人間）39ページの18行目参照。

[72] 前掲書『エンキリディオン』第5章（内的人間と外的人間）39ページの13行目から14行目。エラスムスによると，プラトンは腐敗した市民が勇気と怒りとを懐いて，王国の静寂を乱すと考えていることになる。

[73] 王は，象牙の笏を携えており，正しい事だけを命じる。その笏の先には鷲の徴章がついている。また王は，黄金の冠で飾られている。黄金は知恵を意味し，環は完全（あらゆる方向から見てかけることがない完璧）を意味している（前掲書『エンキリディオン』第5章（内的人間と外的人間）40ページの3行目から5行目参照）。そのページにおいて，エラスムスは王の気質について規定している。第一に，誤謬によって犯罪を犯さないため，できる限り賢明であること，第二に，間違った悪しき仕方で行為することを避けるために，正しいものだけを志すことを指摘している。エラスムスは理想的な王を語っている。
実際の中世社会・近代社会の王は，賢明であったか否かにつては，歴史の事実が明らかにしている。

[74] 前掲書『エンキリディオン』第5章（内的人間と外的人間）40ページの3行目から4行目。

[75] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）40ページの13行目から15行目。

[76] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）41ページの10行目から11行目。

[77] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）41ページの13行目から17行目。

[78] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）41ページの19行目参照。

な人に付随している，と言う。年齢と共に変化する悪徳もあり，青年時代には性欲や浪費が強く，軽率である傾向があるのに対して，老年にはいると吝嗇・我意・貪欲が優っていくが，また，性による違いもあり，男には大胆不敵，女には虚栄心と復讐心が属する[79] と言う。

エラスムスは，全く対立した長所（体質や遺伝気質など）が相互に働くことによって，心の病を償うことがあると指摘している[80]。たとえば，ある人は，快楽の方に傾きがちであるが，決して短気でなかったり，妬み深くなかったりするが，他のひとりの人は，誠に貞淑であるが，いくぶん高慢であり，怒りっぽく，けちくさいかもしれない[81]，と言う。また，悪徳に強く動かされている人もいる[82]。つまり，「窃盗，聖物冒瀆，殺人」[83] である。この傾向を矯正するように努力されなければならなく，これらの「襲撃に対し確実な計画に基づく破壊されることのない城壁を築かなければならない」[84] と言う。

他方，エラスムスは，「いくつかの情念は徳に大変近いため，両者の区別が曖昧になり，私たちは欺かれる危険」[85] にあり，それらは最も近い徳に転換されなければならない[86]，とも言う。たとえば，ある人が「すこしだけ貪欲である」[87] としよう。この人が理性[88] を使用すると，彼は役立つ人になる[89]。また，卑屈にもおべっかを使いやすい人が理性を使うと，快活で愛想がよくなる[90]，厳格な人が理性を使うと，冷静な人になる[91]，憂鬱な人はより真剣になる，また，無駄話をしがちな人は協調的になる[92]，と言う。さらに，エラスムスは，悪徳と徳を識別すること提唱している。憂鬱を重厚から，頑固を厳粛から，妬みを熱愛から，貪欲を節約から，追従を親切から，道化を機知から区別し，実質上は悪徳であるものを徳の名前で覆い隠すことのないように用心しなければならない[93]，と警告している。

---

[79] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）42ページの17行目から18行目参照。
[80] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）42ページの19行目参照。
[81] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）42ページの20行目から43ページの1行目参照。
[82] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）43ページの2行目参照。
[83] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）43ページの3行目。
[84] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）43ページの4行目。
[85] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）43ページの5行目。
[86] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）43ページの6行目参照。
[87] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）43ページの8行目。
[88] 理性を使うとはどういうことか。たとえば，理屈にあうように，合理的に考えるということか。パウロは，あるとき理性を霊とよび，また，ある時には内的人間，あるいは真理の法則と呼んでいる。
[89] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）43ページの8行目から9行目。
[90] 前掲書『エンキリディオン』 6章（情念の相違について）43ページの9行目参照。
[91] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）43ページの10行目参照。
[92] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）43ページの10行目から11行目参照。
[93] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）43ページの12行目から14行目参照。

このようにして，エラスムスは幸福にいたる唯一の道を示している。第一に，自己自身を知ること。次に，何事も情念ではなく，理性の判断に従って行うことである。すなわち，徳義だけを目指す[94]ことを奨めている。これを実行するのは，実際，困難であるが，エラスムスは，プラトンからの引用でそのことを示した後に，さらに聖書のラテン語訳であるウルガータ訳の翻訳者ヒエロニムスをも引いて，キリスト教徒は幸福である，と言う。その引用によると，キリスト教徒は，日々生命の危険に晒されているが，悪魔を征服することにまさって勇敢なもの[95]，である。エラスムスは，「ただ断固とした心でもってこの完璧な生活の計画を受け入れなさい。また受け入れたものを実行すべく励みなさい」[96]と薦め，心を尽くしてキリスト教徒になろうと意志することの大切さを強調している[97]。

人（キリスト教徒）は，いつも多くの武装した悪徳の軍勢により攻められるが，しかし情念は，知恵に到達するのに役立たないだけではなく，また有害でもある。本稿のこの項（すなわち1.2項）の前半で示したように，理性の判断に従って行動することによってキリストの境地に達する，とエラスムスは説いている。

1.3　内的人間と外的人間：肉と霊

エラスムスは，キリスト教徒の大部分が感覚によって捉えるものに仕えている「現世」に不満を持っている。エラスムスは，キリスト教徒が人間を感覚のみで捉え情念に仕え，情念と戦う訓練をしていないため，理性を激情と見誤る[98]と認識している。また「暗くなった理性が情念の呼びかける」[99]ところならどこにでも，それに従って「確実な，きわめて嘆かわしい奴隷状態を平和」[100]と呼んでいると批判する。このような平和は悲しむべきものであり，それを取り除くために「真理と平和を一つにした真の平和の創始者なるキリストがこの世に来た」[101]のであり，さらにキリストは，「この世」の情念に惑わされ支配されている平和を救

[94] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）43ページの17行目参照。

[95] これは，ヒエロニムスの『手紙』125（「修道士ルスティクスに」）による。

[96] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）44ページの5行目から6行目。さらに，そのページにおいて，エラスムスは，完璧な生活の計画を受け入れ実行することが初め克服しがたいと思われるが，進行してゆくに間に近づき易くなり，経験により楽になり，習慣になることにより，ついに，喜びとなる，と励ましている。

[97] 前掲書『エンキリディオン』第6章（情念の相違について）44ページの7から10行目参照。

[98] 前掲書『エンキリディオン』第7章（内的人間と外的人間，および聖書による人間の二つの部分について）45ページの5行目参照。

[99] 前掲書『エンキリディオン』第7章（内的人間と外的人間，および聖書による人間の二つの部分について）45ページの9行目。

[100] 前掲書『エンキリディオン』第7章（内的人間と外的人間，および聖書による人間の二つの部分について）45ページの9行目。

[101] 前掲書『エンキリディオン』第7章（内的人間と外的人間，および聖書による人間の二つの部分について）

いに導く戦いを起こす，と説いている[102]。

エラスムスは，聖書の中にプラトンやストア学派の理性の働きを読み解こうとして，パウロの言葉を引用し，パウロとプラトンやストア学派などの思想との連続性を説いている。聖書の肉・身体・外的人間・肢体の法則をプラトンなどの哲学者の「情念」に，他方，聖書の霊・内的人間・心の法則を哲学者の「理性」に対応させることによって，哲学者の考えとパウロの考えの連続性を解明する。パウロと同様[103]にエラスムスも御霊によって歩むことを善とし，肉に服することを避け，反対している。

聖書から肉とか霊などの言葉を拾ってみよう。たとえば，『ガラテヤ人への手紙』（5章16節から18節）に，「わたしは命じる，御霊によって歩きなさい。そうすれば，決して肉の欲を満たすことはない。なぜなら，肉の欲するところは御霊に反し，また御霊の欲するところは肉に反するからである。こうして，二つのものは互いに相さからい，その結果，あなたがたは自分でしようと思うことをすることができないようになる。もしあなたがたが御霊に導かれるなら，律法のもとにはいない」とある。また，『ローマ人への手紙』（8章13節から15節）に「もし肉に従って生きるなら，あなたがたは死ぬ外ないからである。しかし，霊によってからだの働きを殺すなら，あなたは生きるであろう。すべて神の御霊に導かれる者は，すなわち，神の子である。あなたがたは再び恐れをいだかせる奴隷の霊を受け入れるのではなく，子たる身分を授ける霊を受け入れるのである」とある。エラスムスは，御霊（霊）と肉の対立は，プラトンの理性と情念の対立に同じであると理解している。プラトンは，本節の前項で見たように，一人の人間の中に「二つの魂」を置いている。パウロは，同じ人間の中に「二つの人間」を生み出している。エラスムスは，ここに，哲学者プラトンと使徒パウロの思想における連続性を見ている。パウロの「二つの人間」とは，単に，アダムとイエスではない。『コリント人への第一の手紙』（15章45節から50節）に「聖書に，最初の人アダムは生きたものとなった，と書いてあるとおりである。しかし最後のアダムは命を与える霊になった。最初にあったのは霊のものではなく肉のものであって，その後に霊のものが来るのである。第一の人は地から出て土に属し，第二の人は天から来る。この土に属する人に土に属している人々は等しく，この天に属する人に天に属している人々は等しいのである。すなわち，わたしたちは，土に属している形をとっているのと同様に，また天に属している形を

45ページの11行目。

[102] 前掲書『エンキリディオン』第7章45ページの12行目から13行目。「キリストは父とこのあいだに，夫と妻のあいだに」救いに導く戦いが起こる。

[103] 日本聖書協会編『聖書』（1968）『ガラテヤ人への手紙』（5章16から17節）において，パウロは「わたしは命じる，御霊によって歩きなさい。そうすれば，決して肉の欲を満たすことはない。なぜなら，肉の欲するところは御霊に反し，また御霊の欲するところは肉に反するからである」と書いている。

とるのである。

兄弟たちよ。わたしはこの事を言っておく。肉と血とは神の国を継ぐことはできないし，朽ちるものは朽ちないものを継ぐことはない」とある。ここでパウロは，わたしたち人間は，土に属する形（肉と血）と天に属する形（霊）の二つを持つと言っている。パウロは，同じ人間の中に「二人の人間」を創造しているのである。またパウロの肉的・外的人間とは，ここの土に属する人[104]（最初のアダム）のことである。

エラスムスは，「二人の人間」の例を聖書に見ている。父イサクと母リベカの子である，双生児のエソウとヤコブの二人[105]をとり挙げている。兄エソウと弟ヤコブは，母リベカの胎内いるときから和合することはなかった[106]。さらに，エソウは，イサクの寵愛（父の祝福）を受けたヤコブを憎み，憤り，怒った。そのため，ヤコブは，エソウを避け，彼を信頼することはなかった。先に引用した『コリント人への第一の手紙』（15章46節から47節）に「最初にあったのは霊のものではなく肉のものであって，その後に霊のものが来るのである。第一の人は地から出て土に属し，第二の人は天から来る」とあるように，兄エソウが最初の肉の者で，土の（地上的な）人であり，弟ヤコブが後の霊の者で，天から来る（天上的な）人である。

エラスムスは，上に引用した『コリント人への第一の手紙』に書かれているように，多くのキリスト教徒が，「すなわち，わたしたちは，土に属している形をとっているのと同様に，また天に属している形をとる」と認識している。エラスムスは，『ガラテヤ人への手紙』（6章7節から8節）によって，「人は自分のまいたものを，刈り取ることになる。すなわち，自分の肉にまく者は，肉から滅びを刈りとるであろう。霊にまく者は，霊から永遠の命を刈りとるであろう」と言う。この肉と霊のことをエソウとヤコブに関連させている，すなわち，「二人の人間」の生まれたときからの不和を，「肉と霊の対立（不仲）」にあると説明している。

何故，神（旧聖書で）は，詭計を用いてエソウから長子権[107]と父の祝福[108]を奪い取ったヤ

[104] この人は，地上的なアダムとも呼ばれる。

[105] エソウは，赤く全身毛でおおわれ，巧みな狩猟者に成長した。ヤコブは，穏やかでいつも天幕に住んでいた。エソウは，飢え（パンとレンズ豆）と引き替えに長子の特権をヤコブに売った。これは，エソウが出生時に持っていた特権を失い，その上，ヤコブがイサクの寵愛（父の祝福）を受けたが，エソウは父の祝福を受けることはなかった。父イサクは，エソウに「あなたはつるぎをもって世を渡り，あなたの弟に仕えるであろう。しかし，あなたが勇み立つ時，首から，そのくびきを振り落とすであろう」（日本聖書協会編『聖書』（1968）『創世記』27章40節）と言った。エソウは，剣で生き，地上的な人であった。ヤコブは，神（天上的な人）とともにあった。

[106] ヤコブは，エソウの踵をつかんでいた（日本聖書協会編『聖書』（1968）『創世記』25章26節）。

[107] エソウは，パンとレンズ豆と交換に長子の権利を売った。エラスムスは，「つまらない快楽の約束に誘惑されて，生まれながらの自由から罪の隷従へと転落してしまった」（前掲書『エンキリディオン』第7章47ページの16行目）と言う。

[108] ヤコブは，律法では定めてられない父の祝福を得ている。

コブを祝福し，さらにエラスムス自身もまた，戦う（格闘する）ヤコブを模範とすることをキリスト教徒に求めているのであろうか。『創世記』（32 章 22 節から 32 節）には，ヤコブと‘ある人’との格闘と，ヤコブの神による祝福について書かれている。すなわち，ヤコブは，夜明けまで‘ある人’と（ヤボクと言う場所で）格闘[109] し，その人がヤコブに勝てないと分かると，ヤコブの腿の関節を打ったので，ヤコブの関節が外れた。その後，その人とヤコブの間において，下のように問答がなされた。

その人は，「夜が明けるからわたしをかえして下さい」，と言った。

ヤコブは，「わたしを祝福して下さらないなら，あなたを去らせません」，と答えた。

その人は，「あなたの名はなんと言いますか」，と言った。

ヤコブは，「ヤコブです」，と答えた。

その人は，「あなたはもはや名をヤコブと言わず，イスラエルと言いなさい。あなたが神と人とに，力を争って勝ったからです」，と言った。

ヤコブは，「どうかわたしにあなたの名を知らせ下さい」，と尋ねた。

するとその人は，「なぜあなたはわたしの名を聞くのですか」，と言ったが，

ヤコブをその場（ペニエル）で祝福した，

とある。ヤコブは関節を打たれ跛行していても，夜通し格闘し，そして神の祝福（神の助け）を求めた。エラスムスは，戦うヤコブにキリスト教徒（「この世」において，真理を求める人）を見いだしたのであろう。

エラスムスは，また別の二人の人間を持ち出しているが，蛇にかどわかされ，知恵の実をとり，それを夫にも与え，二人で食べるエバと，信仰によって「新しくされたエバ」を挙げている。『創世記』（3 章 15 節から 16 節）において「新しくされたエバ」は，蛇の子孫とエバの子孫の間に敵対関係が置かれたとき，蛇の頭を砕き，蛇は，エバ（の子孫）の踵にぶら下がったとある。さらに，エバは夫（アダム）を渇望し，その支配下にはいる，とある。パウロは，前者の蛇にかどわかされたエバを肉的・外的人間で，土に属する人（最初のアダム），後者の「新しいエバ」を天から来る人と捉えている。

エラスムスは，理性（霊）に導かれる内なる人間を「この世」を導く人間とし，情念（肉）に導かれる外的な人間が「この世」から朽ちると認識している。エラスムスは，聖書に登場するヤコブに内なる人間を見て，エソウに外的人間を見ている。

[109] このとき，ヤコブはカナンの地に戻るとき，憎しみを懐いているエソウの怒りや嫉妬を恐れていた。ヤコブは，エソウに雄と雌のヤギや羊や牛や驢馬などの贈り物を先に渡した。その恐怖から逃れるために，神の祝福を強く求めた。そしてそれが与えられた。ヤコブは，エソウの怒りもかうことなく，攻め滅ぼされることもなく，無事にカナンの地に戻った。これも神の祝福である。

1.4　キリスト者とキリスト教の武器

キリスト者は，洗礼よって指導者キリストの麾下に編入されている。これによって，キリスト者は，自然な誕生によって，および，洗礼によって与えられる生命によって，キリストに恩義を蒙っている[110]。このように，エラスムスは，二重の意味で，キリストに負っていると認識している。キリスト者は，洗礼という儀礼（聖なる軟膏により油を塗られる）において誓った契約の中に止まる[111]ことを求められ，キリスト者の額に刻まれた十字架の印は，生きている限りキリストの軍旗のもとに戦闘に従事することになる[112]ことを意味している。すなわち，悪徳と永遠に戦いを開始する[113]ことを意味している。

その戦いの報酬は何か。キリスト者の報酬は「幸福な不死性」[114]である。この報酬は，人間世界で約束される戦利品や戦勝者の恐るべき残忍さ，弱く小さな人間にすぎない指揮官による称賛，あるいは花冠などの飾りなどの報酬とは違う[115]。キリスト者は，称賛や名声のためにではなく，キリスト（かしら）のために戦う[116]。称賛されるのは頭（かしら）であり，キリスト者の称賛は最高の幸福[117]である。キリスト者は，頭（かしら）なるキリストによって，その勇気を褒められる[118]。キリスト者にとって，神の言葉は魂の食物である。もし神の言葉が人に苦々しく吐き気を催すならば，その魂の味覚は病に感染している[119]。もし魂が神の言葉を内に保つことなく，それを消化して内心へ送られないなら，魂が病に冒されていることは明白である[120]。

---

[110] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）10ページの18行目参照。

[111] よって，「人がその主人である指導者から背き去るとしたら，それはなんと大きな恥辱，なんと大きな呪いを人類から公然と受け入れていることになる」（前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）11ページの6行目から7行目）。

[112] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）11ページの3行目から5行目参照。

[113] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）11ページの5行目参照。

[114] 日本聖書協会編『聖書』（1968）『コリント人への第一の手紙』（2章9節）には「目がまだ見ず，耳がまだ聞かず，人の心に思い浮かびもしなかったことを，神はご自分の愛する者たちのために備えられた」とある。これがキリスト者の苦闘に対する分け前であり，それが幸福な不死性である。

[115] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）12ページの2行目から10行目参照。

[116]「戦いを放棄する者には最高の罰が確定される。雄々しく戦う者に天国が約束されている」（前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）12ページの19行目から20行目））。

[117] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）13ページの4行目参照。

[118] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）13ページの5行目参照。

[119] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）14ページの2行目から4行目参照。

[120] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）14ページの4行目から6行目参照。

すでに述べたように，「この世」では，エラスムスは，人は魂の死滅や病に犯されているとしている[121]。それでは，どうして死滅しているといえるのであろうか。エラスムスの見解では，魂の生命である神がそこに居ないからであり，神が居るところには愛があり，神は愛である[122]。もし人が生けるキリストの肢体であるならば，どうして，身体のある部分が苦しんでいるのに，自身が少しも苦しんでいなく，それだけでなくそれに気づかないことがあろうか[123]と言う。エラスムスは，神の愛が人間を一体化・和合させると見ている。

不正を蒙っている人を見て，己の財産が傷つかないなら心が騒ぎ立てない時には，また，友人を騙し，姦淫を犯し，魂が致命的な傷害を受けているにもかかわらず，そのことに痛みを感じずに，それによって利得をえたと喜び，自慢している時には，魂は死んでいる。このように大きな傷害の感覚が欠けた魂がこれからも生き続けることはないであろう[124]が，邪悪きわまる悪魔どもが人を破滅させようと上から絶えず見張っている[125]と言う。よって，エラスムスは，精神の安全を確保するために精神を武装する必要がある[126]と言う。それは，キリスト教的武装を意味し，「悪徳の軍勢」[127]と戦わねばならないことを意味する。

エラスムスは，その悪徳と戦うための武器二つを準備している。それは，「祈り」と「聖書の知識」である[128]。『テサロニケ人への第一の手紙』（5章17節）に「絶えず祈りなさい」とある。「祈り」[129]は，もっとも力強く，神と対話することになる[130]。「祈り」は懇願であるが，

[121] この節の第1項10ページで，「不正を蒙っている兄弟を見て，自分の財産が傷つかないなら，心が騒ぎ立てない時には，魂は死んでいる」で述べ，また「友人を騙し，姦淫を犯し，魂が致命的な傷害を受けているにもかかわらず，そのことに痛みを感じずに，それによって利得をえたと喜び，自慢している時にも，魂は死んでいる」ことを魂の死滅の例としてあげている。さらに「中傷的で破廉恥な毒を含んだ言葉を語り，隣人に向かって暴言を吐きかける時にも，魂は生き生きと活動していない。このときにも，魂は死んでいる」こともその例として挙げた。

[122] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）14ページの17行目参照。

[123] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）14ページの19行目参照。

[124] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）15ページの1行目から5行目参照。

[125] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）8ページの10行目参照。

[126] 前掲書『エンキリディオン』第3章（キリスト教的戦役の武器）18ページの9行目参照。

[127] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）8ページの6行目から9行目参照。

[128] 前掲書『エンキリディオン』第3章（キリスト教的戦役の武器）18ページの14行目参照。

[129] エラスムスは，祈りについて，『マタイ福音書』（6章7節から8節）を引用している。すなわち，「また，祈る場合，異邦人のように，くどくどと祈るな。彼らは言葉かずが多ければ，聞きいれられるものと思っている。だから彼らのまねをするな。あなたがたの父なる神は，求めない先から，あなたがたに必要なものはご存じなのである」。また，エラスムスは，どれほどの詩編を復唱したかを数えるかもしれないが，そのような行為は聖書に通じていなく霊が成熟していない人の陥る欠陥である，と揶揄する。また，「詩編全体を字義どおりに漠然と唱えるよりも，殻を取りはらってその神髄をとりだすならば，一つの詩句に対する省察の方がいっそうあなたを賢明にし，成長させる」と言う（『前掲書』3章（キリスト教的戦役の武器）

知識は何を祈るかを忠告する[131]。清純な祈りは，敵が決して近づき得ない城塞のように天上に向かって心情を高く引き上げると言う[132]。また，口先だけではなく，熱心な心の願望があなたの深く響く声のように，神の耳に達すると言う[133]。知識も悪魔と戦うためには必要であり，知識は，救いに役立つ意見で知性を強固にする[134]。エラスムスは，「聖書の熱心な研究によってたやすく抑えられられないような激しい敵の襲撃はありません」[135]と言う。また，「聖書はすべて神の霊感によって書かれ，神を著者として成立している」[136]と言う。

エラスムスは，霊感を受けて神によって書かれた聖書[137]をどのように読むかについて，彼の見解を述べている。霊感を受けて書かれているのであるから，聖書からその霊的な意味を読み解くことが重要になる。それは，マナというものが何であるかを探求し得るとしている。エラスムスは，マナが白く輝いているように，「キリストの教えだけは全く純粋であり，全く明瞭であり，全く真実である」[138]と解している。聖書の言葉に「これはなんですか（マナ）」を探求することをエラスムスは説いている。

第2節　第一の教則：聖書につて知る

2.1　第一の教則

エラスムスの第一の教則は，キリストの霊によって伝授された聖書をよく知り，キリストを信じることによって悪徳から遠ざかることである。そうすることによって永遠の生命（不

26ページの4行目から6行目）。

[130] 前掲書『エンキリディオン』第3章（キリスト教的戦役の武器）19ページの6行目参照。

[131] 前掲書『エンキリディオン』第3章（キリスト教的戦役の武器）19ページの2行目参照。

[132] 前掲書『エンキリディオン』第3章（キリスト教的戦役の武器）18ページの16行目から17行目参照。

[133] 前掲書『エンキリディオン』第3章（キリスト教的戦役の武器）20ページの2行目参照。エラスムスは続けて，だから，悪徳があなたを刺激するとき，直ちに確信を持って「心を天に向けて高めるようにしなければなりません。助けは天から来るでしょう。だからそこへ向かって手もまた上げられるように」と言う。天に向かって手を上げるのは，そのわざをキリストに関わらせるためである。

[134] 前掲書『エンキリディオン』第3章（キリスト教的戦役の武器）18ページの17行目。

[135] 前掲書『エンキリディオン』第3章（キリスト教的戦役の武器）20ページの13行目。

[136] 前掲書『エンキリディオン』第3章（キリスト教的戦役の武器）20ページの18行目から19行目。実際，『テモテへの第二の手紙』（3章16節）にも「聖書は，すべて神の霊感を受けて書かれたものであって，人を教え，戒め，正しくし，義に導くのに有益である」とある。

[137] エラスムスは，マナ（ヘブル後で，これはなんでしょうか，の意味）に神の学識を見ている。だから，エラスムスは，下品と思われる言葉の下に大きな神秘が隠されていると言う（前掲書『エンキリディオン』第3章（キリスト教的戦役の武器）20ページの20行目）。マナは，『出エジプト記』（16章14節）に記されている「薄いうろこのようなものがあり，ちょうど地に結ぶ薄い霜のようであった」と言われるものである。イスラエルの人たちはこれを見て，「これはなんであろう」と言った。それがマナとイスラエルによって呼ばれた。

[138] 前掲書『エンキリディオン』第3章（キリスト教的戦役の武器）の20ページの20行目から21ページの2行目参照。

滅の生命）が与えられると信じることをエラスムスは説いている。エラスムスは，社会認識の基本を聖書に求め，聖書研究を通して，高見にのぼることを説いている。

エラスムスによると，聖書はすべて神の霊感によって書かれ，神を著者として成立し[139]，余計なものを何一つ持っていなく，探求に値しない，称賛に値しないところは少しもなく[140]，聖書の内容は，やや低級なものもふくんでいるが，それは語り方の謙虚さなの故であり，自然の正義に一致し調和しており，読者を引きつけ動かし改造することになる[141]。この教則は，キリストの霊によって伝えられている聖書を知る所にある。そのことを知らないことは悪となる。キリストの霊によって伝授された聖書につてできるだけよく知り，「口先だけで，冷ややかに，いいかげんに，ためらいながら信じるのではなく，心を尽くし心中深く刻み込み」[142]肝に銘じなさい，とエラスムスは説いている。このことは，神の約束を堅く信じることを示している。「ほとんどの人間が，あたかも天国や地獄が老婆のおとぎ話であり，子供たちをおどしたり，おびきよせたりするものであるかのように，生きているからといって」[143]，それに心を動かされてはならない，と説いている。もし「神の存在を信じるなら，神は偽り賜らないと信ず」[144]べきであって，信仰の炎を燃え上がらせ信仰を増し神に熱心に祈願すると，長きにわたり悪しき者はありえないし，さらに不滅の生命が得られると心の底で信じるなら，一切の悪徳から遠のき離れることになる[145]，とエラスムスは言う。

エラスムスによると，聖書が文字でおおわれた秘儀[146]を表し，聖書研究によってその文字から霊的な意味を掘り起こすことができ[147]，聖霊は水でもって神の律法についての知識を表している[148]。聖書の中で井戸・泉・川にてしばしば言及されているが，その意味するところは，「聖書の神秘を綿密に」[149]探求することを求めている，と解釈される。水の働きにつては，旧約聖書においても新約聖書においてしばしば言及されている。『創世記』（26 章 18 節）には「そしてイサクは父アブラハムの時に人々の掘った水の井戸を再び掘った。アブラハムの

[139]「聖書は，すべて神の霊感を受けて書かれたものであった，人の教え，戒め，正しくし，義に導くのに有益である」（日本聖書協会編『聖書』（1968）『テモテへの第二の手紙』 3 章 16 節）。

[140] 前掲書『エンキリディオン』第 3 章（キリスト教的戦役の武器）21 ページの 7 行目から 8 行目参照。

[141] 前掲書『エンキリディオン』第 3 章（キリスト教的戦役の武器）20 ページの 19 行目から 20 行目参照。また 60 ページの 11 行目から 13 行目参照。

[142] 前掲書『エンキリディオン』第 10 章（第一教訓―無知の悪について）59 ページの 14 行目から 15 行目。

[143] 前掲書『エンキリディオン』第 10 章（第一教訓―無知の悪について）59 ページ末から 60 ページの 2 行目。

[144] 前掲書『エンキリディオン』第 10 章（第一教訓―無知の悪について）60 ページの 4 行目。

[145] 前掲書『エンキリディオン』第 10 章（第一教訓―無知の悪について）60 ページの 17 行目から 61 ページの 3 行目まで参照。

[146] 前掲書『エンキリディオン』第 3 章（キリスト教的戦役のの武器）21 ページの 2 行目参照。

[147] 前掲書『エンキリディオン』第 3 章（キリスト教的戦役の武器）21 ページの 5 行目参照。

[148] 前掲書『エンキリディオン』第 3 章（キリスト教的戦役の武器）21 ページの 10 行目参照。

[149] 前掲書『エンキリディオン』第 3 章（キリスト教的戦役の武器）22 ページの 1 行目参照。

死後，ペリシテ人がふさいだからである」とある。また『ヨハネの福音書』（4章5節から6節）には「そこで，イエスはサマリヤのスカルという町においでになった。この町は，ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにあったが，そこにヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れを覚えて，そのまま，この井戸のそばに座っておられた。時は昼の12時であった」とある。また，同書13章5節には「それから水をたらいに入れて，弟子たちの足を洗い，腰に巻いた手ぬぐいで拭き始めた。こうしてシモン・ペテロの番になった」とある。また，盲人の目が見えるようになったとあるが，実際，『ヨハネの福音書』（9章6節から7節）には「イエスはそう言って，地につばきをし，そのつばきで，どろをつくり，そのどろを盲人の目に塗って言われた，「シロアム（つかわされた者の意）の池に行ってあらいなさい」。そこで彼は行って洗った。そして見えるようになって，帰ってきた」とある。また『ヨハネの福音書』（13章5節）には，「それから水をたらいに入れて，弟子たちの足を洗い，腰に巻いた手ぬぐいでふき始めた」とある。

エラスムスは，これらから聖書の神秘[150]を探求するためには，聖書研究が必要になると言う。聖書研究に入るために，古典文学の書物によって，神によって書かれた聖書を知るための準備をするときに[151]，「手足を洗わないままでただちに聖書の中」[152]に押し入ることは，神を冒瀆すると，また異教徒の書物[153]によって異教徒の道徳を吸収する必要はない[154]，と説いている。異教徒の書物を深く立ち入って関わりをもつのではなく，「寄留しているにすぎない人の仕方」[155]でその書物に関わり，最終的には，「すべてのことがキリストに関わせられているかどうか」[156]が大切である，とエラスムスは断言する。

しかし，聖書研究にあたって，その文字に固執しこだわり続けるなら，聖書から多くの成果を引き出せない[157]，と言う。エラスムスは，聖書の文字よりも，神の霊に与している。一般の人々だけではなく，衣装や称号によって完全な敬虔を身につけているような人々の心を

[150]「地下の水脈の中に隠されている水は文字によりおおわれている神秘以外」の何ものでもないと言う（『前掲書』3章（キリスト教的戦役の武器）22ページの2行目）。

[151] 前掲書『エンキリディオン』第3章（キリスト教的戦役の武器）22ページの16行目から19行目参照。

[152] 前掲書『エンキリディオン』第3章（キリスト教的戦役の武器）22ページの20行目。このことは，清い心をもって，聖書を読む・研究することを意味している。また，同書23ページの1行目に，世俗的な学問を味わいもしないで，その聖書研究をしようとする行為はどんなにか恥知らずである，とも言う。

[153] エラスムスは，哲学者の中ではプラトン主義者たちに従うことを薦めている。その理由として，エラスムスは，その多くの見解や語り方において，「預言者と福音書の形態にきわめて近い」ことを指摘している（前掲書『エンキリディオン』第3章（キリスト教的戦役のの武器）23ページの10行目から12行目参照）。

[154] 前掲書『エンキリディオン』第3章（キリスト教的戦役の武器）22ページの16行目参照。

[155] 前掲書『エンキリディオン』第3章（キリスト教的戦役の武器）23ページの14行目。

[156] 前掲書『エンキリディオン』第3章（キリスト教的戦役の武器）23ページの15行目から16行目。

[157] 前掲書『エンキリディオン』第3章（キリスト教的戦役の武器）23ページの4行目参照。

も，多くの詩編を毎日朗読する一事に最高の敬虔であるという誤った考えによって占領されている[158]，と言う。また，修道院では敬虔が「凍結し」，「眠り込み」，「死滅している」のが目撃される[159]，と言う。エラスムスは，文字のうちに衰弱し，「聖書に対する霊的認識」[160]に達していないことにその原因を見ている[161]。自身の人間的思念に満足し，古人の解釈を軽蔑している神学者スコトゥス（Duns Scotus）（1266 年生？-1308 年没）が，その語りは機知に充ちたものであるかもしれないが，聖霊に相応しい語りであったかどうかは疑問である，とエラスムスは言う[162]。エラスムスは，「最近の神学者は好んで字義にこだわりすぎ，秘義を探求するよりもある種の詭弁的なへりくつを掘り出そう[163]」と力を注いでいる，と言う。聖書の注釈者の中で文字からの解釈から遠ざかっている注釈者として，霊的な人パウロの他に，オリゲネス（Adamantius Origenes）（182 年頃生-251 年没），アンブロシウス（Ambrosius）（340 年頃生-397 年没），ヒエロニムス（Hieronymus）（337 年頃生-420 年没），アウグスティヌス（Aurelius Augustinus）（354 年生-430 年没）をエラスムスは挙げている[164]。

エラスムスは，聖書の文字にこだわりすぎることなく，そこで示されている聖なる秘義を探求することを説いている。神の霊は，自身の言葉と自身の形を持っているので，それを深く熱心に考察し認識することを説いている。しかし，神の知恵[165]は，われわれに「子供に話すように語り，自分の職務に忠実な母のように私たちの訥弁にその声を合わせて下さいます」[166]。また，「幼児らには乳を与え，弱い者には野菜を与えたまいます」[167]。このように，神の知恵は卑しい者に対し自身を低くしてはいるが，神の知恵の崇高さに向かって上昇しなければならない。

---

[158] 前掲書『エンキリディオン』第 3 章（キリスト教的戦役の武器）26 ページの 6 行目から 9 行目参照。

[159] 前掲書『エンキリディオン』第 3 章（キリスト教的戦役の武器）26 ページの 10 行目から 11 行目参照（なおカギ括弧は筆者による）。

[160] 前掲書『エンキリディオン』第 3 章（キリスト教的戦役の武器）26 ページの 11 行目。

[161] しかし，エラスムスは，詩編を毎日朗読している人たちを拒否してはいない。というのは，神の言葉が少しも理解されていなくとも，誠実な信仰と純粋な心情で語り聞く人たちは，魔術的な祈祷のなかで唱えられる言葉の意味が分からなくとも，その有効な働きをしていると信じている。

[162] 前掲書『エンキリディオン』第 3 章（キリスト教的戦役のの武器）25 ページの 11 行目から 12 行目参照。この見解には，一定程度の敬意をあらわすが，中世のスコラ学には，字義にこだわることによって修辞学の発展を見たと言えるかも知れない。

[163] 前掲書『エンキリディオン』第 3 章（キリスト教的戦役の武器）25 ページの 6 行目から 7 行目参照。

[164] 前掲書『エンキリディオン』第 3 章（キリスト教的戦役の武器）25 ページの 3 行目から 4 行目参照。

[165]『コリント人への第一の手紙』（1 章 23 節から 24 節）に「このキリストは，ユダヤ人にはつまずかせるものであるが，異邦人には愚かなものであるが，召された者自身によっては，ユダヤ人にもギリシャ人にも，神の力，神の知恵たるキリストなのである」とある。パウロは，神の知恵をキリストの知恵と見做している。

[166] 前掲書『エンキリディオン』第 3 章（キリスト教的戦役の武器）25 ページ末から 26 ページの 1 行目参照。

[167] 前掲書『エンキリディオン』第 3 章（キリスト教的戦役の武器）26 ページの 1 行目から 2 行目参照。

エラスムスは，パウロに倣って「地上的な知恵」を忘れ，「神の知恵」にすがることを善しとした。エラスムスは，「この世において知者であると思う人がいるならその人は知者になるために，愚か者となるがよい。なぜなら，この世の知恵は，神の前ではおろかなものだからである」（『コリント人への第一の手紙』 3章18節から20節）という見解を受け入れている。エラスムスは，「あなたがこの世の知恵を捨ててキリストに対してそなえているゆえに，あなたが気が狂っている，分別がない，精神が錯乱している」[168] と愚かしい知者や盲人の手を引く盲人たちが声高く叫んでいることには否定的・批判的である。というのは，その人たちは，たかだか名だけのキリスト教徒にすぎないからである。

第3節　第二の教則：キリストのために財産と生命の喪失を覚悟

3.1　第二の教則

第二の教則は，キリストのために財産と生命を喪失することを覚悟するである。これは，「確固たる決意をもって，心を尽くして，確信に満ちた，かつ，剣士のような心持ちで救いの道を取り，キリストのために財産と生命を損失する覚悟でいる」[169] ことである。これは，「神の国」（「天国」）[170] に棲むキリストに向かうことである。だが実際には，人は「この世の誘惑[171]」に呼び戻され，「家庭人の心配事」[172] のために「この世」に引き戻される。ロトの妻のように振り返る[173] ことなく，預言者の言うようにバビロン[174] のただ中から逃走するように，「天国」を目指すことをエラスムスは希求している。エラスムスは言う，「心をあげてキリストを信じることを断行しなさい」[175]，「あなたの心配事のすべてをキリストに敢えて移しなさい」[176]，「キリストに向かって投げかけなさい。そうすると，キリストはあなたを受け止めて下さる」[177] と。

---

[168] 前掲書『エンキリディオン』第4章（汝自身を知ることが知恵の根本である）32ページの14行目から15行目。エラスムスは，「現世の知恵」を蔑視し，「神の知恵」に頼ろうとしている。エラスムスは，「現世の知恵」を，虚偽に満ちた語りで愚かな者達に吹聴する知恵と見ている。これは，パウロの「地上的な知恵」に相当する。

[169] 前掲書『エンキリディオン』第11章（第二教則）61ページの5行目から6行目。

[170]「あくびをしている人たちに天国は与えられない」，また「激しく襲う者たちがそれを奪い取っている」と言う（前掲書『エンキリディオン』第11章（第二教則）61ページの7行目から8行目参照）。なお，本文のカギ括弧は筆者による。

[171] 前掲書『エンキリディオン』第11章（第二教則）61ページの9行目。

[172] 前掲書『エンキリディオン』第11章（第二教則）61ページの9行目から10行目。

[173]『創世記』（16章26節）に「しかしロトの妻は後ろを顧みたので塩の柱になった」とある。

[174] 日本聖書協会編『聖書』（1968）『エレミヤ書』（51章6節）に「バビロンのうちからのがれ出て，おのおのその命を救え」とある。

[175] 前掲書『エンキリディオン』第11章（第二教則）62ページの9行目。

[176] 前掲書『エンキリディオン』第11章（第二教則）62ページの10行目。

エラスムスは，自分自身を「この世」とキリストとの二つの部分に分けることはできなく，すなわち，二人の主人に仕えることはできなく[178]，また神は両足とも跛行している人々に我慢ができないと言う[179]。エラスムスは，『マタイ福音書』（6章24節）の「だれも，ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し，あるいは，一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは，神と富とに兼ね仕えることはできない」を引用して，キリストに兼ね仕えることを説いている。エラスムスは，「この世」の富ではなく，キリストの精神を纏うことを説いている。

3.2　二つの道

人（すなわち，多くのキリスト教徒）には，二つの道があり，一つは情念に仕えて破滅へ導く道であり，もう一つは肉を殺して生命に導く道である[180]。第三の道はない。二つのいずれかを選ばなければならない。「僅かな人しか歩まない狭い道」[181]を進むことをエラスムスは説いている。もし「この世」に依存して生きるなら，キリストにあって生きているのではない。エラスムスは，『ガラテヤ書』（6章14節）の「しかし，わたし自身には，わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に，誇りとするものは，断じてあってはならない。この十字架につけられ，この世はわたしに対して死に，わたしたちもこの世に対して死んでしまったのである」を引用し，「この世」に対してキリストと共に「十字架につけられる」[182]ことになるという認識を示し，キリストと共にあるという認識を示している。エラスムスは，「この世」のキリスト教徒の欺瞞さを嘆いて，多くのキリスト教徒が，「自分は聖職者についている者ではなく」[183]，世俗の人であるので現世を楽しんでいると認識している，また，「私は祭司であっても修道士ではない」[184]という現実を認識している，また修道士もそこらにいる修道士とは違うと都合の良い言い訳をする[185]ことを認識している。エラスムスは，このようなキリスト教徒を「哀れな人」[186]と嘆いている。

---

[177] 前掲書『エンキリディオン』第11章（第二教則）62ページの11行目から12行目。
[178] 日本聖書協会編『聖書』（1968）『マタイによる福音書』（6章24節）には，「だれも，ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し，あるいは，一方に親しんで他方をうとんじるからである」と証されている。
[179] 前掲書『エンキリディオン』第11章（第二教則）62ページの18行目参照。
[180] 前掲書『エンキリディオン』第11章（第二教則）63ページの2行目から3行目参照。
[181] 前掲書『エンキリディオン』第11章（第二教則）63ページの4行目。
[182] 前掲書『エンキリディオン』第11章（第二教則）63ページの7行目。
[183] 前掲書『エンキリディオン』第11章（第二教則）63ページの10行目。
[184] 前掲書『エンキリディオン』第11章（第二教則）63ページの11行目。
[185] 前掲書『エンキリディオン』第11章（第二教則）63ページの12行目参照。
[186] 前掲書『エンキリディオン』第11章（第二教則）63ページの15行目。

天・地・海・共通の空気を世と呼ぶなら，いかなる人も世に依存して生きていることになる。だが，「権勢欲・享楽・欲望・情欲を世と」[187] 呼ぶなら，人が実際に世俗的である場合には，その彼は，キリスト者ではないことになる。自分の十字架を負ってキリストに従わない者は，キリストに相応しくない，と『福音書』にてキリストは言う[188]。もしキリストの国があなたに無関係であれば，キリストの「謙虚・貧困・患難・侮蔑・労苦・苦闘・悲しみ」[189] もあなたに関係ない。またキリストと無関係ならば，「この世」に対してキリストとともに葬られるということもあなたには関係ない，とエラスムスは言う[190]。「罪に死ぬこと，肉的な欲望に死ぬこと，世に対して死ぬことは困難なことであって，ほんの僅かな修道士が知っているにすぎない」[191] が，これは，すべてのキリスト教徒に「共通の信仰告白」[192] であり，その告白をすでに「洗礼の時に誓っている」[193] とエラスムスは説いている。

エラスムスは，キリストに倣って「この世」に対してキリストと共に十字架につけられても，永遠の命（幸福の不死性）に到達する狭く細い道を見い出すことを薦めている。

第 4 節　第三の教則：人間的衝動を廃し，キリストの跡を歩む

4.1　第三の教則

第三の教則は，人間的衝動を廃し，キリストの跡を歩むである。これは，地獄の入り口であるように戦慄させるものや幻想は，ことごとく恐れるに足りないものと見なすことである[194]。エラスムスは，「この世」（「現世」）では，人は「多くの隷従に耐えなければならない」辛苦に満ちた宮廷生活を強いられ，「君主の寵愛を得ようとし，害にも益にもなりうる人たちの好意を媚びへつらって」獲得し，ときには「権力者の不正を隠して」おかなければならない[195]，と言う。また商人たちも「海を越え，山を越え，火を超えて，貧困から」[196] 逃走してい

[187] 前掲書『エンキリディオン』第 11 章（第二教則）63 ページ 17 行目。エラスムスは，キリストが権力欲や享楽や欲望や情欲などの欲望とは関係していないと見ている。このような欲・欲望に繋がる人は世俗的であると考えていたと思われる。

[188]「また自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくない。」（『マタイ福音書』10 章 38 節），「イエスは弟子たちにいわれた，『だれでもわたしについてきたいと思うなら，自分を捨て，自分の十字架を負うて，わたしに従ってきなさい』」（『マタイ福音書』16 章 24 節）。

[189] 前掲書『エンキリディオン』第 11 章（第二教則）64 ページの 4 行目。エラスムスは，キリストがその謙虚や患難や労苦や苦闘や悲しみ，さらに貧困に対するキリストのいたわりに関係していると考えている。

[190] 前掲書『エンキリディオン』第 11 章（第二教則）64 ページの 1 行目から 2 行目参照。

[191] 前掲書『エンキリディオン』第 11 章（第二教則）64 ページの 9 行目から 10 行目。

[192] 前掲書『エンキリディオン』第 11 章（第二教則）64 ページの 10 行目。

[193] 前掲書『エンキリディオン』第 11 章（第二教則）64 ページの 11 行目。

[194] 前掲書『エンキリディオン』第 12 章（第三教則）65 ページの 4 行目参照。

[195] 前掲書『エンキリディオン』第 12 章（第三教則）65 ページの 10 行目から 15 行目参照。

[196] 前掲書『エンキリディオン』第 12 章（第三教則）65 ページの 17 行目から 66 ページの 1 行目。

る，と言う。結婚生活では「多くの家庭内の心配事に満ちて」[197] おり，どれほどの不幸を目にしているか，公職での「心配と苦労と危険の引き受け」[198] など巨大な災いの波に襲われている，と言う。このように「現世」のために戦う人は，多くの歳月を無価値な事柄のために，不確実な希望のもとにあえぎ，疲れ果て，不安におののき，結局，不安と辛苦に充ちた「現世」[199] での生活は，明らかに永遠の苦悩である[200]，と言う。現世での生活とキリストの徳の道を比較し，エラスムスは，キリストの道のみが至福への道・永遠の不滅生命に至ると確信していた。

エラスムスは，「徳の道はすぐに険しくなり，進むにつれてゆるやかとなって，歓ばしくなり，この道を経て，確固とした希望を抱いて最高善にいたる」[201] と言う。それに対し，「現世」での生活において同じように辛苦をしても獲られるのは「永遠の死」への備えであり，さらに，担うのも耐えるのもできないほど多くの悲しみと困難で満ちている「現世」に従ってどのような生活ができようか[202]，とエラスムスは言う。

4.2　現世（「この世」）と徳の道

エラスムスの認識によると，「現世」での生活は，辛苦に満ち，君主などへのこびへつらい，家庭内での心配事に満ちている。エラスムスの社会認識をあげてみると，まず，宮廷生活が辛苦に満ち充ちていて，そこでは隷従に耐えなければならない生活であり，君主の寵愛を獲るために人にこびへつらう生活である。次に，商人も海を越え，山を越え，火を超え，貧困から逃げて，辛苦に耐える生活をしている。また，結婚生活には家庭内の心配事が満ちており，結婚を経験している人は，多大な不幸を目にしている。さらに，公の職務に携わる時には，どれほどかの心配と労苦と危険とを引き受けなければならない。宮廷や君主のもとでの生活や家庭生活などにおいて現世と戦っている人々が，はかなく「無価値な事柄」[203]（媚びへつらい，隷従，家庭などの心配事など）のために，「疑わしい希望」[204]（心配，労苦，危険を引き受けて，苦悩して死すこと）のもとにあえぎ疲れ果て，不安におののき，現世の生活に明

[197] 前掲書『エンキリディオン』第 12 章（第三教則）66 ページの 2 行目。
[198] 前掲書『エンキリディオン』第 12 章（第三教則）66 ページの 3 行目。
[199] エラスムスは，前掲書『エンキリディオン』（第 12 章 66 ページ）において，「この世」で辛苦をもって生活することは，永遠の死であるという。そのような苦労は愚の骨頂である。「この世」では，心配事が心配事を引き寄せ，悲嘆が悲嘆から生まれ，憩いも安らぎもない。外には艱難辛苦があり，内にはさらに重苦しい憂愁がある，と言う。これが「現世」であると定めている。
[200] 前掲書『エンキリディオン』第 12 章（第三教則）66 ページの 9 行目から 13 行目参照。
[201] 前掲書『エンキリディオン』第 12 章（第三教則）66 ページの 14 行目から 15 行目。
[202] 前掲書『エンキリディオン』第 12 章（第三教則）66 ページの 15 行目から 18 行目参照。
[203] 前掲書『エンキリディオン』第 12 章（第三教則）66 ページの 9 行目。
[204] 前掲書『エンキリディオン』第 12 章（第三教則）66 ページの 10 行目。

け暮れ，結局，その生活は「明らかに永遠の苦悩」[205] である，とエラスムスは認識している。

それに対して，あなたが世（「現世」）を逃れてキリストのもとに向かうとき，「たとえ世には快適なものがあるにしても，あなたは何かを残して御国にゆくのではなく，ずっと価値のないものをいっそう高価なものと交換する」[206] のだと確信している。「この世」で「一般大衆の名声，民衆の喝采，寵愛，権威，友人，名誉など」[207] の求めて得られるものがあるが，「神の国を何よりも先にもとめる人々には，これらすべては与えられる」[208]。「ただ，御国を求めなさい。そうすれば，これらのものは添えて与えられるであろう」（『ルカ福音書』12 章 31 節）を引用し，キリストは，それらが神の国にあって獲られることを確信している。また『列王紀上』（8 章 20 節）に，ソロモンに神の国が授けられたとある，すなわち，「私は父ダビデに代わって立ち，主が言われたように，イスラエルの位に座し，イスラエルの神，主のみなのために宮を建てた」とある。

「神の国」（「御国」）では，キリストと共にあり，キリストによって嘉（よみ）され，より善き人たちに気に入られる。この「神の国」では「不滅の閑暇」[209] や心（魂）の平安[210] や「平静なる良心」[211] が得られ，「報酬の希望」[212] や良い精神に至る。神の国では，「この世」で良きものと思われている「財産は減少し」[213]，「この世」での名声や権威を失い，王や君子による寵愛をなくし，大衆からの喝采はなくなり，「この世」の友人も失う。しかし，「神の国」は，不滅の死，不滅の閑暇，魂の平安などあまたの報酬を約束している。しかし，今日，その「神の国」はどこにあるのであろうか。

第 5 節　第四の教則：キリストが唯一の目標

5.1　第四の教則

第四の教則は，キリストが唯一の目標である。エラスムスは，自分の全生涯の唯一の目的

[205] 前掲書『エンキリディオン』第 12 章（第三教則）66 ページの 13 行目。

[206] 前掲書『エンキリディオン』第 12 章（第三教則）68 ページの 10 行目から 12 行目。エラスムスは，以下のような交換をあげている。あなたは世にあって尊敬されることはないでしょうが，創造者たるキリストに嘉せられる。財産は減少してゆくが，あの宝（不滅の死，魂の平安）は大きくなる。身体は弱くなるが，心は強くなる。皮膚の輝きは衰えますが，心の美しさは輝きわたる。

[207] 前掲書『エンキリディオン』第 12 章（第三教則）69 ページの 2 行目。

[208] 前掲書『エンキリディオン』第 12 章（第三教則）69 ページの 3 行目。

[209] 前掲書『エンキリディオン』第 12 章（第三教則）66 ページの 17 行目。

[210]「わたくしのくびきを負うて，わたくしに学びなさい。そうすれば，あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」（『マタイ福音書』11 章 29 から 30 節）。

[211] 前掲書『エンキリディオン』第 12 章（第三教則）67 ページの 11 行目。

[212] 前掲書『エンキリディオン』第 12 章（第三教則）67 ページの 13 行目。

[213] 前掲書『エンキリディオン』第 12 章（第三教則）68 ページの 16 行目。

としてキリストを前に据え，すべての熱意，あらゆる努力，いっさいの閑暇と仕事をキリストひとりに向けることことである[214]，と言う。さらに，「キリストを空虚な言葉であると思いなすのではなく，愛，率直，忍耐，純潔」[215]であると確信し，「悪魔というものが，これらのものからあなたをそらすもの」[216]にほかならない，と説いている。そうすれば，「唯一最高善のようにキリストのみに目を注ぎなさい。そうしてキリストのほか何ものも」[217]愛さず，崇拝せず，追求しなくなる，とエラスムスは説いている。キリストに向かう人は徳に引き寄せられ，悪徳に仕える人は悪魔に身を引き渡す，と説いている。ゆえに，「キリストに向かうのとは別のところに目を注ぐと，たとえあなたが正しいことを行ったとしても，実を結ばないでしょうし，破滅に導くものにさえなる」[218]とエラスムスは言う。

エラスムスは，正しい行い・実践によって唯一最高善であるキリストに到達することが大切であると認識している。

5.2　最高の目標（最高善）に至る過程の 3 つの様態

最高善を追求する過程で出会うものが助けになるか，あるいは妨げになるかを見極め，採用するか拒否するかをきめなければならない[219]。エラスムスは，その物事について 3 つの様態を示しているが，まずはじめは，「不道徳なもの」[220]である。これは，不正に対する報復，人に悪しきことを願うこと，あるいは善人を傷つけることなどであるが，これらは，たとえ「どんなに利益や苦痛が期待され」[221]ようとも，拒否しなければならないものである。これは不道徳であるからである。次に挙げているのは，「徳義の高いもの」[222]である。「すべての人に善を欲すること，友人を誠実に援助すること，悪徳を憎むこと，敬虔な談話を歓ぶこと」[223]などである。しかし，あるものは，この二つの「中間的なもの」[224]があるが，これを第三のものとしている。たとえば，「健康，美貌，強壮，雄弁，学識」[225]などを挙げている。これらは，

[214] 前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）69 ページの 13 行目から 14 行目参照。
[215] 前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）69 ページの 15 行目。
[216] 前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）69 ページの 16 行目。
[217] 前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）70 ページの 1 行目から 3 行目。
[218] 前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）70 ページの 7 行目から 9 行目。これに続けて，エラスムスは，「善いことでも正しく行わないならば，それは悪徳なのです」と言う。
[219] 前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）70 ページの 10 行目から 11 行目参照。
[220] 前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）70 ページの 13 行目。
[221] 前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）70 ページの 14 行目から 15 行目。
[222] 前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）70 ページの 17 行目。
[223] 前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）70 ページの 17 行目から 18 行目。
[224] 前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）70 ページの 19 行目。
[225] エラスムスは，前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）71 ページの 5 行目おいて，美貌，身体の強さ，財産より知識のほうがはるかに敬虔の助けになると言っている。また，エラスムスは，第四教則の例

「最高の目標に役立たないかぎりにおいて」[226] 利用すべきではない，とエラスムスは言う。たとえば，あなたが学芸をキリストのために愛されるのなら正しいが，ただ知るためにのみ愛するなら，止まっているに過ぎない。

エラスムスは，「中間的ものの」なかで，知識を第一位に置いている[227]。次に，健康，天賦の才能，雄弁，美貌，強壮，地位，寵愛，権勢，繁栄，名声，家柄，友人，家財を位置づけ[228]，「これらが徳への最短の道に役立つ限り」[229] において，それらを利用されなければならない，と言う。「これらのものを手に入れても，得意にならず」[230]，またそれらのものが「取り去られ奪われても心中で仰天すること」[231] もなく，それらのものに気をとられることなく「熱意をもって唯一の目的であるキリストに向かって登ろうと努め」[232] なければならない，と言う。エラスムスは，この「中間的なもの」に止まることを拒否し，「中間的なものを最高のことのように，まるで価値のないものを最高価値のように考える」[233] ことを拒否し，さらに，「中間的なもの」に止まることなく，「悪徳への嫌悪とともに徳への愛を増大」[234] するように祈ることを説いている。たとえば，健康を与えられるようにと祈るが，その健全さが悪用されると，敬虔なことではなく，不敬虔なことになる。すなわち，健康な人が窃盗するなら，健康を神（聖人）に祈ることは不敬虔になる。また富が獲られますようにと祈るが，その使い道を知らないと，それは自身の破滅を祈ることになる。

エラスムスは，「唯一の最高善のようにキリストのみに目を向け」，「中間的なもの」に止まることなく，キリストの他になに何ものも追求しないことを説いている。

示をしている。その13章73ページの6行目から74ページかけて，職業につくことと，キリストに求めることの関係を説明している。それに就くことが家族をキリスト教徒として養うためならば，その時には正しく歩んでいる。また，断食をする。これは，表面的には敬虔なわざであるが，それが食糧を節約するためや他の人より敬虔に思われたいためや病気が快楽を奪うことを恐れてなら，それらはキリストのためではない。また，研究をする場合も，それが聖職者になるためなら，それはこの世のためであってキリストのためではない。また身体が健康であることを願うのは，醜くならないため，情欲を見たし続けるために健康に気遣うならば，キリストから転落しており，別の神を作っていると言っている。エラスムスは，中間的なものに止まるな，と言っている。

[226] 前掲書『エンキリディオン』第13章（第四教則）70ページ末から71ページの1行目。
[227] 前掲書『エンキリディオン』第13章（第四教則）71ページの19行目。
[228] 前掲書『エンキリディオン』第13章（第四教則）71ページの19行目から20行目参照。
[229] 前掲書『エンキリディオン』第13章（第四教則）71ページ末から72ページの1行目。
[230] 前掲書『エンキリディオン』第13章（第四教則）72ページの9行目。
[231] 前掲書『エンキリディオン』第13章（第四教則）72ページの9行目。
[232] 前掲書『エンキリディオン』第13章（第四教則）72ページの20行目。
[233] 前掲書『エンキリディオン』第13章（第四教則）75ページの11行目から13行目。
[234] 前掲書『エンキリディオン』第13章（第四教則）75ページの14行目。

5.3　特定の聖人を神にすることのないようにする

エラスムスは，「特定の聖人たちをある特殊な儀式に則って崇拝している人々」[235] の行為につても批判的に言及している。ある人は，救難聖人として知られるクリストフォルス（Christo-pholus）（3 世紀のローマ皇帝デキウス時代の殉教者）を毎日拝み[236]，ある人は，ロックス（生没不明）と言う聖人を拝み「ペストを追い出してくれる」[237] と信じ，「歯が痛まないよう」[238] に聖女アポロニア[239] に敬意を表し断食し，また，聖ヨブをおがみ「疥癬がなくなる」[240] ことを祈り，「失くしたものが見つかる」[241] ようにとヒエロニムス（Eusebius Sophronius Hieronymus）（347 年頃生-420 年没）にろうそくを点す人もいる，とエラスムスは言う。聖女バルバラ[242] と聖ゲオルギウス[243] につても言及している。

これらの聖人崇拝は敬虔な行いであるが，「身体上の幸不幸への考慮から離れてキリストに向きを変えないなら」[244]，キリスト教徒に相応しいもではない，とエラスムスは認識している[245]。というのは，これらの行為は，死が早くやってこないように祈るが，よりよい心が与えられるように，あるいは「生活が改められなければならない」[246] と誓うのではなく，死なないようにと神に嘆願しているにすぎないからである。また，富を祈り求めて，その使い方を知っていないなら，そうすると「あなたは自分の破滅を祈っている」[247] ことになる，と言う。

---

[235] 前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）74 ページの 2 行目。

[236] 前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）74 ページの 2 行目から 3 行目参照。聖クリストフォルスにつては，エラスムス『痴愚神礼賛』（渡辺一夫訳）の 111 ページでも取り上げている。その脚注（3）によると，聖クリストフォルスの功徳は，水難，火難，地震難を避ける。また画像に描かれるときには 4 メートルほどの背丈が与えられた。

[237] 前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）74 ページの 4 行目。

[238] 前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）74 ページの 6 行目。

[239] エウセビオス『教会史』（下）（秦　剛平訳，第 VI 巻 41 章 7 節）に，「彼らはそのとき，アポロニアと呼ばれる高潔な年老いた処女を捕らえ，その両顎を強打しその歯を一本残らず折りました。そして，町の前にたき木を積み上げ，彼女が瀆神の教えを唱和しなければ，焼き殺すぞと脅しました」，彼女は「ひるむことなく火の中に飛び込んでもえつきました」とある。多分，エラスムスがあげているアポロニアは，この人物であろうと思われる。

[240] 前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）74 ページの 7 行目。

[241] 前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）74 ページの 8 行目から 9 行目。

[242] エラスムス『痴愚神礼賛』（渡辺一夫訳）の 114 ページの脚注では，この聖女は大砲を撃つ人の守護神と説明している。

[243] エラスムス『痴愚神礼賛』（渡辺一夫訳）の 112 ページでは，「聖ゲオルギウスの馬を，実に敬虔な態度で，馬具や鎧甲で飾り立てて，これを拝むやうになりました」とある。「今様のヘラクレスに見立てられる」と述べられている。

[244] 前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）74 ページの 13 行目から 14 行目。

[245] これらの敬虔は，バルバラやゲオルギウスに敵の手に陥らないようにと，お決まりの文句を唱えることや，またヘラクレスに戦利品の十分の一とか資産の十分の一を捧げた者には裕福が約束され，航海の無事のために雄牛をネプティヌス（ポセイドン）に犠牲として捧げる迷信と大差ない，とエラスムスは言う。

[246] 前掲書『エンキリディオン』第 13 章（第四教則）74 ページの 20 行目。

すばらしい健康が与えられるように祈ったとしても，「健全なものも悪用される」[248]と，あなたの「敬虔は不敬虔になる」[249]と言う。

聖人に願いをかけることは，金持ちになるために十分の一税を奉献すること，異教徒が航海の無事を願って雄牛を犠牲にすること，あるいは雄鶏を犠牲として捧げ病気からの快復を願ったことなどの迷信[250]と大差ない，とエラスムスは認識している。聖徒・聖人もエラスムスにとっては，「中間的なもの」である。よって，聖徒・聖人に止まることは，唯一の最善のキリストではなく，「中間的なもの」に止まることになる。その「中間的なもの」を最高のもののように，エラスムスは「まるで価値のないものを最高価値のように見做し，祈ること」に耐えることができないのである。人々がロックスやヨブやヒエロニムスなどに祈願するだけでなく，祈る人自身の生活を改善する努力をするならば，その行為を讃えられる，とエラスムスは考えている。

第6節　第五の教則：可視的世界から不可視な世界へ

6.1　第五の教則

第五の教則は，可視的世界から不可視な世界へである。この教則では，「可視的な」ものから「不可視的な」ものへの前進を助け，完全な敬虔の確立へと進むことを求めることが提示されている。この教則に従うとき，人は霊的な生活を保つことになる，とエラスムスは認識している。エラスムスは，不可視的なものに真実が宿ると認識している点でもプラトンの延長線上で，現実の社会を認識している。

---

[247] 前掲書『エンキリディオン』第13章（第四教則）75ページの2行目から3行目。

[248] 前掲書『エンキリディオン』第13章（第四教則）75ページの3行目から4行目。

[249] 前掲書『エンキリディオン』第13章（第四教則）75ページの4行目。

[250] エラスムスは，素朴な迷信から聖人を拝むことを強く非難することはない。それよりも，己の利益を追求し，どうでもいいようなことを最高で敬虔なこと・ものと自慢し，自分の利益のために民衆の無知を深めている人々をエラスムスは非難している。

アウグスティヌス著作集第6巻『キリスト教の教え』（（加藤　武訳）第2巻第20章（迷信））には「偶像としてこしらえ拝むために人間が考え出したものは，すべて迷信である。このように考案されたものは，被造物や被造物の一部を神にして拝んだり，徴しとしてダイモンに相談したり，ダイモンとの間でみとめられ結ばれた，徴しに関する協定に関係している」とある。その章において，アウグスティヌスは，具体的には，「腸卜とか占いの書」や「護符とか神癒」も偶像崇拝に属すると言う。また，迷信として「呪文とか判じ物（一種の刺青）」，「自分の家の前でひとと出会ったら戻って敷居を踏む」，「たれかが靴をはいている最中にくしゃみをしたら寝台にひき返す」，「でかけにつまずいたら家に戻る」，「着物を鼠にかじられたら目の前の損害を嘆くよりも，将来の災いの前触れにおののなくてはならない」などを挙げている。また，「なにかを吊したり，結わえたり，ある仕方で踊ったりする」こと，「耳のさきにつける耳飾り」，「指にはめる駝鳥の指輪」，「しゃっくりをするときには左手の親指を右手で押さえるとよい」ことなども迷信行為と見做されている。

目に見える「この世」のすべてのところに，古い律法と新しい律法のなかに，教会のすべての戒めのなかに，あるいは人間的なすべての仕事のなかに，「外的には肉が，内的には霊」[251]がある。人間が秩序を転倒させない（最高善に向かって進み，キリストに倣って生活する）ならば，目に見えるもの（「可視的なもの」）がより大きな価値に役立たない場合には，それにあまり頼らずに，「絶えず霊と愛に属するもの」[252]に目を向けると，人は「か弱い子どものような面持ちをすることはなく，動物のようでもなく，霊を所有していない枯れた骨」[253]にもならない。また「眠たげな者，愚鈍な者，戦闘的な者，嫉妬深い者，中傷する者」[254]ではなく，キリストによって「高められる者，愛に富む者，運不運に動揺しない者，些細なことに寛大な者，最高の者に向かって励む者，熱意に充ちた者，知恵にあふれる人」[255]になる，とエラスムスは認識している。

よって，エラスムスは，この教則を熱心に熟考し，絶えず霊と愛とに属するもの，すなわちキリスト（の霊）によって力強い者になることを説いている。キリスト教徒にあなた自身を高めなさい[256]と励ましている。

エラスムスは，「可視的な世界」と「不可視的な世界」が人間とどのように関わっており，また人間は，如何にして，「完全な敬虔」を確立しうるかを問題にしている。

6.2　可視的な世界，不可視的な世界ならびに人間界

エラスムスは，「知性界（不可視界，天使界）」，「可視界（天球）」，そして「人間界」の三つの世界[257]を想定し，神は「知性界」に祝福された人々とともにおり，そして「人間界」は第三の世界にあり，「身体（肉）により可視界に，魂により知性界（不可視界）にそれぞれ関わっている」[258]と想定して，その上で「完全なる敬虔」を確立するために「可視界」と「不可

[251] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）105ページの7行目から9行目参照。

[252] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）105ページの11行目。

[253] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）105ページの11行目から13行目。

[254] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）105ページの13行目から14行目。エラスムスは，これらの人間を悪魔（悪人）と見ていると考えられる。

[255] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）105ページの14から16行目。エラスムスはこれらの人間を善人と見ていると考えられる。

[256] 身体から霊へ，「可視界」から「不可視界」へ，文字から秘儀へ，感覚的なものから知的なものへ，合成体から単一体へ高めることをエラスムスは望んでいる。そのことによって，主に近づくものとすることによって，主自身の方から近寄りたもうと言う。

[257] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）77ページにおいて，エラスムスは，「可視界」と「不可視界」の関係を説明している。「可視界」おいて，目に見える太陽は，「不可視界（知性界）」における霊における神の精神に対応しており，目に見える月は「知性界」の天使たちと敬虔な魂からなる軍勢に関係づけられ，「不可視界（天界）」は「可視界（天球）」に対してなすべきことを神は魂に向かっておこなう，と言う。また，神の霊の恩恵は，聖書のいたるところで，光になぞらえられている，と言う。

視界（知性界）」の両世界に関わっている人間のなすべきことについて説いている。「可視界」にあって人間は「寄留者」[259]であるから，決して休息してはならないし，感覚に現れるものすべてを「不可視界（知性界，天使界）」へ，あるいは，道徳へ，また「知性界」に相応しい人間の部分である魂に関係づけなければならない[260]，と認識している。すなわち，不完全である，あるいは，「中間的なもの（可視的な事物）」に止まらずに，「不可視的な」事物へと進むよう努力するならば，人は「完全なる敬虔」を確立する，すなわち，霊的なものへの愛へと自己を高めること，あるいは，「不可視的な」もののために「可視的な」ものを軽蔑することによって「完全な敬虔」を確立する，と認識している。この努力をゆるがせにしたりすると，大抵のキリスト教徒が敬虔ではなくなり，迷信深くなり，キリストの御名以外は異教徒の迷信と大差ないものに関わることになる[261]と警告している。すなわち，エラスムスは，目で見られる事物（「可視的な」もの）は，辛うじて，影に過ぎず，目の前の貧弱な像にすぎなく[262]，「不可視的なもの」は無に帰する，と認識している。

身体で感覚されるものは実際には存在していなく，無に帰するものから離れ，「真に永遠なもの」を「恒久不変で純粋なもの」に駆り立てなさい，とエラスムスは説いている。「身体的な事柄に関して感覚が欲したり恐れたりするすべてのことを，内的な事柄に関して霊がはるかに激しく愛したり憎んだりする」[263]。たとえば，「身体の優美な姿は，目に好ましいもの」[264]であるが，「魂の美しい姿は，どんなに愛すべきもの」[265]であるかしれない。また，醜い顔は不快に感じられるが，「悪徳によって醜くされた心がいかに醜いもの」[266]であるかしれない。

---

[258] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）76ページの14行目。

[259] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）76ページの15行目。

[260]「可視界」における太陽に相当するものは，「知性界」および霊における，神の精神である。「可視界」における月に相当するのは，「知性界」における天使たちと敬虔な魂である。

[261] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）76ページの9行目から10行目参照。

[262] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）77ページの19行目から20行目参照。エラスムスは，前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）79ページの2行目から3行目において，形態的な事物に対し無感覚になり，霊に属するものをいっそう深く味わうようになればよい，と言う。また，エラスムスは，その79ページの4行目において，外的に生きることが少なくなるに応じて，いっそう真実に内的に生き始める，と言う。また，その79ページに5行目において，永遠なものが認識されてくるに応じて，はかないものが私たちを動揺させることが少なくなる，と言う。さらに，その79ページの6行目において，真理をますます仰ぎ見るようになるに応じて，暗い影のうちにあるものに驚かなくなる，と言う。

エラスムスにあっては，「霊に属するもの」，「内的なもの」，「永遠なもの」，「真理」は同じ意味内容を持っており，最終的に，ここに至ることが完全な敬虔の確立になるのであろう。また，エラスムスにあっては，「形象的な事物」，「外的なもの」，「はかないもの」，「暗い影のもの」は同じ内容を持っている。

[263] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）78ページの1行目から2行目。

[264] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）78ページの2行目。

[265] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）78ページの3行目。

[266] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）78ページの5行目。

このように身体などの美や醜（「可視的なもの」）に感じられる（知覚される）ものすべては，「不可視的なもの」である魂によって認識される。というのは，およそ「美と醜とが魂に属している」[267]，とエラスムスは言う。同様に，「若年と老年，病気と健康，死と生，貧困と富裕，快楽と苦悩，戦争と平和，戦慄と情熱，渇望と飲酒，飢えと食物もまた魂に属している」[268] と言う。若年や老年は，身体の目で感覚的に捉えられるが，若者の心が悪徳に充ちていればその心は醜いのである。逆に，老人の心が善意に充ちていれば，その心は好ましいのである[269]。

エラスムスは，形態的事物に対する感覚が薄れて，無に帰するものから離れることを習熟し，永遠的なもの，恒常不変で純粋なものへと駆り立てられる「完全な敬虔」を確立するための道筋を説いている[270]。その魂を神に向けることによって感覚に写し出されるすべてのものを「神とあなたの不可視的部分とに関係づける習慣を身につけなさい」[271] と説いている。

人間は，「可視的な世界」にも「不可視的な世界」にも居住することができるが，「可視界」に止まることなく「不可視界」に向かって進むことを求め，そのためにはキリストの霊を身につけることを薦めている。

6.3　礼拝（サクラメント）の意味

エラスムスは，サクラメントの意味を説明している。「怒り，名誉心，愛欲，快楽，嫉妬が人のすべてを捉えているなら，たとえその人が祭壇に触れても，ミサから遠く離れていて」[272]，キリストは殺されている。また人々は「洗礼を受けて」[273] いるが，それだからと言って直ちに，「自分がキリスト教徒だと考えてはなりません」[274]。また「全心をあげて現世しか味わっていないなら，その人は，外見的にはキリスト教徒であっても，隠れた内面では異教徒よりもっと異教徒的」[275] になる，とエラスムスは認識している。「人々がサクラメントのからだを捉えているが，霊がかけている」[276]。さらに，身体が洗い清められても，「心が不潔のまま」[277]

[267] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）78 ページの 7 行目。
[268] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）78 ページの 6 行目から 7 行目。
[269] 同様に，次のようにも言うこともできる。身体の健康は好まれ，その病は不快に感じられる。だが，心の健康は更に一層愛されるべきであり，心の病は大変に醜いものである。また身体の死は好まれないが，身体の長生きは望まれる。だが，心の死は悪あるいは悪魔に支配されるが，生き生きした心は更に一層愛されるべきである。また貧困は嫌われ，富裕は好まれるが，だが全力を尽して富を求める心の貧困は醜いものであり，豊かな心は更に一層愛されるべきである。戦争は醜いが，平和は更に一層愛されるべきである。
[270] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）78 ページの 8 行目から 9 行目参照。
[271] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）77 ページの 8 行目。
[272] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）85 ページ末から 86 ページの 1 行目。
[273] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）86 ページの 4 行目。
[274] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）86 ページの 5 行目。
[275] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）86 ページの 5 行目から 6 行目。
[276] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）86 ページの 7 行目。

であり，「からだに油が塗られても，心には塗られていない」[278] なら，また「聖水をまき散らされても，内的な汚れを心からぬぐい去っていなければ」[279]，何の意味もない，とエラスムスは説いている。

人々（キリスト教徒）は，神のごとき聖者たちを崇拝し，彼らの遺物に触れるのを喜んでいる。しかし，その人たちは「彼らが残した最善のもの，たとえば純潔な生涯の模範」[280] を軽視している。このエラスムスの見解は，偶像崇拝を批判する思想である。偶像として「石材や木材に刻まれたキリストの像」，キリストが身につけていたと見做している「ハンカチや下着」，所有している「十字架」，さらに，棺の中のパウロ[281] の「骨や肢体の遺骨（断片）」，また「マリア[282] 崇拝」や「聖人崇拝」などが偶像崇拝に繋がる，とエラスムスは認識していた。

6.4　偶像崇拝の例示

最初に，キリストの偶像から見てみよう。「あなたは石材や木材に刻まれた色鮮やかに色彩されたキリストのお顔の姿を賞賛」[283] する，また，「あなたはキリストのものだと認められている下着とかハンカチをびっくりして眺め」[284] る。だが，「それなのにキリストの律法のことばを眠そうな目で読む」[285]，「家に十字架の小さなかけらを所持していることを，あなたはとても重大なことのように信じ」[286] ている，と言う。しかし，それは「心のうちに創られた十字架の秘儀をあなたが携えていることに比べるなら，何でもない」[287] ことであって，エラスムスは，偶像よりも心に十字架の上で生け贄にされたキリストの秘められた意義を聖書から読み解くことの方が大切である，と言っている。また，もしキリストの顔を形とった石材や木材が，またキリストの下着やハンカチが，また所有している十字架の方がキリストの律法のことばよりもキリスト教徒を敬虔にするなら，ユダヤ人の方がキリスト教徒よりも敬虔であることになる，と言う[288]。

---

[277] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）86 ページの 9 行目。
[278] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）86 ページの 10 行目。
[279] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）86 ページの 12 行目から 13 行目。
[280] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）86 ページの 14 行目。
[281] エラスムスは，「ペテロの信仰」と「パウロの愛」とに倣いなさいと言う（前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）86 ページの 16 行目から 18 行目参照）。
[282] エラスムスは，マリアの謙虚さを模倣せよと言う（前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）86 ページの 16 行目参照）。
[283] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）87 ページの 18 行目。
[284] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）88 ページの 8 行目。
[285] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）88 ページの 8 行目から 9 行目。
[286] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）88 ページの 9 行目から 10 行目。
[287] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）88 ページの 10 行目から 11 行目。
[288] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）88 ページの 11 行目から 12 行目参照。

次の偶像の事例としてパウロの遺骨崇拝を示している。人（キリスト教徒）は，「棺の中に納められたパウロの骨」[289] を崇拝しているのに，「書物の中に隠れているパウロの精神」[290] を崇拝しない。同様に，人（キリスト教徒）は，「ガラス越しに見られるパウロの身体の断片を重んじている」[291] のに，「文字を通して輝き渡っているパウロの全精神に驚嘆しない」[292]。さらに，人（キリスト教徒）は，身体の欠陥を時折取り去ってくれる遺骨を拝んでいるのに，魂の悪徳を癒やしてくれる書物をどうしてそれ以上に崇拝しないか」[293] と嘆きながらも，エラスムスは，パウロの遺骨・身体の断片よりも，心・魂から悪徳を癒やしてくれるパウロの言葉や書物（すなわち聖書）を説いている。

また，人（キリスト教徒）が聖人（聖者）の徳をまねること以上に敬虔はない[294] と認識し，フランチェスコ（1181 あるいは 1182 年生–1266 年没）に最高の敬意を表すならば，人（キリスト教徒）は，フラチェスコに倣って「簡素になり，卑しい利得を軽蔑し，心の財産を追求するという施しを行う」[295] べきであり，また「フランチェスコに百本のローソクを点す」[296] 場合よりも，このような彼に対する「敬意を高く評価する」[297]，とエラスムスは説いている。同様に「フランチェスコの修道服に包まれて墓に埋葬されることを何かたいへんなことと考えている」[298] 人がいるのかもしれないが，「死ぬ時に同じ衣服であっても，生存中の道徳が似ていない」[299] なら，何の役にも立たない，と戒めている。エラスムスは，フランチェスコの「修道服」に包まれて，墓に埋葬されるなどの外面的な面で聖人フランチェスコに倣うのではなく，かれの生活態度に倣うことが最も大切である，と説いている。

エラスムスは，実際，「形象的な儀式や純朴な人々の熱心さ，教会の権威が認可したものを非難してはいない」[300]。というのは，それらものは「敬虔を示す証拠」[301] で，最高善に至るためのその補助手段であり，「幼子である人たちには，大きくなって成熟した人になるまで」[302]

[289] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）87 ページの 12 行目。
[290] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）87 ページの 12 行目から 13 行目。
[291] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）87 ページの 13 行目。
[292] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）87 ページの 13 行目から 14 行目。
[293] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）の 87 ページ。
[294] エラスムスは，聖者たちの普遍的な敬虔の模範がキリストであるから，聖者によるキリスト尊敬が人々の喜びであるならば，個々の聖者の賛美によって悪徳を改善し，個々の徳を愛好するように努めることもよしとしている。このことができているならば，エラスムスは，聖者崇拝を否定はしない，と言う。
[295] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）87 ページの 1 行目。
[296] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）87 ページの 2 行目。
[297] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）87 ページの 3 行目。から 4 行目。
[298] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）87 ページの 3 行目から 4 行目。
[299] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）87 ページの 4 行目。
[300] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）90 ページの 1 行目から 2 行目。
[301] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）90 ページの 3 行目。

不可欠である，と言う。完全な人々にとってそれらが排斥される必要もない。しかし，「可視的なもののために可視的な事物によってキリストに礼拝する」[303] こと，「宗教的敬虔の極地を可視的なものに置く」[304] こと，「ここで自分に満足し他の人々を非とする」[305] こと，「可視的なものに驚嘆ししかもその上に寄りかかって死ぬ」[306] こと，「キリストへと導いて行くためにのみ取り扱われるべきであるこれら可視的なものじたいによってキリストからそらされる」[307] こと，「このことは霊的である福音の律法から遠ざかって，ある種のユダヤ主義に逆戻り」[308] することである，とエラスムスは認識している。エラスムスは，「形式的な儀式」には疑問を感じ，キリストに導くために用いられる「可視的な」もの（石材あるいは木材のキリスト像など）自体に重きを置く行為に批判的である。さらに，すでに述べたように，「マリアの謙虚」を模倣するのは優れたことであるが，しかし，「マリアを崇拝」するのは好ましくないと戒め，「ペテロの信仰」と「パウロの愛」とに倣いなさい[309]，そうすれば「ローマに十回巡礼に行くよりも多くのことをなす」[310] と言う。

エラスムスは，多くのキリスト教徒が「形象的な儀式（わざに対する信頼）」に転落していることを嘆いている。彼によると，「この誤謬が祭司や博士の大部分，さらに霊的生活を言葉や服装で公に示している人々の大多数のほとんど全体を支配していないならば，それに耐えることは」[311] できるが，しかし，司祭や博士などの霊的生活を導くはずの人々が「形象的な儀式」に頼り切って大衆を扇動している，と感じている。この人々の「大多数はどれほどの迷信をもって，ここで述べている意見を全く欠いている弱い人々によって定められたある種の宗教的儀式を遵守している」[312] こと，「どれほどの憎悪をいだいて同じものを他の人々に強要している」[313] こと，「どれほど安心してこれらに信頼し，どれほど軽率に他の人々を裁き，どれほど熱っぽくそれを弁護している」[314] ことを講話されるのをエラスムスは嘆いている。「その人々は全く高慢になってあの未熟な規則にもとづいて他人の生活を検閲しはじめ，自

[302] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）90 ページの 4 行目。
[303] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）90 ページの 9 行目。
[304] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）90 ページの 9 行目から 10 行目。
[305] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）90 ページの 10 行目。
[306] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）90 ページの 10 行目。
[307] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）90 ページの 11 行目から 12 行目。
[308] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）90 ページの 12 行目から 13 行目。
[309] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）86 ページの 18 行目。
[310] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）86 ページの 18 行目から 19 行目。
[311] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）90 ページの 19 行目から 20 行目。
[312] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）91 ページの 1 行目から 2 行目。
[313] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）91 ページの 3 行目。
[314] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）91 ページの 3 行目から 5 行目。

分たちのすること以外には正しいものはない」[315] と信じている，とエラスムスは呆れ憤慨している。それらの人々の気質や生活態度を批判し，エラスムスは，「むしろ彼らは動物的であって，ある種の厭うべき悪徳にひたりきっており，交友においてはわがままであり，自制心に欠け，愛に冷たく，怒りに燃え上がり，憎しみに固まり，言葉に毒をふくみ，激しい敵意において無敵であり，取るに足りないもののためにも戦う準備をし，キリストの完全性から全く異質なものとなっている」[316] と公然と大胆に述べている。エラスムスの非難・批判は，より一層，司祭・司教や博士など大衆を導く人々が反キリスト的生活に馴染んでいることに向けられている。これがエラスムスの最大の悩みであり，怒りの根源であったのかも知れない。エラスムスは，本来，世俗の人々（大衆）を最高善意に導くべき司祭や博士や司教が反キリストの生活を堕しながらも，大衆の生活を検閲している，と認識していた。

エラスムスは，多くのキリスト教徒，とりわけ司祭や博士の大部分や霊的な生活を言葉や服装で公に示している人々の大多数が霊に従って歩んでいないことを「この世」の現象であると認識し，それを嘆き，彼らに批判の目を向けている。これらの人たちが多くの「迷信」をもって，「宗教的儀式」を遵守し，他の人々に強要していることを恥じている[317]。霊に従うことの果実は，愛であり，心の喜びであり，すべて人に対する平和である，とエラスムスは認識している。さらに，それは，「忍耐・温和・善意・好意・柔和・信頼・節度・節欲・貞潔」[318] であることを強く指摘している。そして，生活習慣の中にキリストの像を持ちなさい，とエラスムスは説いている。

6.5　パウロの言葉によって語られる霊的生活と神の愛

エラスムスは，使徒（特にパウロ）の考えに倣って，イエスの使徒たちと同様に，肉を「可視的な」もの，霊を「不可視的な」ものであると理解し，そして「可視的な」ものは「不可視的な」ものに仕えてなければならないと，反対に「不可視的な」ものが「可視的な」ものに仕えてはならない，と説いている[319]。エラスムスは，実際，パウロの考える霊的生活をキ

[315] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）91 ページの 6 行目から 8 行目。

[316] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）91 ページ 10 行目から 13 行目。さらに，その 14 行目から 16 行目において，彼らは，教養がなく，御しがたく，好戦的で，快楽に貪欲であり，神の言葉に嘔吐を催し，誰にも親切ではなく，他人についてやたらに不信を懐きうぬぼれが強い，とエラスムスは続けている。

[317] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）91 ページの 2 行目から 4 行目参照。彼らはそうすることによって天国を得ることになり，自分たちをパウロやアントニウスの仲間であると思っていることをエラスムスは恐れている。エラスムスは，彼らが高慢になって，その未熟な規則でもって他の人々（キリスト教徒の大衆）の生活を検閲することを危険視している。

[318] 日本聖書協会編『聖書』（1968）『ガラテヤ人への手紙』（5 章 22 節から 23 節）に，「御霊の実は，愛，喜び，平和，寛容，慈愛，善意，柔和，自制であって，これを否定する律法はない」とある。

[319] 前掲書『エンキリディオン』14 章（第五教則）93 ページの 7 行目から 9 行目。

リスト者の霊的生活と認識している。

その生活とは，どのような生活なのであろうか。その生活とは，あれやこれやの儀式を行うことではなく，あの「フランチェスコの修道服」[320]を身につけることでもなく，これこれの食事を摂って生きていくことでもなく，また，詩編をどれだけ多く読んだかでもない[321]，とエラスムスは説いている。これらは「形象的な行為」であって，「肉の働き」であって，「霊的生活」[322]ではないからである。だから，地上にある肢体，すなわち，不品行，汚れ，情欲，悪欲，貪欲を抑えることが霊的な生活になる。貪欲は偶像礼拝にほかならない[323]からである。儀式や服装や食べ物や多数の詩編を読むことが「霊的生活」であるという考えは古い人の考えであり，新しい人のものではない[324]。ここで，「古い人」とはアダムのことであり，地とは「可視的」で儚いすべてのものであり，「新しい人」とは天上の人であり，天は「不可視的」で永遠なすべてのものである。キリストにあって肉に従って歩まない者は罪に定められない[325]，とエラスムスは説いている。

エラスムスは，パウロに倣い，「肉の行為（働き）」についていくつかの例示をしている。「肉の行為」とは，「不品行，汚れ，好色，偶像崇拝，まじない，敵意，争い，そねみ，怒り，党派心，分裂，分派，妬み，泥酔，宴楽，およびそのたぐい」[326]であり，また「ひどい嫉妬，短気，兵士のような乱暴さ，飽くことのない戦闘欲，激烈な誹謗，言葉の蛇のような毒，傲慢な心，手に負えない向こう見ず，ごまかしの誠実，虚栄，捏造，追従など」[327]も「肉の行為」として挙げている[328]。エラスムスによると，これらは悪徳である。

---

[320] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）87ページの3行目。

[321] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）94ページの4行目から6行目参照。

[322] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）94ページの4行目。

[323] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）94ページの行目から8行目参照。これは，『コロサイ人への手紙』（3章5節）からの引用である。すなわち，「だから，地上の肢体，すなわち不品行，汚れ，情欲，悪欲，また貪欲を殺してしまいなさい。貪欲な偶像礼拝に他ならない」とある。

[324] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）94ページの9行目から10行目参照。これは『コロサイ人への手紙』（3章9節から10節）からの引用である。すなわち，『あなたがたは，古き人をその行いと一緒に脱ぎ捨て，作り主のかたちに従って新しくされ，真の知識にいたる新しい人を着たのである』。

[325] このことの理由は，すでにイエスが人間の原罪の生け贄とされているからである。すなわち，神は，罪のある肉の姿として御子（イエス）をこの世に派遣し，罪の肉（イエス）を罪の罰としてその罪を実現した。律法がその肉のために実現していなかったことを，イエスをその罪の罰として実現したのである。

[326]『ガラテア人への手紙』（5章19節から21節）。

[327] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）95ページの12行目から14行目。

[328] エラスムスは，霊的生活を過ごしているかどうかは，行為（果実）によって判断している。徹夜し，断食し，沈黙を守り，祈祷したとしても，その結果がひどい嫉妬，短気，兵士のような乱暴さなどであったなら，その生活は霊的生活ではないと判断している。それらは霊の果実ではなく，肉の行為である（前掲書『エンキリディオン』第14章の95ページ）。また，どれほど大きな罪を犯したかが問題なのではなく，いかなる心情によって罪が生じているかが重大であるとしている。たとえば，両親が侮辱されたために敵意をもって

肉に従うことは人間の弱さに由来すると考えて，肉に従って歩いている人の数がきわめて多い[329]ことから，「もろもろの心の弱さ」[330]が見られる，とエラスムスは言う。「物事に対する転倒した判断により，私たちは，全くつまらないものを最も高く評価し，それだけで自足」[331]している。すなわち，人々（キリスト教徒）について，キリストを顧みないで「教師（律法）や軛の下で，いつも行動し，霊の自由」[332]に至ろうと決して志さず，「愛の高見に決して上ろう」[333]とはしない，と言う。これが「現世（中世の晩秋）」に生活している人々の実態であるとエラスムスは認識していたのであろう。

実際，エラスムスは，パウロと同様に，「争いをおこす肉が軽減されて，愛と自由との創始者が霊において人間を立たせてくださる」[334]ところに「霊的生活」がある，と認識している。「肉・奴隷の身分・不安・争いは互いに仲間の関係に立っており，他方，霊・平和・愛・自由も同様の関係にある」[335]と言う。

エラスムスが行き着いた「霊的生活」とは，モーセの律法の最大の戒めである『自分自身を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい』であった。これは，「キリストが福音書において繰り返しなされ，実現した」[336]ことでもあった。キリスト教徒のわざが「その根源である愛に関係づけられる限りで，神に嘉みせられる」[337]とエラスムスは言う。彼が言う愛とは，「聖人の像にひざまずく」[338]ことでなく，「ローソクに火を点す」[339]ことでもなく，「祈りを指折り数え繰り返し唱えること」[340]でもない。これらのどれも神は必要としていない。それでは，

仕返しをすることと，何のためでもなく冷酷な敵意を表すことは同じくらいに恥じ入る行為（悪徳）であるとしている（前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）95から96ページ）。

[329] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）96ページの13行目参照。

[330] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）96ページの5行目。エラスムスは，最も厳格な部類に入る修道士たちでさえ宗教の眼目を，儀式や詩編により定められた祈祷規則や肉体労働に置いている（前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）96ページの11行目から12行目）と言う。

[331] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）96ページの17行目から18行目。

[332] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）96ページの18行目から19行目。「主は霊である。そして，霊のあるところには，自由がある。」（『コリント人への第二の手紙』 3章17節）。

[333] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）96ページの19行目。

[334] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）97ページの18行目。

[335] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）97ページの19行目から20行目。

[336]「とりわけ，キリストは私たちにユダヤ主義化するのではなく，愛するようにと教えるために生まれかつ死にたもうたのです」（前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）98ページの3行目から4行目）。

[337] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）94ページの16行目から17行目。また，『コロサイ人への手紙』（3章の14節から15節）には，「これらいっさいのものの上に，愛を加えなさい。愛は，すべてを完全に結ぶ帯である。キリストの平和が，あなたがたの心を支配するようにしなさい。あなたがたが召されて一体となったのは，このためである」とある。

[338] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）98ページの10行目。

[339] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）98ページの10行目。

[340] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）98ページの11行目。

彼の愛とは何であろう。それは，「隣人に徳を建てる」[341] こと，「すべての人を一つのからだの肢体とみなす」[342] こと，「すべての人はキリストにおいて一つである」[343] こと，「あなたの兄弟の幸福を自分のことのようによろこぶ」[344] こと，「兄弟の不幸を自分自身のことのように救う」[345] ことである。キリストに倣って「自分自身のためではなく兄弟のたちの幸福のために奉仕」[346] するとき，人々は，「喜ばしく過しやすい生活」[347] になる，と認識している。「身体のかかとでキリストの足跡をふんだからといって偉大なのではなく，愛においてキリストの足跡をたどることが最高のこと」[348] であると言う。

しかし，エラスムスは，決して儀式を守ることを禁止していないし，敬虔を確立するためには律法を正しく用いることを説いて，「そのような律法に規定する儀式を守ることは有用ですが，それに依存することは破滅を招く」[349] ことになる，と言う。エラスムスは，パウロと同様に，行為の律法を禁止してはいないが，しかし，だれでも律法を正しく用いる必要がある，と言う。というのは，これらのものなしには人々は「恐らく，敬虔になれない」[350] からである。だが，それらが人々を敬虔にするのではない[351]。人々が敬虔になるためにそれを使用するならば，それらは敬虔に役立つのである。しかるに人々が「それらを享受し始める」[352] なら，それらはすべての敬虔を一挙に消滅させる[353]，と警告している。

旧約聖書の『イザヤ書』に「霊的生活（隣人愛）」が犠牲や儀式や礼拝などよりも，まさることが預言者によって語られていること指摘している。「善を行うことをならい，公平を求

[341] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）98 ページの 12 行目。
[342] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）98 ページの 12 行目。
[343] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）98 ページの 13 行目。
[344] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）98 ページの 13 行目から 14 行目。
[345] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）98 ページの 14 行目。また，エラスムスは，愛の事例を書き綴っている。「誤っている人を穏やかに戒めること，無知な人を教えること，挫折した人を立ち上がらせること，打ちひしがれた人を慰めること，重荷を負って苦しんでいる人を助けること，貧窮している人を援助すること，要するにあなたのすべての力，すべての努力，すべての配慮をキリストにあってできる限り多くの人々に役立つように向けることなのです」（前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）98 ページ）。
[346] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）98 ページの 19 行目。
[347] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）98 ページの 20 行目。
[348] 前掲書『エンキリディオン』第 14 章（第五教則）104 ページの 12 行目から 13 行目。また，その 105 ページには，「あなたがキリストを多く愛すれば愛するほど，それだけあなたは自分の悪徳を憎むことになる。なぜなら，影が身体につき従うように，罪に対する憎悪は敬虔に対する愛に従うものだからである」と言う。
[349] 前掲書『エンキリディオン』14 章（第五教則）99 ページの 10 行目から 11 行目。
[350] 前掲書『エンキリディオン』14 章（第五教則）99 ページの 14 行目。
[351] 前掲書『エンキリディオン』14 章（第五教則）99 ページの 14 行目参照。
[352] 前掲書『エンキリディオン』14 章（第五教則）98 ページの 16 行目から 17 行目を参照。
[353] 前掲書『エンキリディオン』14 章（第五教則）99 ページの 17 行目参照。

め，しえたぎる者を戒め，みなしごを正しく守り，寡婦の訴えを弁護せよ」[354] とある。孤児や寡婦への思いやりとして「隣人愛」が述べられる。また「わたしが選ぶところの断食は，悪のなわをほどき，くびきのひもを解き，しえたげられる者を放ち去らせ，すべてのくびきを折るなどのことではないか。また飢えた者に，あなたのパンを分け与え，さすらえる貧しい者を，あなたの家に入れ，裸の者を見て，これに着せ，自分の骨肉に身を隠さないなどのこと」[355] であると言う。ここでも，抑圧される者やしえたげられる者や放浪者やホームレスに対するいたわりが「隣人愛」として示されている。

6.6　キリスト教徒のなすべきこと

エラスムスにおいて，キリスト教徒のなすべきこととは「教会の戒めを無視する」[356] こと，「先祖の尊敬すべき伝統を軽蔑する」[357] こと，「敬虔な習慣をけなす」[358] ことなどではない。というのは，弱い人にはこれら（教会の戒め，先祖の伝統，敬虔な習慣）を不可欠なものとして保つ必要がある，と言う。完全な人（大人）であれば，自身の知識が弱い兄弟を傷つけ殺すことのないように，それらを遵守する[359] ことができ，そのために，キリスト教徒にとっては「形のあるわざは非難されないで，不可視的なものが優先される」[360]，すなわち，「可視的な礼拝は非難されないが，不可視的な敬虔がないなら，神との和解は成立しない」[361] と説いている。『ヨハネ福音書』（4章24節）に「神は霊であるから，礼拝をする者も，霊とまことをもって礼拝すべきである」とある。

「神は霊」であるから霊的な犠牲によって和らげられる[362]，と言う。すなわち，『詩編』（51章17節）に詠まれている「砕けた魂」が神への生け贄（犠牲）とされ，神は，砕かれ悔いた心を軽んじることはない[363]，とエラスムスは言う。他方，「ローソクに火を点す」のは犠牲で

[354] 日本聖書協会編『聖書』（1968）『イザヤ書』（1章17節）。
[355] 日本聖書協会編『聖書』（1968）『イザヤ書』（58章6節から7節）。
[356] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）102ページの4行目。
[357] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）102ページの4行目から5行目。
[358] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）102ページの5行目。
[359] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）102ページの6行目から7行目参照。エラスムスは，パウロと同じように，キリストは，そのか弱い兄弟のために死に給ったのだから，それらをやめる必要はないと言う。
[360] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）102ページの9行目。
[361] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）102ページの10行目。ここで「可視的な」礼拝とは，儀式のことを意味し，「非可視的な」敬虔とは内面的な心（霊）でキリストを礼拝することを意味する。
[362] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）102ページの10行目から11行目。
[363]『詩編』（51章17節）に，「神の受けられるいけにえは砕けた魂です。神よ，あなたは砕けた悔いた心をかろしめられません」とある。また，『詩編』（34章18節）に，「主は心の砕けた者に近く，たましいの悔いくずおれたものを救われる」とある。

はなく，神は「雄ヤギや子牛の血を軽んじられる」[364] と説いている。「身体が法衣を着せられていても，心が世俗的な服をまとっているなら，何んにもならない」[365] と言い，エラスムスは，身体や法衣や木の十字架などを礼拝・崇拝することよりも，「霊的な犠牲（心の修行）」が不可欠である，と説いている。

また，キリスト教徒は，断食をし，身体に害を与えない食べ物だに遠ざけているのに，自身のおよび他人の良心を汚す有害な言葉を抑制していなく[366]，同様に，外面的に安息日を守っているが，内面的には悪徳がすべて喧騒の叫び[367]，その身体が姦淫を犯していなくとも，貪欲であって，すでに心で姦淫を犯している[368]，と言う。その上，「口で祝福していても，心では中傷」[369] している。このように，エラスムスは，キリスト教徒に対して，外面的な儀式（断食，詩編の朗読数，安息日など）よりも，内面である心を神に向けなさい，と説いている。

6.7　内面で聴く

エラスムスの説くところによると，神の言葉を身体の耳ではなく，内面的に聴くべきことになる。旧約聖書（預言書）には，「もしあなたがたが聞かないならば，わたしの魂は密かな所で，あなたがたの高ぶりのために悲しむ」[370] とある。また，預言書には「愚かで，悟りもなく，目があっても見えず，耳があっても聞こえない民よ」[371] とある。また，福音書には「それは彼らが，見ても見ず，聞いても聞かず」[372] とある。これらの聖書に書かれた，神の言葉を身体の耳で聴くのではなく，同様に，神を身体の目で見るのではなく，その内面（心）で聴き，心で見る人が幸福であり，その魂は救われる，とエラスムスは説いている。また，外面的に善をなしていても，内面においてそれと反対のことが生まれているなら意味がない，とも言う。

第7節　第六の教則：キリストに従う

7.1　第六の教則

第六の教則は，キリストに従うである。この教則は，キリストひとりのほかどこからも敬虔の模範を求めるべきではいけないという教則である。つまり，この教則では，一般大衆・

[364] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）103ページの5行目。
[365] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）103ページの7行目。
[366] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）103ページの12行目から13行目参照。
[367] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）103ページの16行目から17行目参照。
[368] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）103ページの17行目から18行目参照。
[369] 前掲書『エンキリディオン』第14章（第五教則）103ページの19行目。
[370] 日本聖書協会編『聖書』（1968）『エレミヤ書』（13章17節）。
[371] 日本聖書協会編『聖書』（1968）『エレミヤ書』（5章21節）。
[372] 日本聖書協会編『聖書』（1968）『マタイによる福音書』（13章13節）。

群衆・民衆の行動やその意見から極力離れ，キリストを心のなかに熱心に求める人になることをエラスムスは説いている。というのは，「キリストは唯一の原型」[373] であって，いかなるキリスト教徒もその原型から「指の幅ほども離れるとしたら，正しさから遠ざかり，道にはずれてしまう」[374] からである，とエラスムスは言う。

7.2　徳とキリストの道

エラスムスは，プラトン[375] の説にならって恥ずべきことと気高いことの区別についての正確な意見を心に習得している人が徳を携えている，と言う[376]。エラスムスによると，人間の本姓は，火が近くの油をすばやく捉えるように容易に悪徳に傾く[377]。したがって，どの年齢であってもすべての「大衆[378] の誤謬」を根っこから取り除き，その代わりに何者によっても引き抜かれない，有益な意見[379] が刻み込まれ，そして「このことを実行している人は，なんの苦労もなく自発的に徳を追求する」[380] とエラスムスは言う。

エラスムスは，ソクラテス（前 469 年生–399 年没）やプラトンの考えを受け入れ，知識がすべての徳[381] に対して持っている重大な意義[382] を認め，「苦々しいものを無知のゆえに間違って愛好している」[383] 人たちは「最も甘美なもの」[384] を退け，また，「善にして有益なもの

[373] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）107 ページの 9 行目。

[374] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）107 ページの 9 行目から 10 行目。

[375] プラトン『国家』での見解・説のことである。エラスムスは，プラトンと同様に，守護階級が何を遠ざけ何を願望すべきかに関する最善にして最も確実な意見を神聖な法のようにこころに刻むことを求めている（前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）107 ページの 10 行目から 16 行目参照）。

[376] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）107 ページの 10 行目から 11 行目参照。

[377] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）108 ページの 9 行目から 10 行目参照。

[378] エラスムスは，大衆が悪徳の最高の権威であると思っている。「私は大衆を身分によってではなく，心によって判断しています。大衆というのはプラトンの洞窟の中で自分の情念により拘束されて，事物の虚妄な映像を最も真実なものとして驚嘆するすべての者のこと」のように説明している（前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）109 ページの 18 行目から 19 行目）。

[379] ここで有益な意見とは，キリストの霊である。すなわち，悪徳から自身を守るように計画することの必要性を説いている。エラスムスは，悪徳として，その前掲書『エンキリディオン』第 6 章（情念の相違について）42 から 43 ページにおいて，殺人，窃盗，不誠実，放蕩，追従，好色，女好きと快楽への愛好，怒り，頑固，大胆不敵，誹謗，怠惰，惰眠，妬み，憂愁，憂鬱，辛辣，浪費，軽率，吝嗇，我意，貪欲，虚栄心，復讐心，道化，高慢，聖物冒瀆などを挙げている。

[380] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）108 ページの 13 行目。

[381]「徳とは何を避け何を求めるべきかの知識にほかならない」（前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）108 ページの 15 行目参照）。

[382] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）108 ページ末から 109 ページの 1 行目参照。ソクラテスが，罪が間違った意見から生じることを証明し，このことによって知識の重大性を示したことが指摘されている。（前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）108 ページ末を参照）。

[383] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）109 ページの 3 行目。

[384] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）109 ページの 3 行目から 4 行目。

のかわりに全く不利益なものを求めている」[385] 人たちは，「嫌悪すべきものを美しいと判断し」[386] ている，と言う。このようにエラスムスは，大衆が転倒した仕方で振る舞っていることに強く心を痛めている。なお，この引用において，有益なものとは「徳」のことであり，不利益なものとは「悪徳」のことである。「徳のみが善であり，最も甘美にして最も美しく，最も尊敬に値し，最も有益であり，これに反して不名誉こそ唯一の悪であり，呵責し赤面すべき有害な嫌悪に値するものである」[387] ことを心の奥深くで納得し腑に落ちているならば，「そのことを民衆の意見によってではなく，事柄の本姓そのものによって計る」[388] ならば，人は邪悪のうちに永く止まることはない，と言う。

「徳の道は狭く，きわめてわずかな人々によって歩まれる」[389] が，たとえば，賢い建築家は，その手本を最善の建築から獲ようとし，画家たちが最善の絵画のみを自分の前に置いて習作するように，キリスト教徒の模範はキリスト[390] であり，そこにのみ「至福に生きるためのすべての原則が内在」[391] する，とエラスムスは説いている。

エラスムスは，「よく統治された国家における気高い名声のほかに僅かな資産で事足りた人たち，金銭よりも信頼に，生命よりも徳にいっそう価値あると見た人たち，幸福にあっておごることなく不運にあってもくじけない人たち，快楽よりも栄光ある危険を優先させた人たち，さらに正しい人の持つ良心だけで満足し，名誉も財産も，他の幸福な利益もほしがらなかった人たち」[392] を徳の実例[393] として挙げている。これらの人々は，エラスムスと同時代の人々ではなく過去の名望家や賢人であるが，他方で，彼の同時代のキリスト教徒については悪徳を称賛する人々，とエラスムスは考えているのかもしれない。

7.3　信仰と富

「富がこんなに高く評価された時代があったであろう」[394] か自問し，エラスムスは，ホラ

[385] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）109 ページの 3 行目。
[386] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）109 ページの 4 行目。
[387] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）109 ページの 8 行目から 9 行目。
[388] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）109 ページの 9 行目から 10 行目。
[389] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）110 ページの 8 行目。
[390] エラスムスは，さらに信頼できる人たちのなかの人がキリストの原型に合致するかぎり，その人たちを模範と呼ぶこともあり得ると付言している（前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）110 ページの 12 行目から 13 行目）。
[391] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）110 ページの 11 行目。
[392] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）112 ページの 7 行目から 11 行目。
[393] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）112 ページの 12 行目から 15 行目において，「フォキオンの清潔」，「富よりも強力であったファブリキウスの貧困」，「カミルスの高大な心」，「ブルータスの厳格さ」，「ピュタゴラスの徳」，「ソクラテスの無敵の自制心」，「カトーの公正潔白さ」などが挙げられている。
[394] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）112 ページの 20 行目。

ティウスの詩を引用し，その内容に合致するのは，「この世」（「現世」）であると言っている。すなわち，

「実際，財産がないなら家柄や徳は藻屑の価値もない」[395]

「市民の皆さん

　まず金を求めたまえ。

　徳より金銭の方が先ですよ」[396]

を引いている。さらに，エラスムスは，「かつては淫蕩，卑劣漢，法螺吹き，守銭奴に向かって」[397]，「人々は中傷的な罵詈雑言を浴びせかけたもの」[398] であったが，「今日キリスト教徒の重だった人々にとって，悪徳が俗悪な仕方で賞賛されると，それは拍手喝采されている」[399] と言う。

また，大衆・民衆（世間）にあっては「財産を熱心に獲得し，獲得したものを上手に強固になし，さらに将来を見通すことが」[400] 一般に怜悧と呼ばれ，「短期間に富める財産を築き上げた人」[401] を「倹約家で分別があり，物わかりがよく，熟達した，先見の明がある人」[402] だといたるところで真面目に語られる，と言う。エラスムスは，『ヨハネ福音書』（8章44節）の「あなたがたは自分の父，すなわち，悪魔から出てきたものであって，その父の欲望どおりを行おうと思っている。彼は初めから人殺しであって，真理に立つ者ではない。彼の内には真理はないからである。彼が偽りをいうとき，いつも自分の本音を吐いているのである。彼は偽り者であり，偽りの父である。しかし，わたしが真理を語っているので，あなたがたはわたしを信じようとしない」を引用し，エラスムスは，「世間」自身が嘘つきであり，嘘つきの父である[403] と言う。転倒した社会を嘆いている。

さらに，『ルカ福音書』（12章20節）から「神が彼らに言われた，『愚かな者よ，あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そうしたら，あなたが用意した物は，だれのものになるのか』。自分のための宝を積んで神に対して富まない者は，これと同じである」を引用[404] し，エラスムスは，「世間」では怜悧と言われる行い，を愚かな行為としている。

---

[395]『諷刺詞』2・5・8。
[396]『書簡体詞』1・1・53。
[397] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）111ページの12行目から13行目。
[398] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）111ページの13行目から14行目。
[399] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）112ページの1行目。
[400] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）120ページの4行目。
[401] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）120ページの5行目。
[402] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）120ページ。
[403] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）120ページの7行目参照。
[404] ここで，‘あなたがた’を「民衆」・「大衆」と解釈している。

7.4　キリストと大衆

「大衆」[405] は，いつも生活においても思想においても「最悪の権威」[406] である。また，「人間的な事柄に関して最悪のものが大多数の者に喜ばれたりする」[407] ことがある。エラスムスは，「大衆」に呑まれてはいけないとキリスト教徒に戒めている。みんながそれをしているとか，先祖たちがその足跡を踏んできているとか，偉大な哲学者や神学者がこうした意見を懐いているとか，これは王の指図であるとか，あるいはこれは司教や教皇も行っているなどを口実にしないように[408]，と戒めている。また，エラスムスは，身分の上の人たちが実行しているのだから，人々の大部分が実行しているのだから，正しいと考えてはならないとも警笛をならしている[409]。人々の習俗をキリストに向けて動かすのではなく，キリストを人々の生活に向けて変えようとする人々は，馬鹿げている。そうではなく，キリストの教えの規準に合致している点によってのみ正しいのである[410]，とエラスムスは説いている。

一般「大衆」は「心を尽くしてキリスト教徒になることに優って馬鹿らしく低俗で恥ずべきことは何もない」[411] と信じている，とエラスムスは言う。また，聖アウグスティヌスは，「キリスト者となる以前から金銭を蔑視し，名誉を空しいものとみなし，名声によって動かされなかった」[412] が，このような精神の人たちを，そう簡単には，「宮廷人のあいだに，聖職者たちのあいだに，付言するなら，修道士のあいだにさえ見いだせない」[413] と言う。しかし，「この世」では，聖アウグスティヌスのような人は，たちどころに，猿の中にいる驢馬のように嘲笑され，そのような人は「妄想にかかり，低能で，偽善的，世間知らずで，憂うつであり，全く狂っていると呼ばれ」[414]，「決して人間とは判断されない」[415]，とエラスムスは言う。

---

[405] エラスムスは，「大衆」を身分としてではなく，心によっておさえている。プラトンの考えを引き合いに出し，大衆を規定している。大衆とは，洞窟の中で自分の情念により拘束され，物事の虚妄な映像を最も真実なものとして驚嘆しているすべてのもとしている。故に，この「大衆」のなかには，哲学者や司教や教皇なども入りうる。

[406] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）109 ページの 12 行目。

[407] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）109 ページの 12 行目から 14 行目。

[408] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）109 ページの 14 行目から 16 行目参照。

[409] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）110 ページの 2 行目から 4 行目参照。

[410] しかし，エラスムスは，心のうちにキリストの教えを宿している人は僅かであるという。エラスムスは，人々にキリストを合わせるのではなく，人々をキリストに合わせることを善しとしている。「この世」は転倒していることを嘆いている。

[411] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）113 ページの 6 行目。キリストの教えに敬意を表し，行動により表現し，心を尽くしてキリスト者になろうとすることを馬鹿らしく，低俗で恥ずべきものであると信じている人々から，全力を尽くして離れ，あらゆるものの価値をキリストとの価値に置きなさい，エラスムスはこのことを切に望んでいる。

[412] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）112 ページの 17 行目から 18 行目。

[413] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）112 ページの 20 行目から 113 ページの 1 行目。

[414] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）113 ページの 2 行目から 3 行目。

エラスムスが生活していた時代（多分，今日の時代でも同じであろうが）では，誰でも「一般的に言って名高い先祖，つまり人々が貴族と呼んでいる祖先からうまれることをすばらしいこと」[416]であると主張したが，しかし，その賢い人たち（最高の権威を与えられた人たち）が，「いかめしい尊大な顔をして，あたかも重大問題に対するように，全くもって真剣に家系の序列について激しく論じ」[417]て，そこから何も生み出さないことを聞いても，また「他の人たちが祖父や曾祖父らの肖像画を持ち出してきて威張り散らし，残りの人々をほとんど人間とも考えていない」[418]のを見ても，動揺してはいけない，とエラスムスは言う。キリスト教徒の成すべきことは，「唯一で最高の高貴性とはキリストの内に再生すること」[419]，「彼の（キリストの）からだの中に接ぎ木されること」[420]であり，そして神と一つの身体および一つの霊になることだけを考えなさい[421]，とエラスムスは説いている。彼は，キリストにおいてすべてのキリスト教徒は一つ[422]であり，「真の高貴はキリストの僕になること」[423]であり，「高貴の最善の判定者が，自分の民族の創始者としてアブラハムを自慢していたユダヤ人たちに対して，福音書のなかで語たりたもうたことに耳を傾けなさい」[424]と言う。「その徳性と競い合っている人たちがその祖先」[425]であり，キリストが選び給った人たちに目を向けなさい，すなわち，「この世的には弱い人たち，愚かな人たち，卑賤な人たちに目を向けなさい」[426]と言う。

群衆・大衆は，「家の中に金をしこたま溜め込んでいる人を幸いで，富める，恵まれた者と呼ぶ」[427]が，キリスト教徒は「最高善なるキリストを所有する人こそ十分に至福である，それどころか，それだけが至福である」[428]と説いている。ゆえに，「群衆が賛美しているもの，つ

[415] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）113ページの3行目。
[416] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）113ページの11行目。
[417] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）113ページの13行目から14行目。
[418] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）113ページの15行目から16行目。
[419] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）113ページの18行目。
[420] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）113ページの18行目。
[421] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）113ページの18行目から19行目。
[422] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）114ページの4行目参照。
[423] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）114ページの5行目。
[424] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）114ページの6行目から7行目。
[425] エラスムスは，単に輝かしい人でも，単に華美な人でもなく，また単に王たちの征服者でもなく，神の徳性ゆえに神の誉れでもって称揚された人として先祖（創始者，すなわちキリスト）を解説している（前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）114ページ）。決して，ユダヤ人のようにアブラハムを民族の創始者にはしていない。
[426] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）114ページの3行目。
[427] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）115ページの5行目。
[428] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）115ページの6行目から7行目。

まり，金，宝石，所有地」[429]，すなわちこれらの富は「神の言葉の種を窒息」[430]させ，キリスト教徒には重荷である。富を背負う人は，狭い道を通って無一物であるキリストには従うことはできない[431]し，「低い門をとおって天国に入ることもできない」[432]と説いている。「これらを勇敢に蔑視する人こそ十分豊かに所有している人」[433]なのである，と説いている。「敬虔から遠ざかり，悪徳を増加させること」[434]が損失であり，「精神が徳に近づいて改良されるとき，とてつもない大きな利益が獲られると思いなさい」[435]と言い，創造の主を所有しているならば，あなたには何もかけていないと思いなさい[436]，とエラスムスは言う。

「大衆」は，愚かな若者が少女を死ぬほど恋することを「愛」と呼んでいる。その若者は，自分の楽しみ以外の何も目指していない。それ故，「彼は，少女を愛しているのではなく，自分自身を愛しているのである」[437]。つまり，その若者のように「小さな自分の利益のために，おべっかと贈り物により奸計をめぐらし少女をつけ狙い，こうして少女の最善のもの，つまり少女の貞潔，羞恥心，素直，善良な精神，世評を奪い取ってしまう者」[438]は，決して，少女を愛しているとは思えない。むしろ少女を憎んでいる[439]と思われる。エラスムスは，この憎しみ以上に嫌悪すべき憎しみはない，と説いている。

また「この世」の親の「愛」も転倒しているとエラスムスは嘆き諷刺している。「この世」では，「両親が子供らの悪徳を大目に見るとき，なんと優しく息子を愛している」[440]と言われる。それに対し，エラスムスは，「両親が子供の愛好（たとえば，淫行，姦通など）をかなえてやることにより，彼らの救いをなおざりにする者ならば，それは，なんと残酷にも彼らを憎んでいる」[441]ことになると言う。また「この世」では，「大衆」・「民衆」は「金銭を奪い取ったり，身体を打ちたたいたり，生命を取り去ったり」[442]して，他人に損害を与える人を力ある人と呼ぶかもしれない。「民衆にとって力とは，刺す蚊やさそり，そればかりでなく悪魔その

[429] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）115ページの11行目。
[430] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）115ページの12行目。
[431] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）115ページの13行目参照。
[432] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）115ページの14行目。
[433] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）115ページの16行目。
[434] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）115ページの19行目。
[435] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）115ページ末から116ページの1行目。
[436] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）116ページの1行目から2行目参照。
[437] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）117ページの2行目。
[438] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）117ページの7行目から9行目。
[439] 実際，エラスムスは，この憎しみ以上に嫌悪すべき憎しみはないと言う（前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）117ページの10行目）。
[440] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）117ページの10行目から11行目。
[441] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）117ページの10行目から11行目。
[442] 前掲書『エンキリディオン』第15章（第六教則）118ページの13行目から14行目。

ものとも共通にもっている力，つまり損害を与えるもの」[443] とエラスムスは言う。「神のみが力ある人であり，欲しても害することはできなく，それができても欲したまわない」[444] とエラスムスは言う。エラスムスは，だれも自分自身に傷つけることなしに他の人に傷つけることはできない[445]，と説いている。金銭上の損害を他の人に与えようと目論むとき，このときその人自身が愛を失っていてその人自身に大きな損害を与えている。エラスムスは，自分に大きな損害を与えることなしに，他の人に損害を加えることができない，と説いている。

勇気と臆病についても，「大衆」・「民衆」の見解は転倒している，とエラスムスは指摘する。一般には，「小さな不正に対しても狂暴にかつ心をおさえることなく短気になって激怒し，悪口には悪口をもって，悪行には悪行でもって報復する人を」[446] 力強く勇気があるといい，それに対し，「受けた不正を黙って甘受し隠している人を臆病で，内気な，無気力なもの」[447] と言う。エラスムスは，悪行に対し善行をもって答えることが如何に力強いか[448]，とエラスムスは説いている。

エラスムスは，さらに，「この世」が転倒している例を挙げる。聡明さについても「この世」におけるものとエラスムスの思索の違いを述べている。「この世」では，「すべてのおしゃべりを小耳にはさんで，全地に起こっていることを知っている人は聡明で経験のある人」[449] と呼ばれる。このように遠くで起こっていることを追跡するが，自身の心中に生じている自分自身のことについては少しも考えない。自分自身の「心中における怒り，嫉妬，情欲，野心がどのように荒れ狂っているかについて」[450] は語らない。このように情念について少しも考えないことは不手際である，とエラスムスは言う。たとえば，イギリスで起こった暴動について語っているとしよう。小耳にはさんだことを語るだけではなく，その暴動がどこまで進んでいるのか，勝利の希望があるのか，暴動がどの程度制圧されているか，暴動にどのような

[443] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）118 ページの 10 行目から 11 行目。
[444] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）118 ページの 11 行目から 12 行目。
[445] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）117 ページの 16 から 17 行目参照。
[446] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）119 ページの 4 行目から 5 行目。
[447] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）119 ページの 5 行目から 6 行目。
[448] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）119 ページの 9 行目から 10 行目。これに続けて，「したがって私は，敵に大胆に立ち向かい，城壁をのり越えたり，生命を軽んじてあらゆる危険に頭を突っ込んでいく人―それは大方の剣闘士に共通の性格です―を勇敢であるとは言いたくありません。それに対し，自分に打ち勝つ事のできる人，悪を欲している人たちに心を尽くして善を欲することのできる人，悪を報いる人たちに善を報いて返すことのできる人，また悪を祈願する人たちに善を祈願することのできる人，こういう人こそ勇気および広大な心という別名はふさわしい」と結んでいる。
[449] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）121 ページの 6 行目から 7 行目。また，「全人類の下に生じる一切の問題についておしゃべりすることに習熟している人が賢明である」と言われる（前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）121 ページの 9 行目から 10 行目）。
[450] 前掲書『エンキリディオン』第 15 章（第六教則）121 ページの 13 行目から 14 行目。

戦闘手段が用いられているのかなどに注意を向けて，自身の目で暴動の進展を観察しているならば，そのような人を聡明である，とエラスムスは言う。噂や小耳にはさんだことではなく，自分自身の心についても語り，目を見開いて社会現象を見渡し子細に語る人が聡明である，と考えられるのであろう。

第8節　次善策と救助策

8.1　人間的思慮分別による次善策と救助策

エラスムスは，たとえ人が最高善の「霊的事物に到達できないとしても」[451]，そこに近づけるためにたえず熱心に励むべきであり，さらに，人がひとたび天上の事物への賛美に向かうなら，「キリストに対する愛および永遠的なるものと尊貴なるものに対する愛は，おのずとはかないものへの反感と恥ずべきものへの憎悪を引き寄せ」るのみならず，「キリストに対する愛のうちに前進すればするほど，あなたは現世を憎むようになる」[452] と言う。人間として弱すぎて「使徒たち，殉教者たち，処女たちを模倣できない」[453] としても，その努力の過程で異教徒たちにも劣るような罪を犯してはいけない，と説いている。

エラスムスは，**第七の教則**として最高善につぐ次善策を提案している。その次善策とは，人間的思慮分別をもって「大きな悪徳から遠ざかり」[454]，自身を損なうことなく「神の慈愛のうちに安全に保つ」[455] ことである。エラスムスは，人が最高善に到達できないとしても「徳の教育」[456] の実践によって最高善を得ようと努力することを説いている。というのは，真の徳を欠いていても，神の贈り物を受容する力が精神には残っているからである。「この世」において「罪人に生じてくる多数の不利益」[457] が人間を罪から守ることができるとして，エラスムスは，この不利益として「悪評・財産の損失・貧窮・善人が受ける蔑視と憎悪・心の不安と動揺，およびはるかに悲惨な良心の呵責」[458] をあげている。「あらゆる種類の不品行のうちに真逆様に転落するよりも，政策的にも徳性を身につけて保つ方がすくなからず好ましい」[459] と説いている。

---

[451] 前掲書『エンキリディオン』第17章（第7教則）141ページの5行目。
[452] 前掲書『エンキリディオン』第17章（第7教則）141ページの8行目から12行目参照。さらに，「キリストがあなたにとり無価値であるとしても，すくなくともあなた自身のために不品行を慎みなさい」，と言う（142ページの16行目から17行目）。
[453] 前掲書『エンキリディオン』第17章（第7教則）142ページの1行目。
[454] 前掲書『エンキリディオン』第17章（第7教則）141ページの15行目。
[455] 前掲書『エンキリディオン』第17章（第7教則）141ページの16行目。
[456] 前掲書『エンキリディオン』第17章（第7教則）141ページの14行目。
[457] 前掲書『エンキリディオン』第17章（第7教則）142ページの9行目から10行目。
[458] 前掲書『エンキリディオン』第17章（第7教則）142ページの10行目から11行目。
[459] 前掲書『エンキリディオン』第17章（第7教則）142ページの19行目から20行目。

エラスムスは，**第八の教則**として神の試練を置いている。人が神の「試練の攻撃」[460] を受け「試練の嵐」[461] に襲われたとしても，神の配慮と愛を信じ勝利するために努力するなら，神は見捨てることがないだけではなく，神は出口を備えている[462] と説いている。「神の友ヨブのことを思ってみよ。ヒエロニムス，ベネディクトゥス，フランチェスコおよびこの人たちとともに最大の悪徳により悩まされた他の無数の神父たちのことを思ってみなさい」[463] とエラスムスは言う。

『ペテロの第一の手紙』（5章8節）に「身を慎み，目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が，ほえたけるししのように，食いつくすべきものを求めて歩き回っている」とあるが，エラスムスは，「賢明な支配者たちのする習わし」[464] のように，目覚めた心をもち将来の敵の攻撃に備えて見張っていなさい，と説いている。敵の攻撃に備えることがエラスムスの**第九の教則**である。これは，備えて突撃してくる者を制圧し，「蛇の頭を砕く備え」[465] である。エラスムスは「大きくなる前に，キリストである岩で打ち砕かれることが，最もよい考え」[466] であると言う。

それでも，「熱心に祈って，何らかの聖なる活動に全心を傾けて従事する」[467] か，あるいは，「聖書から引き出された言葉でもって誘惑者」[468] に答えるかするならば，これらの方法によって誘惑者が最もよく撃退される。すなわち，このために「あらゆる種類の試練に敵対する確かな格言を用意」[469] することが役立つ，とエラスムスは言う。祈りと聖書と格言がエラスムスの**第十の教則**である。

戦いのさ中に敵によって恥ずべきことに誘惑されるときに，自分の力が足りないと思っても「自身の弱さを顧みない」[470] で，「キリストの御許に逃れゆき，勝利の望みのすべてを彼の慈愛のうちに置く」[471] ことをエラスムスは説いている。戦いのさ中で自分の力に疑問を懐くのは，敬虔な人たちの直面する危険の一つであるが，もう一つ他の危険は「勝利したのちに

[460] 前掲書『エンキリディオン』第18章（第8教則）143ページの7行目。
[461] 前掲書『エンキリディオン』第18章（第8教則）143ページの4行目。
[462] 日本聖書協会編『聖書』（1968）『コリント人への第一の手紙』（10章13節）には，「あなたがたの会った試練で，世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか，試練と同時に，それに耐えられるように，のがれる道を備えて下さるのである」とある。
[463] 前掲書『エンキリディオン』第18章（第8教則）143ページの9行目から11行目。
[464] 前掲書『エンキリディオン』第19章（第9教則）142ページ末。
[465] 前掲書『エンキリディオン』第19章（第9教則）144ページの3行目。
[466] 前掲書『エンキリディオン』第19章（第9教則）144ページの5行目。
[467] 前掲書『エンキリディオン』第20章（第10教則）144ページの7行目から8行目。
[468] 前掲書『エンキリディオン』第20章（第10教則）144ページの9行目。
[469] 前掲書『エンキリディオン』第21章（第11教則）144ページの10行目。
[470] 前掲書『エンキリディオン』第21章（第11教則）145ページの2行目。
[471] 前掲書『エンキリディオン』第21章（第11教則）145ページの11行目から12行目。

霊的な慰みと歓喜のうちにあって，思いあがってしまう」[472] ことである。これが敬虔な人の第二の危険である。「教唆者に打ち勝ったのちに，あるいは敬虔あるわざによりあなたの心が内的に隠れた快楽にみたされるのを感じる」[473] ときの救済策として，エラスムスは「自分の功績に帰するのではなく，すべてを神の無償の施し」[474] と受け止め，「キリストに感謝し，あなたの卑賤さを謙虚に認めるべき」[475] ことを説いている。この神の無償の施しによる救済策がエラスムスの**第十一の教則**である。

悪へ誘惑されても，単に罪を犯さないだけではなく，自身「善い人」[476] に発展するように戦うことをエラスムスは要求している。これがエラスムスの**第十二の教則**である。「情欲にあおられたなら，あなたの弱さを認識」[477] し，快楽についても厳しく「自分に禁じ，貞潔で敬虔な活動」[478] に価値を置き，また「貪欲と吝嗇に駆り立てられるなら，施しを増すようにしなさい」[479] とエラスムスは説いている。「この世」では，「不敬虔の首謀者となるのを喜ぶ者があなたに敬虔となる好機を与えないように，あなたをもう一度挑発する恐れがある」[480] と警告している。

エラスムスは，「勝利者になったら，この戦いはこれから先の最後のものとなるような心構えと希望とをもって」[481] いつも戦い，「争いのさ中にあって永続する平和を大胆に希望」し求め，いつも「次々と試練がくるのを予想」[482] しなければならないだけでなく，武器を決して放棄せず，監視を緩めず，持ち場を決して放棄してはならない[483]，と説いている。永遠の勝利をもとめ耐えず警戒することがエラスムスの**第十三の教則**である。

多くの試練の戦いのさ中にあって受けなければならない辛苦に恐れを懐くとき，「現在の戦いの苦味を，敗北したものに生じる将来の罪の苦味と比較」[484] し，決して「戦いの苦労と罪の快楽を比較し」[485] ないようにし，さらに「現在の罪過の魅力を，熱烈に戦った人に授けられる将来の勝利の魅力および心の平静さと比較」[486] することをエラスムスは説いている。これ

[472] 前掲書『エンキリディオン』第 21 章（第 11 教則）144 ページの 20 行目。
[473] 前掲書『エンキリディオン』第 21 章（第 11 教則）145 ページの 6 行目から 7 行目。
[474] 前掲書『エンキリディオン』第 21 章（第 11 教則）145 ページ 7 行目から 8 行目。
[475] 前掲書『エンキリディオン』第 21 章（第 11 教則）145 ページの 13 行目から 14 行目。
[476] 前掲書『エンキリディオン』第 22 章（第 12 教則）146 ページの 3 行目。
[477] 前掲書『エンキリディオン』第 22 章（第 12 教則）146 ページの 4 行目。
[478] 前掲書『エンキリディオン』第 22 章（第 12 教則）146 ページの 5 行目。
[479] 前掲書『エンキリディオン』第 22 章（第 12 教則）146 ページの 5 行目から 6 行目。
[480] 前掲書『エンキリディオン』第 22 章（第 12 教則）146 ページの 8 行目から 9 行目。
[481] 前掲書『エンキリディオン』第 23 章（第 13 教則）146 ページの 11 行目から 12 行目。
[482] 前掲書『エンキリディオン』第 23 章（第 13 教則）147 ページの 1 行目。
[483] 前掲書『エンキリディオン』第 23 章（第 13 教則）147 ページの 1 行目から 3 行目参照。
[484] 前掲書『エンキリディオン』第 25 章（第 15 教則）148 ページの 7 行目から 8 行目。
[485] 前掲書『エンキリディオン』第 25 章（第 15 教則）148 ページの 7 行目。

がエラスムスの**第十五の教則**である。

死に至るほどの傷を受けると，生まれつきか弱い性質をもつ人たちは，最悪のこと，つまり「絶望へ引き寄せられる」[487] のが常である。「それは非常に危険なこと」[488] である。そういう場合に対処するために精神を強固にする教則（救済策）として**第十六の教則**をエラスムスは置いている。この教則では，「罪に陥ったときに単に絶望してはならないだけでなく，また不名誉の恥や受けた傷の痛みが逃走へ導かないようにする」のみならず，「勇敢に戦うように鼓舞し元気を回復させる」[489] ように活発な戦士たちを見習わなければならない[490]，と説いている。

8.2　キリストの十字架による救助策と最大の罪

エラスムスは，「この世」では「生の一瞬の間もだれも安全ではない」[491] ので，その生を引き延ばすことは大変危険であり，また，「この世」では突然の死に襲われると永遠にわたって消滅であり，悔い改めることをしないことは悪の中の最大のものである，と言う。

「この世」において，次に襲ってくる「誘惑者の襲撃に」対して個別の救助策によって対応するのも有効であろうが，それでも「あらゆる種類の不幸と試練に対してキリストの十字架こそ唯一のなによりもまさって有効な救済」[492] であって，同時に，「道に迷う者には模範」[493] であり，「労苦にあえいでいる者には慰め」[494] であり，「戦っている者には武具」[495] である。エラスムスは，十字架の秘儀を彼の**第十七の教則**に置き，十字架を悪漢どもに向ける訓練・練習をするときには大衆[496] の風習によってはならない，と説いている。

---

[486] 前掲書『エンキリディオン』第 25 章（第 15 教則）148 ページの 8 行目から 9 行目。
[487] 前掲書『エンキリディオン』第 26 章（第 16 教則）149 ページの 6 行目。
[488] 前掲書『エンキリディオン』第 26 章（第 16 教則）149 ページの 6 行目。
[489] 前掲書『エンキリディオン』第 26 章（第 16 教則）149 ページの 7 から 9 行目参照。
[490] エラスムスは，「預言者ダビデ，ソロモン王，教会の第一人者ペテロ，使徒パウロ，犯に陥ってしまった多くの偉人たち」を考えなさい，さらに「神はおそらくこれらの人たちを，あなたが罪に陥ったとき絶望しないために，転落するのを許した」のである，と言う（前掲書『エンキリディオン』第 26 章（第 16 教則）149 ページの 14 行目から 15 行目）。
[491] 前掲書『エンキリディオン』第 31 章（第 21 教則）155 ページの 7 行目。
[492] 前掲書『エンキリディオン』第 27 章（第 17 教則）150 ページの 4 行目。
[493] 前掲書『エンキリディオン』第 27 章（第 17 教則）150 ページの 5 行目。
[494] 前掲書『エンキリディオン』第 27 章（第 17 教則）150 ページの 5 行目。
[495] 前掲書『エンキリディオン』第 27 章（第 17 教則）150 ページの 5 から 6 行目。
[496] エラスムスは，大衆は主の受難物語を読んだり，十字架像を崇拝したり，十字架像の無数のしるしによって身体の至る所を固めたり，神聖視された木の破片を家に保存したり，特別の時間をもうけてキリストの苦しみを回想し，キリストが義人の不当な苦しみ受けていることに人間的な共感を持って苦痛を覚え涙を流す，ことによって大衆の風習を例示している。（前掲書『エンキリディオン』第 27 章（第 17 教則）150 ページの 7 行目から 11 行目参照）。

エラスムスは，より大きな実りをもたらすように「十字架の秘儀を省察するためには，合理的で敬虔な戦術を具えかつ熱心に練習し，状況が要求するや否や用意しておかなければならない」[497] と言う。ここの戦術とは「十字架に付けるべき情念の一つ一つに，もっとも適合しているあの十字架の部分」[498] を適用する方法である。いくつかの例を見てみよう。

人が「現世に対する野望」[499] という情念によって刺激されるとき，「あなたのかしらなるキリストは偉大」[500] であり，「あなたのためにご自身をどれほど卑下した」[501] かについて考えなさい，と言う。「嫉妬という邪悪」[502] な情念が心を突然襲撃してきたら，キリストがどんなにか「恵み深くかつ率直に自身のすべてを私たちに役立たせるために費やした」[503] か，また「最悪の人たちに対してもいかに善であったか」[504] を思い起こしなさい，と言う。「恥ずべき快楽により試されるときには，かしらの全生活がいっさいの快楽から自由であり，あらゆる不快・拷問・辛苦により満ちていた」[505] かに心を止めなさい，と言う。そして同じ方法で試練に対処する[506] なら，キリストが「あなたのために耐えたもう量り知れない悲嘆」[507] をあじわったことに感謝し，またそのことは甘美なことである。

十字架の秘儀は，有効な救済策の一つであるが，いっそう弱い人たちにとっても，彼らが情念によって不敬虔へそそのかされたとき，「心の目の前に，罪がいかに醜く，いかに呪わしく，いかに有害なものであるか」[508] と考え，それに反し「人間の尊厳はなんと偉大であるか」[509] と想い直すことができる。十字架の秘儀による救助策も有用である，とエラスムスは説いている。

人間の尊厳をエラスムスの**第十八の教則**に置いている。人間は，現世を創造した神によって造られた高貴な生物であり，「天使たちの同市民，神の子，不死性の相続人，キリストのか

[497] 前掲書『エンキリディオン』第27章（第17教則）150ページの18行目から151ページの2行目。
[498] 前掲書『エンキリディオン』第27章（第17教則）151ページの2行目から3行目。
[499] 前掲書『エンキリディオン』第27章（第17教則）150ページの5行目。
[500] 前掲書『エンキリディオン』第27章（第17教則）151ページの6行目。
[501] 前掲書『エンキリディオン』第27章（第17教則）151ページの6行目から7行目。
[502] 前掲書『エンキリディオン』第27章（第17教則）151ページの7行目。
[503] 前掲書『エンキリディオン』第27章（第17教則）151ページの7行目から8行目。
[504] 前掲書『エンキリディオン』第27章（第17教則）151ページの8行目。
[505] 前掲書『エンキリディオン』第27章（第17教則）151ページの9行目から11行目。
[506] 前掲書『エンキリディオン』第27章（第17教則）151ページの11行目から14行目において，怒りに燃えるときに小羊のように毛を切る者の前に黙して口を閉ざしたキリストが直ちに助けてくれますように。貧困が悪しき仕方で苦しめ，所有欲がそそのかすときには，直ちにキリストが貧しくなったことを心に思い出せ，と言う。
[507] 前掲書『エンキリディオン』第27章（第17教則）151ページの16行目。
[508] 前掲書『エンキリディオン』第28章（第18教則）152ページの4行目。
[509] 前掲書『エンキリディオン』第28章（第18教則）152ページの4行目から5行目。

らだ，教会の構成員であり，私たちのからだは聖霊の宮」[510] であり，私たちの「精神は神性の模像にして同時にその至聖所」[511] である，と言う。それに反して，罪は心のもっとも忌まわしい疫病であり，「最も恥ずべきであるのみならず最も悲惨な奴隷状態の保証人」[512] である，と言う。

エラスムスの「人間尊厳」は，人間が神によって創造された，あるいは巨額な代価で贖われた，高貴な生物であり，その精神が神性の模像にして聖所であると見ていることに起因している。ルネサンス期の「人間の尊厳」は，神との関わりにおいて，どうのように考えられえいたのであろうか。多分，エラスムス同様に「神の創造された人間」という理念が，最も重要な意味をそれに与えていたのであろうと思われる。

8.3　悪徳への警戒

エラスムスは，彼の**第十四の教則**に悪徳を軽く見るな，を置いている。エラスムスは「悪徳」を軽く見ないように警戒せよ，と言う。というのは「軽く見られていた敵にまさって何度となく勝利した敵はいないから」[513] である，と言う。自分の「一つか二つかの悪徳に目をつぶる」[514] ことによって「自分自身を欺いている」[515] 人々の大部分は，「窃盗・略奪・殺人・姦淫・近親相姦を極端に呪って」[516] いるが，しかし，「簡単な売春行為や快楽の緩和された行使は軽い違反」[517] と見なしている。キリスト教的な憎しみをもって「何らかの悪徳を呪う人は，すべての悪徳を必然的に呪う」[518] はずであり，「心に真の愛を取り入れた人は，悪の全軍団に呪いを等しく向ける」[519] と言う。「悪から日々何かを摘み取り，善い道徳をいつも何か追加すべき」[520] である，とエラスムスは説いている。

---

[510] 前掲書『エンキリディオン』第 28 章（第 18 教則）152 ページの 10 行目から 12 行目。また，『コリント人への第一の手紙』（6 章 19 節から 20 節）に「あなたがたは知らないのか。自分のからだは，神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって，あなたがたは，もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは，対価を払って買いとられたのだ。それだから，自分のからだをもって，神の栄光をあらわしなさい」とある。

[511] 前掲書『エンキリディオン』第 28 章（第 18 教則）152 ページの 12 行目から 13 行目。

[512] 前掲書『エンキリディオン』第 28 章（第 18 教則）152 ページの 16 行目から 17 行目

[513] 前掲書『エンキリディオン』第 24 章（第 14 教則）147 ページの 5 行目から 6 行目。

[514] 前掲書『エンキリディオン』第 24 章（第 14 教則）147 ページの 8 行目。

[515] 前掲書『エンキリディオン』第 24 章（第 14 教則）147 ページの 8 行目。

[516] 前掲書『エンキリディオン』第 24 章（第 14 教則）147 ページの 9 行目。

[517] 前掲書『エンキリディオン』第 24 章（第 14 教則）147 ページの 10 行目。

[518] 前掲書『エンキリディオン』第 24 章（第 14 教則）147 ページの 17 行目。

[519] 前掲書『エンキリディオン』第 24 章（第 14 教則）147 ページの 18 行目。

[520] 前掲書『エンキリディオン』第 24 章（第 14 教則）148 ページの 3 行目。

8.4　神と悪魔[521]

エラスムスは，彼の**第十九の教則**として神と悪魔の対比を置いている。神は「ご自身をすべてのものに与える，かの永遠の源泉であり，最高の美の，最高の歓喜の，最高善の理念」[522]であり，悪魔は「すべての悪の，最悪の恥辱の，最大の不幸の父」[523]である，とエラスムスは説いている。

神を悪魔に対照させ，神は「どのような慈愛によって」[524]人を造られ，「どのような寛大さにより」人を富ませ，「いかなる柔和な心で」[525]日々人間の過失に耐え，「どのような喜び」[526]をもって悔い改める者を受け入れているか，とエラスムスは言う。これらに対し，悪魔は「どんな大きな嫉妬をいだいて」人間の救いを何度もつけねらい，「いかなる辛苦に」[527]人間を投げ込んでいるか，と言う。「悪魔は全人類を自分と一緒に永遠の破滅へ引き入れること以外」[528]の何も日々志していない，と言う。

神の子となることの報酬は，「不死なる生活」であり，天国の市民と共同の住まいにおいて最高善をいつも享受することである，とエラスムスは説いている。悪魔の奴隷の子になることの報酬は「永遠の死」であり，呪われた者たちとの不幸な交わりにおいて最悪の災いにいつも責められることである，とエラスムスは説いている。

8.5 「この世」での生活と敬虔と不敬虔

エラスムスは，敬虔と不敬虔の違いを比較し，**第二十の教則**を置いている。「この世」の生活においての敬虔と不敬虔は大きく違った報酬をもたらすが，前者からは心の確実な平安と純粋な精神の幸福な歓喜が分かち与えられ，「この世」にはこれとの交換に相当する高価なものは何もなく，後者からは多数の不幸と精神のあの悲惨な呵責がもたらされる。敬虔な生活の報酬は，「キリストが福音において永遠の至福」[529]の手付けとして約束した「百倍もの実を結ぶ霊的な喜び」[530]であり，これは，使徒にも見たこともなく聞いたこともなく，さらに人の

[521] エラスムスは，罪を犯すことによって神の敵になり，悪魔は支配者になる，と言う。無罪と恩恵によって神の友に加えられ，子としての特権の嗣業とされるが，罪によって悪魔の奴隷の子に決められる，と言う。
[522] 前掲書『エンキリディオン』第29章（第19教則）153ページの8行目。
[523] 前掲書『エンキリディオン』第29章（第19教則）153ページの9行目。
[524] 前掲書『エンキリディオン』第29章（第19教則）153ページの11行目。
[525] 前掲書『エンキリディオン』第29章（第19教則）153ページの12行目。
[526] 前掲書『エンキリディオン』第29章（第19教則）153ページの13行目。
[527] 前掲書『エンキリディオン』第29章（第19教則）153ページの15行目。
[528] 前掲書『エンキリディオン』第29章（第19教則）153ページの15行目から16行目。
[529] 前掲書『エンキリディオン』第30章（第20教則）154ページの14行目。また『マタイ福音書』（19章29節）に，「わたしの名のために，家，兄弟，姉妹，父，母，子，もしくは畑を捨てた者は，その幾倍もを受け，また永遠の生命を受けつぐであろう」とある。

心に思い浮かべることもなかった「驚くべき贈り物」[531]である，とエラスムスは言う。神は「この世」においても，それを自分が愛している「人たちに確かに準備している」[532]が，その間にも，「この世」において「不敬虔な者のうじ虫は死なず」[533]，「地上にいるあいだに人々はすでに地獄の苦しみをなめている」[534]と言う。

また，生の一瞬の間もだれも安全ではなく，突然死に襲われると，永遠に消滅することから，エラスムスは**第二十一の教則**として「現在の」生のはかなさ[535]を置いている。さらに，エラスムスは，罪からの改心を考えている人にとって，また，人生の終わりまで「不義の絆」[536]を引きずってきたひとにとって，「悔い改めない」[537]ことは，「悪のなかの最大のもの」[538]である，と説いている。エラスムスは，最大の悪としての悔い改めないことを**第二十二教則**としている。

第9節　特殊な悪徳に対する救助策

9.1　好色に対する救助策

エラスムスは，「醜い好色の罪」[539]と言い，「好色は最大の，また最も多数の罪とつねに結びついる」[540]と言う。神によって創造された人間を多くの家畜のうちの最も「無感覚の生き物に等しくするこの肉欲」[541]は，不潔で汚れていて，「どんな人にもいかに嫌悪すべき」ものであると言う。「一時的な肉欲の醜い快感」[542]によって，魂と身体を同時に辱め，「キリストがご自身の血をもって神聖なものとなしたもうた宮を冒瀆する」[543]のは，ひどい精神錯乱であ

[530] 前掲書『エンキリディオン』第30章（第20教則）154ページの14行目から15行目。
[531] 前掲書『エンキリディオン』第30章（第20教則）154ページの16行目。
[532] 前掲書『エンキリディオン』第30章（第20教則）154ページの16行目から17行目。
[533] 前掲書『エンキリディオン』第30章（第20教則）154ページの17行目から18行目。『イザヤ書』（66章24節）に，「彼らは出て，わたしにそむいた人々のしかばねを見る。そのうじ虫は死なず，その火は消えることはない。彼らはすべての人に忌み嫌われる」とある。
[534] 前掲書『エンキリディオン』第30章（第20教則）154ページの18行目。エラスムスは，福音書に記されている金持ちの道楽者が責められる火災をその例としている。
[535] 前掲書『エンキリディオン』第31章（第21教則）155ページの7行目参照。
[536] 前掲書『エンキリディオン』第32章（第22教則）155ページの12行目から13行目。
[537] 前掲書『エンキリディオン』第32章（第22教則）155ページの11行目。
[538] 前掲書『エンキリディオン』第32章（第22教則）155ページの13行目。
[539] 前掲書『エンキリディオン』第33章156ページの9行目。
[540] 前掲書『エンキリディオン』第33章158ページの13行目。また続けて，エラスムスは多数の罪を挙げている。たとえば，売春婦を求めることには，両親に聴き従わない，友人を無視する，父の財産を浪費する，他人のものをひったくる，偽誓する，痛飲する，強盗する，悪事を働く，生死をかけて戦う，殺害する，冒瀆する，など罪を挙げている。
[541] 前掲書『エンキリディオン』第33章156ページの10行目から11行目。
[542] 前掲書『エンキリディオン』第33章156ページ末。

る，と言う。

エラスムスは，同時に，好色が多くの悪を身に引き起こす，と言う。好色の評判は「薄汚い悪臭」[544]を放つ悪徳であるから，真っ先に「名声」[545]を奪い取り，それは相続した資産を食い尽くし，「身体の力と美観」[546]を同時に奪ってしまい，健康を傷付け，「ぞっとするような無数の病気」[547]を生み出し，「天性の旺盛な力を取りのぞき，精神の鋭さを鈍化させ，けもののような気質」[548]を植え付ける，と言う。そして，どうなに立派な人でも全身を汚物の中に沈めるため，「ただ下品で賤しく汚いことしか」[549]考えず，人間に固有の「理性の使用を抹殺」[550]する，と言う。それは，「青年時代を狂気じみた，恥ずべきで，憎むべきものとし，老年を醜く，悲惨にする」[551]と言う。

だが，エラスムスは，個人が置かれている状況において，諸々の快楽から引き戻す手立てを説いている。個人が司祭であるならば，「自分が神的な事柄のために全体的に聖別されている」[552]ことを考え，尊ぶべきキリストの身体を拝領する同じ口でもって「吐き気をもよおす娼婦の肉体」[553]に接吻し，秘儀を執り行う同じ手でもって「憎むべき不潔を味わう」[554]ことは不適切にして，ひどく破廉恥な行為である，と言う。

『コリント人への第一の手紙』（6章15節から16節）に「あなたがたは自分のからだがキリストの肢体であることを，知らないのか。それだのに，キリストの肢体を取って遊女の肢体としてよいのか。断じていけない。それとも遊女につく者はそれと一つのからだになることを，知らないのか」とある。エラスムスは，パウロと同様に，最高善であり，最高美であるキリストの身体と一つである人間は，破廉恥な行為や不潔な行いで悪徳に染まるな，と説いている。

個人が教育を受けているなら，その精神は「ますます高貴で神に似たもの」[555]であるから，不名誉にはますます相応しくなく，また，個人が貴族であるなら，あるいは君侯であるなら，

[543] 前掲書『エンキリディオン』第33章156の17行目から157ページの1行目。ここで，「神聖なものとなしたもうた宮」とは，人間の身体であり，同時に，その魂を意味している。
[544] 前掲書『エンキリディオン』第33章157ページの3行目。
[545] 前掲書『エンキリディオン』第33章157ページの3行目。
[546] 前掲書『エンキリディオン』第33章157ページの4行目。
[547] 前掲書『エンキリディオン』第33章157ページの4行目。
[548] 前掲書『エンキリディオン』第33章157ページの5行目から6行目。
[549] 前掲書『エンキリディオン』第33章157ページの5行目。
[550] 前掲書『エンキリディオン』第33章157ページの9行目。
[551] 前掲書『エンキリディオン』第33章157ページの9行目から10行目。
[552] 前掲書『エンキリディオン』第33章161ページの7行目。
[553] 前掲書『エンキリディオン』第33章161ページの8行目から9行目。
[554] 前掲書『エンキリディオン』第33章161ページの9行目から10行目。
[555] 前掲書『エンキリディオン』第33章161ページの12行目。

破廉恥が明らかになるにつれて「つまずきは重大に」[556] なると言う。個人が結婚しているなら，「汚れのない婚姻の床がいかに尊いものか」[557] を考え，自身の「結婚がキリストと教会との最も神聖な結婚の交わりに倣う」[558] ように務めなさい，と説いている。どのような「生活の事情の下にあっても好色の奴隷になる」[559] ことは最も卑しいことである，と言う。

妻であるなら，貞潔よりも相応しいものはないと考え，また，夫であるなら，偉大な事柄に相応しく，つまらないものにはふさわしくない，と言う。老人であるなら，肉の快楽は不自然であり，嘲笑すべきものであり，「あらゆる不自然なものの中において老人の好色よりも不自然なもの」[560] はない，と言い切っている。エラスムスは，年齢に似合った別のことを考えることを説いている。

9.2　貪欲に対する救助策

エラスムスは，「富を所有することではなくて，富を蔑視することが真に偉大」[561] である，と説いている。「ただ名前だけでキリスト教徒にすぎない大衆は私に抗議して，きわめて狡猾にも自分自身を欺くことを喜んでいる」[562] と言う。そのキリスト教徒は，「必要という名目で自分の欲望」[563] の言い訳をしているが，これに対し「その日暮らしの野の百合と空の鳥」[564] についての福音書の譬話でエラスムスは対抗している。すべてのものを放棄したとき，なによりも先ず「神の国を求めよ」[565]，そうすれば，「これらすべてのもの」[566] は，キリスト教徒たちに「添えて与えられる」[567] と約束しているとキリストは言う。エラスムスは，「心を尽くして敬虔に達しようと努めた人々でかつて生活に必要なものが援助されなかった」[568] ときはなかった，と言う。「人は必要なものを自然の必要によってではなく，欲望の目標によって量っている」[569] と批判している。敬虔な人には「少なすぎる程度で十分である」[570] と説いている。

---

[556] 前掲書『エンキリディオン』第 33 章 161 ページの 14 行目。
[557] 前掲書『エンキリディオン』第 33 章 161 ページの 14 行目から 15 行目。
[558] 前掲書『エンキリディオン』第 33 章 161 ページの 15 行目。
[559] 前掲書『エンキリディオン』第 33 章 161 ページの 17 行目から 18 行目。
[560] 前掲書『エンキリディオン』第 33 章 162 ページの 9 行目。
[561] 前掲書『エンキリディオン』第 33 章 164 ページの 5 行目から 6 行目。
[562] 前掲書『エンキリディオン』第 33 章 164 ページの 6 行目から 7 行目。
[563] 前掲書『エンキリディオン』第 35 章 164 ページの 14 行目。
[564] 前掲書『エンキリディオン』第 35 章 164 ページの 15 行目。
[565] 前掲書『エンキリディオン』第 35 章 164 ページの 15 行目。
[566] 前掲書『エンキリディオン』第 35 章 164 ページの 18 行目。
[567] 前掲書『エンキリディオン』第 35 章 164 ページの 18 行目。
[568] 前掲書『エンキリディオン』第 35 章 164 ページの 20 行目。
[569] 前掲書『エンキリディオン』第 35 章 165 ページの 2 行目。エラスムスは，富を蔑視しているのではなく，欲望の目標で必要性を量っていることを攻撃している。彼は，敬虔な人には，自然によって与えられる程

「お金を所有するのは罪過ではない」が，「お金を崇拝することは悪徳に結び」[571]ついている，とエラスムスは説いている。富の与える快適あるいは快楽について考察し，エラスムスは次のように指摘している。すなわち，富は，人間自身の外部にあり，「これ以上につまらぬ快適を与えるものはない」[572]，さらに，「富の所有によって，賢くなり，教養あるものになり，健康的にいっそ美しくすること」はなく[573]，富は，諸々の快楽を準備し，「死をもたらす快楽」[574]も準備し，「名誉を得させる」[575]が，富に馬鹿者だけが驚嘆し気に入るのであるが，その人達は，実際には間違った名誉を与えられている，と説いている。「真の名誉は称賛されている人たちによって称賛されていることで，最高の名誉はキリストに気に入られる」[576]ことであり，「真の名誉は富の報酬ではなく，徳の報酬」[577]である，とエラスムスのテーゼで結んでいる。

「財産は友人を与える」[578]とキリスト教徒は言うが，エラスムスは，それは「偽りの友人にすぎない」[579]と反論する。富める人は，貪欲のゆえに憎まれ，贅沢のゆえに妬まれ，食い尽くすために，追従され好意を示される[580]が，しかし，「友人をいちどもそれとして認識することができない」[581]，また，すべての人を「腐肉に食いつく禿鷹」[582]であり，「貯えにたかってくるはえ」[583]と見做している，とエラスムスは言う。さらに，富める人が快適をもってすると思っているすべてのものは，「ほとんど虚偽であり，幻影のようであり，ごまかし」[584]である，と皮肉る。

富の獲得には悲惨な辛苦をともない，富の保存には多くの危険と多大な不安をともない，また多くの苦痛をもって失われ[585]，「富は心のすべての平静を幾千もの憂鬱をもって引き裂

度で十分であると考えている。

[570] 前掲書『エンキリディオン』第35章165ページの2行目から3行目。

[571] 前掲書『エンキリディオン』第35章165ページの6行目。

[572] 前掲書『エンキリディオン』第35章165ページの17行目。エラスムスは，内的なもの（魂や精神）に価値を認めているが，外的なもの（その最たるもが富）に価値を認めようとはしていない。

[573] 前掲書『エンキリディオン』第35章165ページの19行目。エラスムスは，富を蔑視しているのではなく，富のもたらす快楽を警戒している。併せて，富の死に導く快楽を恐れ，攻撃している。

[574] 前掲書『エンキリディオン』第35章166ページの1行目。

[575] 前掲書『エンキリディオン』第35章166ページの3行目。

[576] 前掲書『エンキリディオン』第35章166ページの4行目から5行目。

[577] 前掲書『エンキリディオン』第35章166ページの3行目。

[578] 前掲書『エンキリディオン』第35章166ページの10行目。

[579] 前掲書『エンキリディオン』第35章166ページの10行目から11行目。

[580] 前掲書『エンキリディオン』第35章166ページの13行目から14行目。

[581] 前掲書『エンキリディオン』第35章166ページの12行目。

[582] 前掲書『エンキリディオン』第35章166ページの17行目から18行目。

[583] 前掲書『エンキリディオン』第35章166ページの18行目。

[584] 前掲書『エンキリディオン』第35章166ページの19行目。

[585] 前掲書『エンキリディオン』第35章167ページの3行目から4行目。

く」[586]，また「富は渇きを決して鎮めないし，かえってますます渇きを刺激し，すべての罪業に飛び込ませる」[587] とエラスムスは説いている。このエラスムスの見解は，富や財産が人間の心の平静を乱しかつ憂鬱で引き裂くと結論している。

9.3　名誉心に対する救助策

「真の徳から生じるものだけが名誉である」[588] という意見を固く堅持すべきであり，また「時々名誉心そのものから逃げなければならない」[589]，そして「唯一の名誉は，人々によってではなく，神によってほめられること」[590] ことであり，「無記中立的な事がら，たとえば容貌・力・家柄のゆえに表彰されても，正当な名誉とよばれはしない」[591] とエラスムスは説いている。

エラスムスは，一般「大衆」が獲ようとしている「あのもろもろの名誉が，いかに笑うべきものであるか」[592] と言い，この場合，名誉は，明らかに，「徳義と不徳義とを区別できない人々によって」[593] 授けられ，大抵は「無記中立的な事がら」[594] のゆえに授けられ，そして，「ふさわしくない人」[595] に授けられる，と説いている。

エラスムスは，「ちっぽけな人間の意見にしたがって人の価値を量ること以上に気違いじみていること」[596] はないと，また，すべての名誉を，「名誉が授けられた当のものをあなたが負っているお方」[597] に返しなさい，と説いている。

「この世」において「権勢をふるっている人たちの生活がどんなにとげが多く，どんなに心配に満ち，危険と痛みに溢れている」[598] か，「高慢なすべての喧騒から遠のいた，生活の静穏がどんなにか至福である」[599] か，とエラスムスは言う。そして，「父なる神は世がさげすんだ

[586] 前掲書『エンキリディオン』第 35 章 167 ページの 5 行目から 6 行目。
[587] 前掲書『エンキリディオン』第 35 章 167 ページの 6 行目から 7 行目。
[588] 前掲書『エンキリディオン』第 37 章 168 ページの 12 行目。
[589] 前掲書『エンキリディオン』第 37 章 168 ページの 14 行目。
[590] 前掲書『エンキリディオン』第 37 章 168 ページの 14 行目から 15 行目。
[591] 前掲書『エンキリディオン』第 37 章 169 ページの 1 行目。
[592] 前掲書『エンキリディオン』第 37 章 169 ページの 5 行目から 6 行目。エラスムスは，名誉を授ける人はみな恐怖から授けるか，あるいは，それを授けられる人が授ける人を助けるためにかなどによって授けられる，と言う。
[593] 前掲書『エンキリディオン』第 37 章 169 ページの 6 行目から 7 行目。
[594] 前掲書『エンキリディオン』第 37 章 169 ページの 8 行目。
[595] 前掲書『エンキリディオン』第 37 章 169 ページの 9 行目。
[596] 前掲書『エンキリディオン』第 37 章 169 ページの 17 行目。
[597] 前掲書『エンキリディオン』第 37 章 169 ページの 15 行目。エラスムスは，名誉を授けるお方として，キリスト（あるいは神）を思い描いており，名誉をわがもののように思うのは相応しくないと言う。
[598] 前掲書『エンキリディオン』第 37 章 170 ページの 5 行目から 6 行目。

者に栄光を与え」,「栄誉はキリストの十字架のうちに」[600] あると,「かしらなるキリストの模範がいつもあなたの心について離れないように」[601] すべきである，と言い，エラスムスは，偉大なキリスト自身が,「この世」の尺度では卑しく侮られ，悉く「提供された名誉を避けた」[602] ことを引いている。

エラスムスは，名誉・栄誉はキリストの十字架にあり，そこに救いがあると説いて,「この世」における「人間的な名誉」[603] は何になるか，と反問している。

9.4　怒りと復讐欲に対する救助策

怒りに対する救助策では,「最善のことは教育・理性・慣習によって全く激昂することがないように心を鍛え」[604]，さらに,「悪徳に嫌悪のみをいだいて，侮辱に対しては愛の奉仕をもって答える」[605] ならば，それは完成に至る，とエラスムスは言う。ゆえに，エラスムスは,「全く怒らないということは神に最も似ており，したがって最も美しい」[606] ことで,「善をもって悪に打ち克つことは，キリスト・イエスの完全な愛に見ならう」[607] ことである，と説いている。激怒することは人間に相応しいことではなく，粗暴な野獣に相応しいこと[608]，と言う。

怒りに対する優れた救助策を，エラスムスは，次のように説いている。他人があなたに罪を犯すなら，あなたが「神に対してどのような罪を，いかに多くの罪を，しばしば犯している」[609] かを問い，また「神に対していかに多くの負債を負っている」[610] かを問うことが，優れた救助策であって,「負債者である兄弟を赦してあげるだけ，それだけ神はあなたの負債を免除して下さる」[611] と説いている。彼は，過失を犯した後に償いのすべてを果たすために「神

[599] 前掲書『エンキリディオン』第37章170ページの4行目。
[600] 前掲書『エンキリディオン』第37章170ページの18行目から19行目。
[601] 前掲書『エンキリディオン』第37章170ページの12行目。
[602] 前掲書『エンキリディオン』第37章170ページの15行目。キリストが名誉を避けた例として，キリストが驢馬の子に乗り，エルサレムに入ったこと（日本聖書協会編『聖書』(1968)『マルコ福音書』11章7節参照），また，赤い外套を着せられ，いばらで冠を編んで頭にかぶらせられ，右手には葦の棒を待たせられ，ユダヤ人の王，万歳と言わせられたことをあげている（日本聖書協会編『聖書』(1968)『マタイ福音書』27章28節から29節参照）。
[603] 前掲書『エンキリディオン』第37章170ページの20行目。
[604] 前掲書『エンキリディオン』第39章177ページの6行目。
[605] 前掲書『エンキリディオン』第39章177ページの7行目。
[606] 前掲書『エンキリディオン』第39章177ページの10行目。
[607] 前掲書『エンキリディオン』第39章177ページの10行目から11行目。
[608] 前掲書『エンキリディオン』第39章177ページの12行目参照。
[609] 前掲書『エンキリディオン』第39章174ページの16行目。
[610] 前掲書『エンキリディオン』第39章174ページの16行目から17行目。
[611] 前掲書『エンキリディオン』第39章174ページの17行目から18行目。

との和解する方法は，あなたを侮辱した兄弟とあなたが和解すること」[612] より適切なものはなく，「隣人に対し小さな罪過をゆるしてあげなさい，そうすればキリストはあなたのかくも多くの罪過を赦す」[613] と説いている。キリストが僕に行ったことと同じ関係を同僚の僕に対してとること，すなわち，悪行をもって仕返しをしない，さらに，悪行に対して善行で報いいる[614] ことをエラスムスは説いている。

怒りは復讐心を燃え上がらせるが，エラスムスは，心の燃えるような痛みが復讐へ駆り立てるときに，怒りと勇敢とを勘違いしないよう[615] にと説いている。また，復讐を喜ぶことは，弱々しく，心の卑屈である[616] と，逆に「他人の愚かさを模倣するより無視する方が勇気があり気高い」[617] と言い，不正をおこなう者と似たものにならないように，と警告している[618]。

不正は，不正によって取り除かれない。不正に対して不正で答えると，「かえって増大する事情」[619] になる，とエラスムスは説いている。不正に対して不正で答えると，その結末は「双方の側で敵意は増大し，痛みは生々しくなり，古くなればなるほど癒やしがたくなる」[620] と説いている。不正をなした人が柔和と寛容によって癒やされ，「その人は敵から最も確実な友」[621] となり，復讐によって取り除こうとすると「悪そのものは憎むべき利息を伴って」[622] 逆流する，と言う。

キリスト教徒は，自分自身によるのでないならだれも傷つけられない。不正は，その張本人のほかだれをも害しない[623]，とエラスムスは説いている。

第２章　エラスムスの『エンキリディオン』にみる社会観

第１節　その執筆の外的背景

ホイジンガーの『エラスムス―宗教改革の時代―』第６章（神学への志向）に，「1500 年にはパリからオルレアンに移り，ここで最初オーギュステヌス・カミナード（Augustine

[612] 前掲書『エンキリディオン』第 39 章 175 ページの２行目から３行目。
[613] 前掲書『エンキリディオン』第 39 章 175 ページの３行目から４行目。
[614] 前掲書『エンキリディオン』第 39 章 175 ページの 18 行目から 20 行目参照。
[615] 前掲書『エンキリディオン』第 39 章 172 ページの 17 行目から 18 行目参照。
[616] 前掲書『エンキリディオン』第 39 章 172 ページの 17 から 173 ページの２行目参照。
[617] 前掲書『エンキリディオン』第 39 章 173 ページの３行目から４行目。
[618] 前掲書『エンキリディオン』第 39 章 173 ページの５行目から９行目参照。
[619] 前掲書『エンキリディオン』第 39 章 173 ページの 10 行目。
[620] 前掲書『エンキリディオン』第 39 章 173 ページの 12 行目から 13 行目。
[621] 前掲書『エンキリディオン』第 39 章 173 ページの 14 行目。
[622] 前掲書『エンキリディオン』第 39 章 173 ページの 15 行目。
[623] 前掲書『エンキリディオン』第 39 章 174 ページの１行目から２行目参照。キリスト教徒の不正はその本人自身を害するというのは，神のみが恵みを与えることができ，残忍で狂暴なものたちには与えないからである。

Caminad）[624] の所に寄食した。しかし若い同宿のひとりが病気になると，エラスムスは引っ越してゆく」[625] とある。また，エラスムスは，「1501 年の春には，またペストを恐れて」[626] パリを去り，そして，1501 年 7 月には，「友人バトスと共にトルネヘム（Tournehem）の城に静閑を楽しんだ」[627] とある。このように頻繁な移住の間にも，エラスムスは「あの偉大な教父ヒエロニムスの著作を編輯すること，そして特にギリシア語を徹底的に学ぶこと」[628] に野心を懐いていた。というのは，エラスムスは，ギリシア語が聖書の正しい理解に「目を開かせるであろうという期待」[629] を持っていたからである。この間にも，エラスムスは，1501 年の秋から翌年の夏まで，「はじめはサン・トルメル（Saint-Omer）のサン・ベルタン（Saint Bertin）修道院のところに，次は，これから遠くないクルトブルヌの城」[630] に滞在している。このサン・トメルでエラスムスは，ジャン・ヴィトリエ（Jehan Vitrier）（1456 年頃生–1516 年没）[631] というフランチェスコ会修道院の管理者と知り合っている。本稿第 2 章第 1 節の脚注 631 に示すように，この人物の深い感化の下に，その地でエラスムスは，『エンキリディオン』を書き上げた[632] と思われる。

もう一つの執筆事情がエラスムスによって提供されている。エラスムスに執筆を依頼してきた人物についてであるが，上掲書『エラスムス―宗教改革の時代―』によると，「パトスの

[624] F.M. Nichols『The Epistles of Erasumusu-Arranged in order of time』の 111 ページによると，彼はドイツ人か，Low Countries の出身で，パリでエラスムスの教え子であった。エラスムスの生涯において重要な役割を担っていた。特に，エラスムスの書物の販売に関連して，あるいは，エラスムスに宿を提供する面でエラスムスを支えたようである。

[625] J. ホイジンガー著（宮崎信彦訳）『エラスムス―宗教改革の時代―』（第 6 章（神学への志向 1501 年））55 ページ上段の 17 から 20 行目。

[626] 上掲書『エラスムス―宗教改革の時代―』第 6 章（神学への志向 1501 年）55 ページ下段の 13 行目。

[627] 上掲書『エラスムス―宗教改革の時代―』第 6 章（神学への志向 1501 年）56 ページ上段の 3 から 4 行目。ここで友人バトス（James Batt）（1460 年生–1502 年没）のことである。エラスムスは彼と頻繁に書簡のやりとりをしている。

[628] 上掲書『エラスムス―宗教改革の時代―』第 6 章（神学への志向 1501 年）56 ページ上段の 7 から 9 行目。

[629] 上掲書『エラスムス―宗教改革の時代―』第 6 章（神学への志向 1501 年）57 ページ上段の 17 から 20 行目。

[630] 上掲書『エラスムス―宗教改革の時代―』第 6 章（神学への志向 1501 年）58 ページ上段 3 から 5 行目。

[631] 上掲書『エラスムス―宗教改革の時代―』第 6 章（神学への志向 1501 年）58 ページ上段の 11 から 15 行目には，ジャン・ヴィトリエについて，「修道院生活の弊害につてあまりに率直に発言したためソルボンヌによって行われた非難の重荷を一身に担っている」，さらに，彼は「修道院に対する信頼を棄てたわけではなく，男女修道院の改革に身を捧げた」とある。また，その 15 から 20 行目には，ジャン・ヴィトリエは「スコラ哲学から聖パウロに進むにつれ，キリスト教的な生活についてはきわめて自由な観念をもつようになって，慣習的な悔悛の業や礼典に強く反対した。この人がたしかにエラスムスの最も有名な，感化の強い著作の一つ，『戦うキリスト者の短剣』（Enchiridion militis Christiani）に重要な影響を及ぼしたのである」とある。

[632]『エンキリディオン』の解題（金子　晴勇氏による解題）に記されている，成立事情（409 から 410 ページ）を参照。

友人でトルネヘルムの城によく現れる軍人があったが，無頼放縦の人物で，淑徳で信心深い細君を虐待し，その上無教養で，聖職者に対して激しい憎悪を懐いていた」[633] とある。この細君を虐待していた，無頼放縦で無教養な軍人は，その前掲書には，ジャン・ド・トラジェグニース[634] であるかも知れない，とあるが，その根拠は弱い。だが，本稿第 2 章第 1 節の脚注 634 に示すように，執筆を依頼した人物もその軍人の名前も別人であった説もある。その細君は「バトスに頼んで，エラスムスに書いてもらい，夫が宗教に関心を持つようにしたいと願った」[635] とある。エラスムスは，その依頼に応じてルーヴァン（Louvain）で推敲を加えて，1504 年にアントワープにおいて，デルク・メルテンズから出版した[636]，とある。

1515 年 6 月に，その単行本の初版が出されているが，しかし，この『エンキリディオン』は注目されなかった。1518 年 8 月にフローベン書店から出版された新版（第二版）では，ベネディクト会修道院長パウル・ヴォルツ（Paulus Volzius）（1480 年生-1544 年没）[637] 宛の手紙をその書の序文としている。この序文では，エラスムスのキリスト教（的）哲学が要約されており，人々に注目されるようになった。その後，『エンキリディオン』は，ドイツ語，フランス語，英語，スペイン語などに翻訳された。

『エンキリディオン』の内的背景（内的事情）は，本稿の第 1 章第 1 節において述べたことに尽きるが，第一に，人間生活（「この世」での生活）については「不断の戦闘以外のなにも

[633] 前掲書『エラスムス―宗教改革の時代―』第 6 章（神学への志向 1501 年）の 58 ページ下段の 4 から 6 行目。

[634] 前掲書『エラスムス―宗教改革の時代―』第 6 章（神学への志向 1501 年）の注（25）にその名が記されている。また，上掲書『エンキリディオン』の解題（金子　晴勇氏による解題）に記されている，成立事情では，その執筆の切っ掛けをもたらした夫人は，カタリナ・フォン・オセグエム夫人であり，彼女の最初の夫が，ニュルンベルク（Nürnberg）出身のドイツ人でメッチェルンに定住していたヨハン・ホッペンロイター（Johann Poppenruyter）と言う人物であった，とある。また彼は，1515 年に宮廷の火砲鋳造人になっている。人物名は異なっているが，その人物が軍人で，無骨で，細君に乱暴する人物であったことは共通している。

[635] 前掲書『エラスムス―宗教改革の時代―』（第 6 章（神学への志向 1501 年））58 ページ下段の 8 から 10 行目。

[636] 前掲書『エラスムス―宗教改革の時代―』（第 6 章（神学への志向 1501 年））58 ページ下段の 10 から 14 行目参照。また，前掲書『エンキリディオン』の解題（金子　晴勇による解題）に記されている，成立事情には，「1504 年 2 月アントワープのテオドール・マルティヌスの手によって印刷され，著作集『蛍雪の功』（Lucubratiunclae）の中に他の七作品と共に出版された」，とある。

[637]『エンキリディオン』の序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』（金子　晴勇訳）の成立事情（434 ページ）には，パウル・ヴォルツについては，次のように紹介されている。これによると，パウル・ヴォルツは，アルザス地方（Alsace）のシュレットシュタット（Schlettstadt）の近くにあるフーグスホーヘン（Haugshofen）のベネディクト会修道院長であった。1512 年に，彼はシュレットシュタットの修道院長に選出された。彼は，修道生活の改革に着手していた。エラスムスは，この人の生活態度を『エンキリディオン』に示した多くの教則（戒め）の実践者の模範とみていた。ヴォルツは，その後，1526 年にプロテスタントに改宗した，と紹介されている。

のでもない」と認識し，「この世」の人たちは，悪徳と軍勢との不断の戦いの状態にあるにもかかわらず，平和であると認識している。「この世」の人たちがそのように思考・考えるのは，欺かれているからである，とエラスムスは皮肉を込めて断言する。「この世」がキリストに敵意と憎しみを懐いているので，エラスムスは「この世」と戦うことを決意している，と理解される。エラスムスは，魂の死あるいは魂の病が「この世」おいて迫りくることを危惧し，心自体が悪霊に支配されることがないように監視する必要を訴えている。第二に，エラスムスは，私たちが「キリストのからだのなか」にあり，その「かしらによってすべてをなしうる」と考え，キリストの導きによって，キリスト者が「この世」の誤りから逃れて，「霊的な生活の純粋な光に達することが容易になる」と認識し確信している。その上で，エラスムスは，次のように説いている。まず，第1章第1節で見たように，「避けるべき道を追求すべきものから見分けなければなりません」，同時に，「物事の選択にあたって思い迷うことのないように，迷妄を取り除かねばなりません」と説き，次に，悪を憎み，善を愛さねばならなく，肉に打ち勝たなければならない，と強く説いている。第三に，徳の道を棄てることのないようにしなければならないと説き，エラスムスは，第1章第1節3項において，その悪徳と戦うための武器として二つを調達している。それは，「祈り」と「聖書の知識」である。第四に，エラスムスは，理性（霊）に導かれる内なる人間を「この世」を導く人間とし，情念（肉）に導かれる外的な人間が「この世」から朽ちることを求めている。エラスムスは，聖書に登場するヤコブに内なる人間を見て，エソウに外的人間を見ている。

本稿の第1章第2節から第9節においてみてきたように，エラスムスは，キリスト教徒の生活態度の「二十二の教則」を説いている。その中で，キリストにならって生き，最高の目標としてのキリストを目指すことの意義[638]を説いている。最後に，エラスムスは，特殊な悪徳に対する救助策を説いている。

第2節　エラスムスの社会を見る視点

2.1 『エンキリディオン』にみる社会認識

本稿第1章で引用した『エンキリディオン』からの言葉によって，エラスムスの社会認識の一端を確認できる。彼の社会をみる基本的な視点は，人が「キリストのからだ」であるという視点である。同時に，エラスムスは，「階級の矜持，国民的敵意，職業的羨望，宗教的団体の対立―これらが人間の分裂を造っている―を嘆いている」[639]。現実の社会現象（社会的

[638] 前掲書『エラスムス―宗教改革の時代―』第6章（神学への志向）の59ページにおいて，この『エンキリディオン』によって「はじめて自分の神学綱領を発展させる機会」を得たと指摘し，さらに「聖書に戻ることを」その神学の綱領とした，と述べられている。

[639] 前掲書『エラスムス―宗教改革の時代―』第6章（神学への志向）の60ページ下段8から10行目。

な動き）に対するエラスムスの見解を窺い知ることができる。

エラスムスは，人が「キリストのからだ」であって，キリストに倣って生活することを説いている。たとえば，人がキリストの身体の内にあり，その「頭（かしら）」によってのみすべてをなしうる，と説いている。確かに，人は余りに弱すぎるが，その頭となるキリストにおいて人にできないことはない，とエラスムスは断言する。したがって，不断の戦いをしている私たちの戦いの結末は，無論，少しも不確定ではなく，勝利することに決まっている，とエラスムスは結論に至っている[640]。なぜなら，勝利は，幸運にもとづいているのでは決してなく，神の手中に置かれ，神を通して私たちの手中にも置かれているからである，と説いている[641]。エラスムスは，キリストに倣うことによって「この世」の悪魔・悪徳に惑わされることなく，自身の魂を死滅させることもない，と堅く信じている。エラスムスは，社会の秩序や調和をもたらす「キリストのからだ」としての社会集団の実体を説いている。この思想は，既に，中世時代には伝統的な社会認識の方法として知られていたが，同時に，頭がキリストである「キリストの体」として教会を説明する使徒パウロの思考方法[642]とも類似している。

このように，エラスムスは，人がキリストの身体の中にあり，その頭（かしら）によってすべてをなしうる社会の実現を見ていたが，実際，この「キリストのからだ」としての社会は「この世」の社会とは異なっていたのも事実である。「キリストのからだ」と「この世」は乖離していた。私たちが「キリストのからだ」のなかにあり，その「かしらによってすべてをなしうる」と考え，キリストの導きによって人が「この世」の誤りから逃れることによって「霊的な生活の純粋な光に達することが容易になる」[643]とエラスムスは認識している。残念ながら，エラスムスは，「キリストのからだ」と「この世」の乖離を小さくする，あるいは，その乖離を埋める方策については説いてはいない。彼は，「この世」を回避し，より安全な境地に自分自身を置くことを密かに目指していた，と推察される。

[640] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）の17ページの1行目から7行目参照。

[641] 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）の17ページの2行目から7行目参照。

[642] 日本聖書協会編『聖書』（1968）『ローマ人への手紙』（12章4節から5節）に「なぜなら，一つのからだにたくさんの肢体があるが，それらの肢体がみな同じ働きをしてはいないように，わたしたちも数は多いが，キリストにあって一つのからだであり，また各自は互いに肢体だからである」とある。また，日本聖書協会編『聖書』（1968）『コリント人への第一の手紙』12章27節に「あなたがたはキリストのからだであり，ひとりびとりはその肢体である」とある。

[643] 前掲書『エンキリディオン』第9章（真のキリスト者の一般的教則）57ページの16行目。

2.2 『ヴォルツ宛の手紙』[644] に見える「この世」の認識

エラスムスは，「この世」（現世）の有様をどのように見てきているのか，あるいは，どのように捉えているのであろうか。エラスムスの社会認識論を検討してみよう。彼は，「この世」の「多数のキリスト教徒たちが単に激情によってだけではなく彼らの謬見によって堕落しているのを見てきた」[645] と言い，また，「主任司祭とか博士とか自称している人たち，および自分の利益のためにキリストの名前を濫用している」[646] 多数の人たちを吟味した，と言う。また「指図や拒絶によって人間的な事柄」[647] を混乱させられた人たち，ならびに「悪徳が明白にもかかわらず，嘆くこともほとんど許されない」[648] 人たちについても言うにも及ばない，と言う。すなわち，エラスムスは，「この世」を「暗い世の有様のなか」[649]，「大きな世界の不穏のなか」[650]，「多くの人間の様々な謬見のなか」[651] にある，と認識している。

このような「この世」において，頼るべき所は「福音書の教えという真正にして聖なる錨」[652] 以外には何もあり得ないと，また「真に敬虔な人でだれが，今世紀が全く腐敗しきった時代であるのを見て悲嘆に」[653] くれない人がいるであろうか，とエラスムスは述べている[654]。このように「この世」においては，良く生きるということはすべての人にとって大切であり，「真実の信仰と偽りのない愛」[655] が良く生きるための入り口であり，そして「この世」において，「キリストの支配は，敬虔が栄えるなら，愛が栄えるなら，平和が栄えるなら，貞潔が栄

[644] これは，前掲書『エンキリディオン』の第二版の序文として書かれたものである。『エンキリディオン』は1501年に著され，1504年に『蛍雪の功』（『労作』（Lucubrationes））の中におさめられたが，この序文は1518年にフローベン書店から出版された新版（第二版）のパウル・ヴォルツ宛ての手紙である。よって，この序文と『エンキリディオン』とには，17年ほどの歳月の隔てがある。完全には分離できないが，本文の『エンキリディオン』とこの序文は別々の作品として扱うこともできる。ここでは，あたかも別々の作品であるかのように見做している。

[645] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』189ページの11から12行目。

[646] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』189ページの12から13行目。

[647] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』189ページの13行目。

[648] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』189ページの14行目。

[649] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』189ページの15行目。

[650] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』189ページの15から16行目。

[651] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』189ページの16行目。

[652] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』189ページの16から17行目。

[653] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』189ページの17から18行目。

[654] エラスムスは，前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』（189ページの18行目から190ページの2行目）において，今世紀の腐敗の実体を，「かつていつ暴政が，いつ貪欲が今より広くまた罰せられもしないで支配していることがあった」のか，「かつていつ今日よりも儀式が容認されていることがあった」のか，「いつ今日よりも不正が氾濫していたことがあった」のか，「いつこのように愛が冷えきったことがあった」のか，と反問する。「野心と利得のにおいがしない何が」主張され，読み上げられ，決定されるのか，と反問する。

[655] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙』185ページの16行目から17行目。

えるなら」[656]，勢力を獲てゆく，とエラスムスは言い，「この世」にキリストの支配が広がることによって人々が救われるという社会思想を懐いている。

「キリストご自身は自分が天国の保護者にして君主であると宣言」[657] し，天国の輝きは「天上的なもの」の勝利の凱歌に他ならないが，「この世」において天上的なものの勝利への道の「キリスト教的哲学の源泉と水脈とが福音書と使徒の手紙」[658] の中にある，とエラスムスは説明している。「キリストは岩です。しかし，この岩は天の火のための温床をもち，生ける水の水脈をもって」[659] いる，とエラスムスは述べている。ここで，天の火とは神の愛であろう。また，生ける水とは神の霊であろう。キリストがこれら二つ（火の温床と水の水脈）を持っていることを説いている。「キリストがその教えと精神との小さな火花を生ける永遠の水脈として残して」[660] おき，「永遠の生命へ流れ入る生ける水を発見するまで，この水脈を探索するように，私たちは努力しなければなりません」[661] とエラスムスは説いている。ここで，永遠の水脈とは永遠の命を得るための神の愛，神の慈悲などの神の霊であろう。「この世」の時代に生きるペリシテ人[662] は「生ける泉よりも地の方が好きなのです。すなわち，彼らは地上的なものを味わい，福音書の教えを地上的な情愛にねじまげ，人間的野望に仕えるように強制し，自らの恥ずべき利益と暴虐との望みをかなえるべく強いるような人たち」[663] とエラスムスは言う。

彼らの（その時代のペリシテ人の）欲望は，地上的なものであり人間的野望であるが，彼らは，その欲望を「偉大な君主の名前，教皇の名前，またキリストご自身の名前で」[664] 隠蔽しているためにキリストを説くことには危険がともなう，とエラスムスは言う。というのは，「福音書の泉の中に土を投げ入れる人たちもまたキリストの真の信奉者と見なされることを願っていて，ペリシテ人たちは土地のために戦いをなし，天上的なものの代わりに地上的なものを，神的なものの代わりに人間的なことを説教することによって大へん強大になっている」[665]，さらに，「彼らはキリストの栄光のために働くのではなく，罪の恩赦，和解，配分，それと同様な取引などをあきなっている人たちの利益のために働いている」[666]，とエラスムス

[656] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』188 ページの 3 から 4 行目。
[657] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』188 ページの 6 から 7 行目。
[658] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』188 ページの 14 から 15 行目。
[659] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』190 ページの 9 から 10 行目。
[660] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』190 ページの 3 から 4 行目。
[661] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』190 ページの 4 から 5 行目。
[662] エラスムスは，彼の時代のペリシテ人につては具体的には名指しはしていない。
[663] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』190 ページの 15 から 18 行目。
[664] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』191 ページの 11 から 12 行目。
[665] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』191 ページの 6 から 9 行目。
[666] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』191 ページの 9 から 11 行目。

は言う。彼の時代のペリシテ人たちは，多分，悪徳に惑わされた人々であろうが，具体的にどのような人を想定していたのかは確定しきれない。

エラスムスは，「キリストの哲学」あるいは「キリストの天上的な哲学」を純粋に伝える人が真に「教皇の任務」を実行している[667]，と説いている。教皇がキリストの哲学の最初の教師である，と言い，また国の繁栄と国が暴虐に苦しむことがないように尽力する人が，君主の中でより一層「キリストの哲学」の教師にふさわしい[668]，と言う。

しかし，「この世」は転倒している，とエラスムスは言う。たとえば，「取るに足らぬ戦争を止めるように言う」なら，その人は策略家どもに非難される[669]。というのは，「ある教皇が戦争を是認しているように思われるので」，戦うべきではないと勧告する者は「異端者」と見なされる[670]。しかし，「キリストと使徒たちの教えに反対して」，「戦争を引き受けるよう進軍ラッパを吹く人は非難されない」[671] とエラスムスは言い，「この世」が転倒していることを嘆いている。本来，平和あるいは平安を願う教皇が戦争を推進するのは転倒しているからである。「キリストの哲学」では，キリストは「平和」あるいは「平安」が拡がることを願っているからである。それなのに「この世」は，戦争を賛美する。「この世」は逆さまになっている・転倒している，とエラスムスは嘆きながらも説いている。また「神学上の討論において勝利を得ようとして，自説を守ろうとしたりする野望に満ちた強情さ」[672] を避けるようにと警告すると，「その人はあたかも学校をことごとく弾劾しているかのように，不当に告訴される」[673]，とエラスムスは嘆いている。その人は，自説にこだわるというその野望を諫めているのであったが，神学校で行われるすべてのことを批判していると「この世」では誤解される。これも転倒した社会での仕業・現象である。

転倒した社会の例をもう少し拾ってみよう。「この世」では，「最も劣った部類のものに最高の徳を帰したり，その反対に悪徳のなかではるかに恐るべき悪徳が現にあるのに，最も軽微な悪にすぎないものを猛烈に嫌悪」していることから，エラスムスは「大衆の転倒した判断を非難する」[674]。また「その人は悪徳に行為を寄せている」[675] かのように直ちに裁判所に呼びだされる[676]。このように「この世」には「大衆の転倒した判断」がはびこっている。「金銭

[667] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』191ページの13から14行目参照。
[668] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』191ページの14から15行目参照。
[669] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』198ページの15から16行目参照。
[670] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』198ページの17から18行目参照。
[671] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』198ページの18から20行目参照。
[672] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』199ページの8から10行目参照。
[673] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』199ページの10から11行目参照。
[674] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』199ページの13から15行目参照。
[675] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』199ページの15行目参照。

を長く危険な巡礼のために費やすよりも善良な本当に貧乏な人たちに支出する方がいっそう神聖である」[677] と勧告する場合にも，その人は，敬虔な心情を非難しているのではなく，キリストの教えによって「真の敬虔にさらに近いものを先取りしている」[678] だけにすぎないのに，「この世」から疎んじられる。

さらに，転倒した判断の例をあげてみよう。徳の序列の中に，「敬虔の力よりもその外観の力の方がいっそう役立っている」[679] と受け取られるものがあるが，それは，「真の敬虔を全く消滅」[680] させるまでにいたるかもしれない，とエラスムスは言う。外観[681] の力として儀式があげられているが，エラスムスは「儀式の中に，聖化の初めと終わりがしつらえられている」[682] とは思えないものがあると言う。エラスムスは，聖アウグスティヌスが自身で扶養していた「聖職者たちが目立った衣服を使用するのを禁じ」[683]，彼らが「民衆に気に入られたく思うならば，衣服ではなく，道徳によって気に入られるよう」[684] にせよと言ったという事例を取り上げている。服装が新奇で奇抜であることを軽蔑するのではなく，また，「フランシスコ会士たちが彼らの修道会の会則を，ベネディクト会士たちが自分たちのそれを尊重しいるからではなく，彼らのうちのある人たちが福音よりも自分の会則に多くのものを帰しているゆえに，非難を向けている」[685] とエラスムスは嘆いている。エラスムスは，キリスト教のそれぞれの会派の人々が，キリストによって伝えられたキリスト者全体の掟よりも，人間によって書かれた各会派の会則の方をより多く受け入れられているところに転倒した「この世」を見ている。また，「ユダヤ主義の精神から正義の確信を具え」もって，そのような「無価値なものから判断して自分を他の人より優先させておきながら，虚言により他人の名声を攻撃するのを

[676] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』199 ページの 17 から 18 行目参照。
[677] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』200 ページの 2 から 3 行目。
[678] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』200 ページの 3 から 4 行目。
[679] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』201 ページの 6 から 8 行目。
[680] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』201 ページの 9 行目。
[681] エラスムス著（渡辺一夫訳）『痴愚神礼讃』の 54（167 ページ）において，服装としての外観についての規則を例示している。「靴の結び目の數はいくつ」，「帶の色はこれこれ」，「着物の縞はこれこれ」，「帶の布地は何々，その幅はこれこれ」，「頭巾の型はこれこれ，その大きさはしかじか」，「剃髪の禿げの廣さは何寸」，「睡眠は何時間」，と言う風に決められていた。そこでエラスムスは，痴愚神になりすまして，「口では使徒の慈悲を説く御連中が，一寸違った着物の着方をしたとか，一寸ばかり濃い色の布地を使ったからとかいふことが元で，大聲を張り上げる始末です」と言っている。
[682] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』201 ページの 11 から 12 行目。ここでエラスムスが何を思い描いてこのことを言っているのか分からない。衣服のことも含めて言っているのであろうが，定かではない。
[683] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』201 ページの 12 から 13 行目。
[684] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』201 ページの 13 から 14 行目参照。エラスムスは，これを『神の僕への規律』六から引用している。
[685] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』201 ページの 17 から 19 行目。

悪徳と思わない人々の誤り」をエラスムスは怪しんで警戒している。

あえて公然と「女が司祭と関係するよりも非理性的な家畜と関係する方が罪が軽いとたいへん悲しげに」[686] 断言する人もいるが，これは，実際は，司祭の情欲による憎むべき悪行を強く非難しているのであるが，その真の意味が「この世」では理解されない，とエラスムスは嘆いている。エラスムスは，司祭が「毒のある舌」と「でっちあげた虚言」とでもって「無実の人，否かえって功徳のある人の名声」を破壊する「欺瞞者」である，と非難している[687]。これは，野望に憑かれた司祭に対する非難である。司祭は，キリストに最も近くに位置し，「地上のすべてのかすの汚染」から清められているはずなのに，その情欲や野望のために転倒している。エラスムスは，司祭の行いが転倒しているのを嘆き落胆し失望している。

それでも，「キリストの愛」の「この世」での実現をエラスムスは期待し渇望している。つまり，「真の愛はすべてのことを是認し，すべてに耐え，何ものも斥けず，単に恵み深く快適な上長のみならず，厳しく無愛想な上長にも従順である」[688] ことをエラスムスは期待している。実際，キリストや使徒たちは，食物の選択については何も命じていない。また，キリストは，毒を含ん中傷を忌み嫌われ，使徒の手紙でもこれを嫌っている[689]。「修道士らの悪徳に光をあて暴露するために雄弁だと思われたいと願うほどの愚かな人」[690] はいないであろうが，彼らは彼ら自身の説に従う人が少ないことを，また，彼らの群れに加わる人が少ないことを恐れている[691]。

「キリストの霊を飲んで自由」[692] になり，「キリストの自由を目ざして前進している人々」[693] 以上には「権威ある者に服し，これに従い，いつでも良いわざをする用意があり，だれもそしらず，争わず，寛容であって，すべての人に対してどこまでも柔和な態度」[694] を示す人はいない，とエラスムスは言う。ゆえに，「キリストのためではなく自分の腹のために生きる人」[695] にまさって「儀式のわなでしめつける人」[696] は，「キリストの霊を飲んで自由」で，「キリスト

[686] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』200ページの11行目。
[687] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』200ページの16から17行目参照。
[688] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』202ページの11から13行目。このエラスムスの思想は，使徒パウロの「すべての人は，上に立つ権威に従うべきである。なぜなら，神によらない権威はなく，おおよ存在している権威は，すべてかみのよって立てられたものである」（日本聖書協会編『聖書』（1968）『ローマ人への手紙』13章1節）の思想に通じる。
[689] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』202ページの4から5行目。
[690] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』202ページの8行目。
[691] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』202ページの9から10行目参照。
[692] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』202ページの10行目。
[693] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』202ページの17行目。
[694] パウロの『テトスへの手紙』3章の1から2節参照。
[695] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』203ページの2から3行目。
[696] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』203ページの3行目。

の自由を目ざして前進している人々」の中にはいない，と言う。

2.3　キリストの哲学[697] あるいはキリストの天上的な哲学[698]

2.3.1　キリスト教的哲学

エラスムスは，「キリストの哲学」あるいは「キリストの天上的な哲学」を試みる動機を以下のように説明している。「神であった御方が人間になられた，不死なる御方が死すべきものとなられた，父の御心の中にあった御方が地上に下ろされたというような事を，人間に告げようとしている新しく，おどろくべき種類の哲学を私たちはどうして考えようとしないのでしょうか」[699] と説いている。エラスムスは，天からやってきたキリストの知恵やキリストの教えを窮めることの重要性を訴え，「キリストの哲学」を修めるために必要なものとして「純粋で率直な心」[700] を準備することだけを要求している。そして，彼の目標は，農夫であろうとも，機織りであろうとも，旅人であろうとも，すべてのキリスト者に永遠の生命の恩典が公平に行き渡る事によって「キリストの哲学を，ただ儀式やお題目としてではなく，それによって自分の心と生活全体を変えていくものとする」[701] ことが実現すると期待している。しかし，現実の「この世」では，「神学者の中に，その名前からはずれた者，すなわち，神の事を語らず，この世の事を語る者がある事を見いだしますし，また，キリストの貧しさと，世を軽んずることを志願した修道士の中に，あなたがこの世で見出す以上に，この世的な事を体験している者がいる事を，私は恐れている」[702] と述べている。エラスムスは，優れた者と

[697] エラスムス著（木ノ脇　悦郎訳）『新約聖書序文』（パラクレーシス）213 ページの 13 から 15 行目において，「非常に多くのしかたで清められ，多くのサクラメントによって，キリストと結ばれている私たちは，最も確かな幸福をすべての人に提供している彼の教えを知らないという事実を，嫌悪すべき，恥ずべきことだとは思わないでしょうか」とエラスムスは言っている。

[698] 前掲書『新約聖書序文』（パラクレーシス）213 ページの 20 行目から 214 ページにおいて，「キリストだけが天からやってきた教師であり，永遠の知恵であるのですから，確かに教え得るのは彼だけです。彼だけが，人間の救いの創始者として有益なことを教えたのです。また，彼だけが教えたことを，自ら実行したのです。彼だけが。約束した事は何であれ，実現できるのです」と言っている。エラスムスは，キリストの教えを天からの教えだと理解している。

[699] 前掲書『新約聖書序文』（パラクレーシス）214 ページ 10 から 12 行目。

[700] 前掲書『新約聖書序文』（パラクレーシス）215 ページ 1 行目。またその 3 行目において，「この哲学自体，単純な心以外の何物も喜ばない霊を教師とする事で十分」である，と述べている。

[701] 前掲書『新約聖書序文』（パラクレーシス）218 ページの 10 から 13 行目。エラスムスは，「この世」で「本当（真実）」のキリスト者が至る所に生じることを目標としている。

[702] 前掲書『新約聖書序文』（パラクレーシス）216 ページ 14 から 17 行目。これに続けて，私（エラスムス）にとって「本当の神学者というのは，次にあげるような人の事のなのです。ねじまげられたような三段論法ではなく，愛情と，顔と，目と，自分の生き方で富を拒む事を教え，キリストというものはこの世の助けに信頼するのではなく，全く天に依存すべきであり，不正に対して仕返しをせず，悪を願う者にも善を願い，悪をなす者に善をもって尽くすべきだと教える者のことです」，と言っている。

なるべき人（聖職者）が堕落の際にいることを嘆いている。

先に見たように，「この世」において「キリストの支配」は，敬虔が栄えるなら，愛が栄えるなら，平和が栄えるなら，貞潔が栄えるなら，その勢力を獲ると示したが，この「敬虔」，「愛」，「平和」，「貞潔」がエラスムスの「天上的なもの」なのである。また天からやって来て「この世」で死んだキリストは，自分自身が天国の保護者にして君主であると宣言している。人が「この世」において，より良く生きるために，「キリスト教的哲学」の源泉と水脈が隠されている「福音書と使徒の手紙」によって激励・支援されることをエラスムスは説いていた。すなわち，「使徒の力」[703] が味わえるように手紙によって励まされる必要がることを説いている。「福音書記者と使徒との最も純粋な源泉から，また最も信頼できる解釈者たちからキリストの哲学の全体を要約して集めるという任務，しかもそれを学術的である限度内で単純に，明晰であるという条件の下に簡略に行なう任務が幾人かの敬虔であり同時に学識がある人々に委ねられる」[704] ことをエラスムスは提案している。

2.3.2 「この世」とキリスト教的哲学

実際に，「この世」には，多くの人間的な問題（現実社会の問題）がある。これは，キリスト教的な愛の規則が公の慣習や君主の法律によって制定されたているものと衝突するとき，人はいかにすべきかという問題である。人は，君主たちの義務の履行のために行われていることを非難してはならない[705] が，しかし，他方，「キリストのあの天上的な哲学を人間的なもろもろの決定によって汚し」[706] てはならない，ともエラスムスは説いている。

エラスムスは「この世」での「キリスト教的哲学」を提示している。この思想は，中世に多用された「三職分」[707] の協力関係で社会全体の調和を図ることを議論する“隠喩”に酷似している。「キリスト教的哲学」では，キリストと「この世」の人々との関わりを確立することが説かれている。

最初に，キリストの位置を決めている。「いくつかの環が」キリストの回りをめぐり，キリストを「中心として」位置づけられる[708]。そして，すべての人々がキリストを目標として，中心に位置するキリストに向かって生活し，多くの人間的な問題に対処する，とエラスムスは説いている。エラスムスは，祈る者（聖職者）をキリストの最も近くに，次に，戦う者（騎

[703] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』188 ページの 13 行目。
[704] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』188 ページの 17 から 20 行目。
[705] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』192 ページの 11 行目。
[706] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』192 ページの 12 行目。
[707] 前掲書『中世ヨーロッパの社会観』序章（隠喩による社会認識）17 ページの 11 から 13 行目参照。三職分とは，祈る者（聖職者），戦う者（騎士），耕す者（農民）である。
[708] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』192 ページの 12 から 13 行目参照。

士），その周りに耕す（農民）を配置している。キリストに最も近くにいる人々，つまり第一の環をなす司祭，司教，枢機卿，教皇，そしてどこに行こうともキリストに従う義務のある人々は，中心に位置するキリストの純粋な部分を受け入れて，それをその隣人に移し注ぐように行動することをエラスムスは説いている。エラスムスは，聖職者に「キリストの愛」の規則を「この世」の人々に伝えることを託している。

その第二の環は，世俗の君主たちからなっている。この人たちは，「その武器や法律によって」[709] キリストに仕え，「正義の戦争により敵を制圧」[710] し，国の平安を守っているときも，「合法的な刑罰によって犯罪者を罰している」[711] ときでも，キリストに仕えている。だが，君主たちは，「地上の最低のかすや現世の仕事と結び」[712] ついた事柄に従事しているために，中心となるキリストからいっそう遠くに滑り落ちたり，「国家のためではなく自分自身の欲望のために戦争を起こし」[713]，寛大さによって救える人たちに対し「正義を装って暴威」[714] を振ったり，本来守るべき民衆を「略奪したりする危険に」[715] さらしている。地上のあらゆるかすの汚染や現世の仕事に結びついて起こされる悪徳から君主たちを引き離すことをエラスムスは説いている。キリストが地上のすべてのかすの汚染から司祭を清めたように，「司祭，とりわけ最高司祭の義務は君主たちを自分の方に呼び寄せる」[716] ことである，とエラスムスは説いている。どこかで「戦争が起こるとき，司教たちは事件が流血に至らないで和解される」[717] ように努力し，「和解が不可能であれば，戦争がいっそう残忍に行われないように，また長期に拡大しないように少なくとも交渉」[718] することが説かれている。エラスムスは，司祭（最高司祭）に義務として君主たちをその汚染から引き離すことを託している。

しかしながら，エラスムスは，国家の秩序の維持するためにキリスト（あるいは聖職者）の介入する力にも限界（あるいは範囲）があることを説いている。その限界についての論理展開は，聖書の記述に即してなされる。キリストは国家の秩序維持に必要なことの「いくらかを無視し」，「いくらかを拒否し」，「いくらかをそれらに目を閉ざしているかのように，否認も是認もしない」[719] とエラスムスは説いている。たとえば，「キリストはカイザルの貨幣も

[709] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』192 ページの 17 行目。
[710] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』192 ページの 18 行目。
[711] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』192 ページの 18 行目。
[712] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』192 ページの 19 行目。
[713] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』192 ページの 20 行目から 193 ページの 1 行目。
[714] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』193 ページの 1 行目。
[715] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』193 ページの 2 行目。
[716] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』193 ページの 5 から 6 行目。
[717] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』193 ページの 6 から 7 行目。
[718] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』193 ページの 7 から 9 行目。

そこに刻まれた像をも承認してい」[720]ない。また，キリストは，ピラトが犠牲の血にガリラヤの人々の血を混ぜて断罪に処した[721]とき，「彼らがこうした仕打ちをうけたのは正しかったか，不当であったかを判定しない」[722]で，キリストは「悔い改めないならば，みな同じように災いを受けると脅しておられるにすぎない」[723]と言う。また「彼は姦淫の女を断罪もしていないし，公然と無罪をいいわたしてもいない」[724]，「ただ罪を繰り返さないよう命じている」[725]にすぎない。だが，「遺産を分配する仲裁人に」なることを求められたとき，「彼は公然とその任務を拒否している」[726]。

これらのことは，いかなる場所を「この世」でキリストとの関係において占めているのであろうか。エラスムスは，世俗の君主たちによってなされることを否定することなく，ただキリストを「君主たちや世俗の役人たち」によって行われていることの「創始者とすべきではない」[727]としている。そのことが「神の職権によって実行されていると主張すべき」[728]でもないときっぱりと説いている。しかし，エラスムスは，君主たちの行政が抜け落ちた面がある点は見逃してはいない。エラスムスは，彼らには「キリスト教的純粋さが全く欠け」[729]ていると見ている。この人たちによって「ある疎漏なことがらが取り扱われ」[730]るが，しかし，これは「世界の秩序を維持するために必要」[731]である言い，エラスムスは，社会秩序の維持に果たす君主たちの行いを是認し，君主たちの行為が社会の秩序と調和のために必要である，とも説いている。というのは，こういう人たちの奉仕によって「邪悪さが減少する」[732]ようになり，「悪しき人々が国家を害することが減少する」[733]ようになると認識していたからで

[719] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』193ページの11から12行目。
[720] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』193ページの13行目。『ルカによる福音書』20章25節に「それなら，カイザルのものはカイザルに，神のものは神に返しなさい」とある。ここでキリストは，カイザルに貢納するよいかどうかにはまともに返答していない。
[721] 日本聖書協会編『聖書』（1968）『ルカによる福音書』第13章第1節から第2節参照。
[722] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』193ページの17行目参照。判定をしない理由として，エラスムスは，「天上のことを教えている」キリストには「そのような粗雑な事がら」について判決するのは相応しくないとと言う（前掲序文『ヴォルツ宛の手紙』193ページの20から194ページの1行目参照）。
[723] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』193ページの18行目。
[724] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』193ページの15行目。
[725] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』193ページの16行目。
[726] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』193ページの19から20行目。
[727] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』194ページの11行目参照。
[728] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』194ページの12行目。
[729] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』194ページの13行目。
[730] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』194ページの13行目。
[731] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』194ページの14行目。
[732] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』194ページの15行目。

あり，さらに，彼らは「神の正義」と「国家の平和」[734] に奉仕し，「かかる平和がないなら敬虔に属することはかき乱された」[735] であろうと説いている。しかし，「神の真実な正義の模像」[736] は微光を発しているから，彼らが自分の義務を履行し，より悪しきことが起こらないように権力を行使する場合には，彼らに栄誉を与え，彼らの行うことに我慢しなければならない[737] と彼自身を説得している。エラスムスは，社会秩序の維持と社会の調和のためになす君主たちの社会的な役割を認めている。だが，他方では，エラスムスは，「神の正義」が司祭の行いや法規にはるかに輝き渡っていなければならない[738]，と説いている。

そして，第三の環に一般の大衆を置く。エラスムスは，「三職分」の内では耕す者（農民や職人；大衆としてエラスムスは押さえている）がキリストから最も遠くに置かれている。この世界の「最も疎漏な部分」と呼ばれるものであるが，「キリストのからだに所属して」[739] いて，「彼らは実際からだの目の部分であるばかりでなく，またふくらはぎ，足，恥部」[740] にあたる部分である。「キリストの模範にしたがって，民衆がすこしずつキリストのうちで成長するまで，耐えなければならない」[741] し，「父のような慈悲で暖かく助けなければならない」[742] とエラスムスは説いている。エラスムスは，「すべての人は各人の分に応じてキリストを目がけて努めなければ」[743] ならないと言う。このように，司祭も国王も大衆もキリストに倣って，キリストを目標にして生活様式を組み立てることがエラスムスの中心となる「神学の綱領」である。

第三の環の外にはあるのはすべて，いつも，またあらゆる点で嫌悪すべきものである[744]。

---

[733] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』194 ページの 15 から 16 行目。
[734] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』194 ページの 16 行目。
[735] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』194 ページの 17 から 18 行目。
[736] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』194 ページの 20 行目。
[737] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』194 ページの 20 から 195 ページの 1 行目参照。
[738] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』194 ページの 20 から 195 ページの 1 行目。
[739] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』195 ページの 3 から 4 行目。
[740] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』195 ページの 4 から 5 行目参照。エラスムスの社会認識は，「キリストの体」に喩える社会論である。大衆（農民や職人など）を四肢（足や腕）に喩えているのであろう。エラスムスがこの世界の「最も疎漏な部分」として大衆を見ていたことは，欲望（野望，金銭欲，情欲など）に大きく支配される階層として大衆（農民や職人）を捉えていたと思われる。
[741] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』195 ページの 10 行目。
[742] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』195 ページの 9 から 10 行目。
[743] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』195 ページの 13 行目。エラスムスの社会（現実の社会も，キリストのからだとしての社会）は，階層秩序が固定している社会構造をしていると思われる。たとえば，ある農民が貴族になることがない社会であると理解される。
[744] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙—エンキリディオン第二版への序文』196 ページの 4 行目。エラスムスは，最

この種類には，「野望，金銭欲，情欲，怒り，復讐心，嫉妬心，中傷，その他の悪徳」[745]が入る。これらが，敬虔と義務の仮面を装って，「正義と法とを口実にし暴君的支配を行う」[746]とき，また「宗教により生じた機会に利得の対策を講じる」[747]とき，また「教会を擁護するという名目によって現世の権力を追い求める」[748]とき，さらに「キリストの教えと全くかけ離れたことがキリストの統治に役立つものとして命じられる」[749]とき，これらの悪徳は癒やしがたくなる，とエラスムスは説明している。

すべての人が向かって努力すべき目標はただ一つであり，それは「キリストとその最も純粋な教え」[750]である。しかし，人々の生活様式の一つ一つは「堕落の危険性」を持っていて，この危険性を明確に示している人は，「自分の属する身分階級を撤廃するのではなく，階級の利益になることを企てている」[751]と言う。たとえば，君主の幸福は「暴君的支配にさらされ，愚かさ，お追従，享楽により強く影響」[752]されるが，これらを避けなければならないと明示する人が君主の身分に値する，とエラスムスは言う。エラスムスは，君主たちは「痴愚神」に支配されないように配慮することを求めている。また，教会領の高位高官の人たちは，「とりわけ貪欲と野望」[753]という二つの悪徳（デーモン）に深く関わるが，だが，司教たちは「恥ずべき利得のためでなく」，「脅迫や命令によってではなく」，また「意志によって群れを支配するためではなく」，「彼らの生活の模範によって敬虔へと呼びだすように，群れを養うべき」

もキリストから遠い存在として各種の悪徳を置いている。この悪徳が聖職者たち，君主たちにあるいは大衆に使用されるとき，社会の調和が乱れると考えているのかも知れない。これらの悪徳は，「キリストのからだ」を構成するものとしてとらえているのであろうか。これらの悪徳は，エラスムスの獣的なものに含められるのであろう。この心に侵入すると堕落する。この侵入を抑えることが肝心である。

[745] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』196ページの3から4行目。

[746] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』196ページの5から6行目。

[747] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』196ページの6行目。

[748] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』196ページの6から7行目。

[749] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』196ページの7から8行目。

[750] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』196ページの10行目。

[751] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』197ページの7から8行目。

[752] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』197ページの9から10行目。エラスムス著（渡辺一夫訳）『痴愚神礼讃』の9（34から35ページ）に，「この世」を支配することを手助けする痴愚神一同をギリシア語で紹介している。つまり，「眉をひそめているのは，フィラウティア（自惚れ）です。眼に笑みをたたへてい拍手してゐるのは，コラキア（追従）です。とろりとろりと居眠りしてゐるらしいのがレテ（忘却）。兩肘を突いて手を組んでいるのが，ミソポニア（怠惰）です。薔薇の冠をいただき，香油の匂いを漂わせているのが，ヘドネ（逸樂）です。始終きょろきょろした眼附きをしてゐるのは，アノイア（輕躁無思慮）。むっちりした肉附きで，艶々したはだをしてゐるのが，トリュフェ（放蕩）。これやの若い女性たちのなかに，二種の神がゐます。美食の神と，深き眠りの神です。これらは皆，私に仕えてくれる連中で，私がいつまでも世界を支配し，王様たちの上に君臨できるやうようと，忠實に手助け」をする，と述べている。

[753] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』197ページの13行目。

と命じられている[754]，とエラスムスは言う。

2.3.3　修道士の生活

「この世」が転倒している実態（社会現象）を修道士の生活様式の変貌を通してエラスムスは概観している。修道士の地位には，貪欲と野望の他に，迷信[755]，尊大[756]，偽善[757]，中傷が一般に付いている。「真の宗教の頽廃と救済策を確証する人は宗教から人々をそらせるのではなく，かえって宗教へ向かって人々を訓戒している」[758] とエラスムスは言う。エラスムスは「真の宗教」について自問している。そして，「真のキリスト教的敬虔は迷信」に関わっていないか，「真正の愛が外観から」どれほど離れているか，また「毒舌が真正な宗教的敬虔と矛盾」しているか[759]，と自問自答している。

エラスムスは，修道士の起源とそのときの修道士の働きについて記述している。エラスムスは，その修道士を模範とすることを説いている。彼は，次のように書き始め，その起源やその働きを述べている。「修道生活の最初の起源は，偶像崇拝者どもの野蛮さから離れた隠棲」[760] であり，これに続いてできた「修道士の規定は，キリストを呼び戻すもの以外の何ものでもなかった」[761] と言う。他方で，世俗の「君主たちの宮廷は時折生活よりも名目上でキリスト教的」[762] であり，また「間もなく野望と貪欲の病いが司教たちを腐敗」[763] させたのみならず，「民衆も同様にあの最初にあった愛の熱意が冷めた」[764] ために，そのような「生活から隠遁（隠退）することをベネディクトゥスは熱心に求め，その後，ベルナルドゥス，次にその

[754] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』197 ページの 15 から 17 行目参照。
[755] 迷信については，本稿脚注 250 を参考にせよ。
[756] 前掲書『痴愚神礼讃』の 54（166 ページ）では，「自分が，いかにもえらい者だという風に自惚れて」いると言う。ここで，自分とは，修道士あるいは隠者のことである。
[757] 前掲書『痴愚神礼讃』の 54（169 ページ）において，偽善の修道士をあげている。その「ありとあらゆる種類の魚でふくれあがつた布袋腹」を尽きだしている者，「枡百杯分もの聖歌をがらがらがなぐり」たてる者，「一日たったの一回の食事とは言へ腹が裂けるほどに一杯食つて置きながら，幾万回となく断食をしたなど」と言う者，「七艘の船に漕載せねばならぬほどの山なす勤行を積んだ」と言う者，「六十年間，手袋を嵌めた指先ででなければ，金に触れた事はないと得意になって威張る」者，「聖歌を歌って喉が嗄れてしまった」と言う者，「寂寞世界に住んでいた爲に，すっかりぼけてしまったとか，絶えず默っていた爲に，物を言ふ習慣を失くしてしまった」と言う者，などの修道士を例に挙げている。彼らの人間臭のする典礼や細々とした伝承を守り抜いた報償が，修道士本人は，「天國をおいて他にない」と言う。
[758] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』198 ページの 6 から 7 行目。
[759] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』198 ページの 1 から 3 行目参照。
[760] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』203 ページの 20 行目。
[761] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』204 ページの 1 行目。
[762] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』204 ページの 2 行目。
[763] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』204 ページの 2 から 3 行目。
[764] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』204 ページの 3 行目。

他の人たちが志した」[765]とエラスムスは言う。彼らは純粋で単純なキリスト教を志したとエラスムスは見ている。

これらの人たちが志したことは，「純粋で単純なキリスト教」[766]であった。彼らは，「福音の教えにしたがって自由に選んだ友人たちとともに霊の自由のうちに生きること以外の何ものも願望していなかった」[767]ので，彼らは，「富に身震いし，名誉を，たとえ教会の名誉でも」[768]避けたのである。彼らは，「手を使って労働した。それは単に彼らが誰かの重荷にならないためではなく，余分にもつことによって他人の窮乏を助ける」[769]生活を旨とし，そして，彼らは，「山頂に居を定め，沼沢に庵を構え，砂漠や荒地に」[770]暮らし，多数の「大群衆を非難，鞭打ち，牢獄なしに，ただ教え，忠告，親切，生活規範によって」[771]指導した，とエラスムスは理解している。初期の修道士は，自給自足の生活をし，窮乏する貧民を支え，さらに大衆を鞭打つこともなく，牢獄に押し込めることもなく，諭しと優しさで指導し，生活の規範となっていた，とエラスムスは理解している。

その修道士の生活姿勢は富と共に変化するとエラスムスは考えている。エラスムスは，この修道士の生活[772]が裕福になると共に変貌することを述べている。エラスムスは，「富と共に次第に儀式が増して，真正な敬虔と素朴さが冷却した」[773]と言い，「修道院が世俗的な生活よりもひどく道徳において堕落」[774]し，「新しい制度の導入で重荷を負わされている」[775]と嘆いている。

修道士はかつて隠退生活をしていた。「今では俗世界の営みの真只中にすっかりひたりきって人間的な事柄に関して暴君的支配を明らかに行使している人たちが修道士と呼ばれ」[776]るとエラスムスは言う。エラスムスは，修道士の生活規律や生活習慣が富の増加と共

[765] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』204ページの3から4行目。
[766] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』204ページの5行目。
[767] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』204ページの7から8行目。
[768] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』204ページの10から11行目。
[769] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』204ページの11から13行目。
[770] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』204ページの13行目。
[771] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』204ページの13から14行目。
[772] 聖書の修道理念については，例えば，『マタイによる福音書』第10章10節に「旅行のための袋も，二枚の下着もくつも，つえも持っていくな。働き人がその食物を得る」，あるいは，『マタイによる福音書』第19章21節に，イエスの言葉として「もしあなたが完全になりたいと思うなら，帰ってあなたの持ち物を売り払い，貧しい人々に施しなさい」を挙げることができる。この生活と「この世」の修道士の生活を比較し，エラスムスは，富・財産がその生活をイエスから隔てさせている，と言う。
[773] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』205ページの11から12行目。
[774] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』205ページの13行目。
[775] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』205ページの14行目。
[776] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』205ページの15から17行目。エラスム

に堕落していったと「この世」の修道士階層を弾劾しているのかも知れない。さらに，彼らは「その服装のゆえに，また何らかの称号のゆえに，自分らと較べると他の人たちはキリスト教徒とは見なさないほど，自分たちを聖化された状態」[777] に帰していることを見て，エラスムスは，修道士の偽善性を提訴しているのかも知れない。

現実の修道士が彼ら自身以外をキリスト教徒ではないかのように振る舞っているのを見て，エラスムスは，キリスト教徒の「御国とは偉大なる修道院」[778] 以外の何ものでもないのかと反問している。実際「修道士は自分の修道院長，上長に服従」[779] するが，しかし，「市民たちは，キリストご自身が彼らの上に立てたのであって人間どもの権威がそうしたのではない司教や司牧者たちに」[780] 従っている，とエラスムスは説いている。前者（修道士）は「閑暇のうちに生き，他の人の施しにより身を養い，労苦なしに彼らのものとなるものを共有し」[781] ているが，後者（市民たち）は「努めて節約したものをそれぞれ自分の力に応じて困窮している人に分配する」[782] と説いている。エラスムスは，市民の中に修道士の起源を見るが，現実の修道士に世俗社会を見ている。エラスムスは，ここでも，社会が転倒していることを説いている。

エラスムスは，「すべての種類の生活において次のことがすべての人により共通に努力し

スは，この隠退者としての修道士と見ている。ゆえに，彼は，修道士の生活の理念型を聖アントニウスなどの隠修士に置いているのであろう。このことは，脚注 767 からも窺い知れる。

[777] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』205 ページの 17 から 18 行目。

[778] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』205 ページ 20 から 206 ページの 1 行目。今野圀雄著『修道院』（岩波新書，1981）に修道院の発生について述べられている。その I の 2 ページに「キリスト教修道制の父は一般にエジプト人聖アントニウス（251 年生-356 年没）と考えられている」とある。今野氏は，司教アタナシウス（296 年生-373 年没）によって著された『聖アントニウス』によって，裕福な家庭に生まれたアントニウスが福音書に導かれ，禁欲生活はいるいきさつを説明している。

今野氏は，その 10 ページから 24 ページにおいて，修道院の原点を「テラペウタイ集団」に置いている。テラペウタイとは，「治癒者」，「奉仕者」あるいは「礼拝者」を意味する。彼らはナイル川の西側にあったモイリス湖（現在のビルケット・カルム）の近くに住んでいた。彼らは財産を捨て，それを近親者に与え，城壁外に出て砂漠やオアシスに住んだ。彼らは，禁欲的（酒とあらゆる種類の肉食を断ち，水だけを飲む）で瞑想的な集団であった。さらに，この集団がエッセネ派の一派であろうと見做している。このエッセネ派が「クムラン宗団」，そして洗礼者ヨハネ，イエスに繋がる仮説を立てている。エッセネ派の思想は，私有財産を持たなく共有し，兄弟のように共同生活し，門戸は開放されていた。結婚は共同生活を妨げるものとして忌避された。

そして，その 23 ページでは，ある研究者の見解を引いて，「宗教儀式や組織の面でもクムランの共同体とエッセネ派，後者と使徒教会との間には外形的類似以上の密接な内的関連があり，しかもそれは教会の主要な伝統，特にキリスト教修道制の出現にみることができる」と言い，「エルサレムの使徒集団こそキリスト教修道制の原点」で，「クムランやエッセネ派におけるユダヤ修道制の継承であった」と述べている。

[779] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』206 ページの 1 行目。

[780] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』206 ページの 1 から 2 行目。

[781] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』206 ページの 3 から 4 行目。

[782] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』206 ページの 4 から 5 行目。

なければならない」[783] と説いている。すなわち，「各々自分の力に応じてすべての人の前に立てられているキリストという目標に向かって私たちは努力し」[784] なければならない，「私たちは互いに励まし合い助け合ってこの競争場で私たちを追い越している人たちを羨む事なく，私たちはまだ追いついていない弱い人たちを斥けて」[785] はならない，とエラスムスは説いている。キリストの愛に導かれ，強制のない（少ない）自由な生活を各自がおくることをエラスムスは期待し主張している。

エラスムスは，「神の前に自分に善いことを自慢しているあの福音書にでてくるパリサイ人のようにならないこと」[786] を，そして「キリストの忠告にしたがって，『私は無益なしもべです。なすべきことをなしただけにすぎません』[787] と言うこと，しかも心から言うこと，単に他の人々に対してではなく，自分自身に言うこと」[788] を求めた。またこれがエラスムス自身の生活の指針なのかも知れない。エラスムスは「自分に信頼しない人にまさって，だれも真に信じている人はいない」[789] と言う。「自分自身が大いに宗教的だと思っている人以上に真の宗教から遠く離れている人はいない」[790] と言う。「またキリスト教的敬虔にとって，現世のものをキリストに向けてゆがめ，人間の権威を神のそれに優先させるとき以上に悪しき関係」[791] はないと言う。エラスムスは，「キリストに向けて呼びかける人に服従する人は，キリストに服従しているのであって，人に服従している」[792] のではないと説いている。

むすびにかえて

エラスムスは，「この世」での日常生活における姿勢をキリストに倣うことを説いている。すなわち，敬虔な生活，かつ，キリストの愛の規則を実行する生活を説いている。社会を「キ

[783] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』206ページの15行目。
[784] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』206ページの16行目。
[785] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』206ページの15から18行目。
[786] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』206ページの19から20行目。例えば，福音書に出てくるパリサイ人として，日本聖書協会編『聖書』の『ルカによる福音書』第18章11節には，「パリサイ人は立って，ひとりでこう祈った，『神よ，わたしは他の人たちのような貪欲な者，不正な者，姦淫する者ではなく，この取税人のような人間でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食しており，全収入の十分の一をささげています』。」とある。
[787] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』207ページの1行目（この脚注番号は筆者自身による）。これは，『ルカによる福音書』第17章10節の引用文であるが，日本聖書協会『聖書』（1968年）では，この部分は「わたしたちはふつつかな僕です。すべき事をしたに過ぎません」と訳されている。
[788] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』207ページの2から3行目。
[789] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』207ページの2から3行目。
[790] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』207ページの3から4行目。
[791] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』207ページの4から5行目。
[792] 前掲序文『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』207ページの7から8行目。

リストのからだ」に見立て，キリストを頭として，「この世」の悪徳と戦うことの必要性を力説している。これは，エラスムスのキリスト教的哲学である。これが，エラスムスによって中世の神学者に対して突きつけられた，キリスト教神学である。その具体化は，彼の「二十二の教則」と好色，貪欲，怒り・復讐欲，名誉心などに対する救済策・予防策に表されている。

本稿では，キリストにならった生活のための「二十二の教則」を紹介し，さらに，エラスムスによる，好色，貪欲，怒り・復讐欲，名誉心などに対する，予防策についての提言についても紹介した。またエラスムスは，彼が生活していた時代や社会をどのように認識し捉え，改革しようとしていたのかについても考察した。彼の時代（社会）認識は，現実を「この世」として突き放して見ている所に特徴がある。それだけではなく，彼は「この世」を転倒した（逆さまになった社会）として描いている。彼は，キリストを目標に生活することを説き，一方では，「痴愚神」に支配される「この世」を嘆いている。その中で，人と人の争いを避けるために，「怒り」や「復讐欲」を抑えることを説き，派閥争いや国と国の争い（戦争）などについては，キリストの愛，平和，寛容，貞操を通して，その争いの空しさを指摘している。

エラスムスは，彼の君主政の国を前提としながら，君主の倫理や道徳として，「キリストの愛」の規則をあてがうことを説いている。エラスムスは，当時の「階層秩序に基づいた調和」あるいは「階層秩序的な世界」あるいはその「身分秩序」を否定してはいない。彼は，「この世」において，すべての社会階層の人々がキリストから遠く離れていることを非難しているが，その社会秩序を否定はしていない。キリストの愛を前提にして，彼の社会における「不平等性における調和」を肯定した。エラスムスの社会観は，社会秩序の調和を「キリストの体」として説明する“隠喩”による社会論[793]である。これは，難解な神学論を展開するのではなく，プラトンのように比喩によって人間や社会関係を説明する手法である。エラスムスは，「大衆」・「民衆」に語る手法として“隠喩”（キリストのからだによる説明）を採用している。

エラスムスは，「人間の生活は，まことに厳しい試練を経て不屈となった戦士ヨブが証人となっているように，不断の戦闘以外のなにものでないということ，またその心を現世という

[793] 前掲書『中世ヨーロッパの社会観』に，隠喩による社会論が丁寧に解説・説明されている。“隠喩”については，この書を参照されたい。この書の第３章では，人体としての国家と題して，社会を有機的に捉える観念として「キリストの体」が説明されている。『ローマ人への手紙』（12 章４節から５節）には，「なぜなら，１つのからだにはたくさんの肢体があるが，それらの肢体がみな同じ働きをしてはいないように，わたしたちも数は多いが，キリストにあって１つのからだであり，また各自は互いに肢体だからである」とある。甚野氏は，144 ページ３から６行目にいて，このパウロによって構想された「キリストの体」としての教会像では，教会組織の構成員と有機体の部分とが比較されてはいないが，パウロは，個々の信徒とキリストとの神秘的な関係を示唆するものとして“隠喩”を利用した，と述べている。

手品師が魅惑する玩具で捕らえて占領している人々の大群は，もう戦いが済んだも同然となり，その時ではないのに休日を祝い，全く平和を確信しきっていますが，彼らがはなはだしくあざむかれていることをも記憶しておかねばならないのです」と言い，「この世」での人間生活は，戦士ヨブを証人としてみているように，不断の戦闘であると考えている。多くの人々は，現世に魅了されて，戦いが済み平和であると確信しているが，これらの人々が欺かれていることをエラスムスは見抜いている。人々が生活しているときには，「邪悪きわまる悪魔」が彼らを「破壊させようとして上から絶えず見張って警戒している」のであって，現世（「この世」）は，決して全く平和ではない。既に本稿で見てきたように，悪魔たちは「多くのたくらみをもって，また千もの破壊の技術でもって私たちに対し武装」しており，彼らは「私たちの精神」を「毒を盛った投槍」でもって「刺し通そうとしている」とエラスムスは説いている。

エラスムスが想定していた社会生活は，今日の社会科学としての経済学において想定している消費者の生活姿勢と大きな違いがあるのであろうか？エラスムスは，確かに，富を避け，天からの贈与された物の配分について市場経済ではない世界での配分を想定していたかも知れないが，エラスムスが分析している社会は，理性と情念の格闘する人間から構成される社会であり，今日の市場経済を構成する人間と類似していると思われる。ただ財は生産されるかのようにみなしていて，神によって与えられる点が今日の市場経済とは大きく異なっている。

引用文献

（1）デジデリウス・エラスムス著（金子　晴勇訳）『エンキリディオン』（1504年）（『宗教改革著作集』第2巻（5ページから180ページ）に収録された『エンキリディオン』を使用）（教文館，1989年）

（2）デジデリウス・エラスムス著（金子　晴勇訳）『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』（1518年）（『宗教改革著作集』第2巻（181ページから206ページ）に収録された『ヴォルツ宛の手紙―エンキリディオン第二版への序文』を使用）（教文館，1989年）

（3）デジデリウス・エラスムス著（木ノ脇　悦郎訳）『新約聖書序文』（1516年）（『宗教改革著作集』第2巻（209ページから262ページ）に収録された『新約聖書序文』を使用）（教文館，1989年）

（4）デジデリウス・エラスムス著（渡辺　一夫訳）『痴愚神礼讃』（1511年）（岩波文庫，2015年）

（6）アウグスティヌス著（加藤　武訳）『キリスト教の教え』（『アウグスティヌス著作集』第6巻に収録された『キリスト教の教え』を使用）（教文館，1988年）

（5）プラトン著（種山　恭子訳）『ティマイオス―自然について』（『プラトン全集』12巻に収録された『ティマイオス―自然について』（4ページから215ページ）を使用）（岩波書店，1975年）

（6）甚野　尚志著『中世ヨーロッパの社会観』（講談社，2007年）

（7）J.ホイジンガー著（宮崎　信彦訳）『エラスムス―宗教改革の時代―』（筑摩書店，1975年）

（8）F. M. Nichols『The Epistles of Erasumus; Arranged in Order of Time』第1巻（His Earliest Letters to his Fifty-First year）（英訳本）（Russel & Russel, New York, 1962）

（9）日本聖書協会編『聖書』（1968）

参考文献

（1）マックス・ウエーバー著（大塚　久雄訳）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義精神』（岩波文庫，1989）
（2）アダム・スミス著（大内　兵衛・松川　七郎訳）『諸国民の富』（四）（岩波文庫，1992）
（3）ジョン・ロック著（加藤　節訳）『統治二論』（岩波文庫，2010 年）
（4）プラントン著（藤沢　令夫訳）『国家』（上，下）（岩波文庫，2009 年）
（5）プラントン著（森　進一・池田　美恵・加来　彰敏訳）『法律』（上，下）（岩波文庫，1993）

（くぼた　よしひろ　マクロ経済学・金融論）